大堀城跡

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

財団法人　大阪文化財センター

序　　文

大堀城跡遺跡は、中近世において河内平野各地に所在した、城跡、館跡、環濠跡等の遺跡の一つとして、最近の調査で判明した遺跡であり、その後の分布調査ならびに試掘調査で遺跡の範囲が確認された。周辺には別所城、一津屋城、我堂環濠、三宅環濠等が所在し、中近世での集落遺跡としては注目すべき地域であるが、現在まであまり調査が進んでおらず詳しい遺構の状況は不明な点が多かったが、最近は小規模な調査が実施されるようになって新しい知見を得られるようになった。

今回の発掘調査によって、掘立柱建物群、溝、井戸等の遺構を数多く検出でき、この地域の空白を埋めることが出来、大きな成果をあげることが出来た。

この大堀城跡遺跡の発掘調査は、日本道路公団が計画された近畿自動車道天理～吹田線にかかる埋蔵文化財の調査として、昭和56年6月に着手し、昭和56年9月に現地調査を終了したものである。

本遺跡の発掘調査にあたっては、日本道路公団大阪建設局、財団法人大阪文化財センターはじめ調査関係各位並びに一般多数の方々のご協力、ご援助をいただいた。ここに深く感謝の意を表すると共に今後とも温かいご支援を賜わるよう切望してやまない。

昭和59年2月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　籔内盛雄

序　　文

松原市大堀町に所在する大堀城跡遺跡は近畿自動車道天理～吹田線（大阪線）の最南端の遺跡です。大和川を挟んで北には長原遺跡が、さらに北には現在調査中の城山遺跡が存在します。城山遺跡北半部からの３ｍ以上にわたる沖積層を有する大阪線内遺跡群の基部に大堀城跡遺跡は位置しています。このことは本遺跡の南から始まる近畿自動車道和歌山線の段丘上に立地する遺跡群の出発点としての位置であるともいえるでしょう。

遺跡名称に示される大堀城は、近世初頭に大堀氏の居城としてこの地に存在したとされていますが、今日迄の調査ではそのことを示す遺構は検出されていません。この遺跡で認められる最も古い人の跡は今から１万数千年も前の旧石器時代のものです。その後の長い空白期間のあと、古墳時代後期になって、竪穴住居の検出に見られるような、新たな胎動が始まります。これ以降、ほとんど途切れることなく今日まで土地利用されていたことが、遺跡から出土する遺物によって知られます。

遺跡の北側を流れる東除川が単なる自然流路ではなく、古代の地域開発の一手段として築造されたものであることが明らかにされつつあります。この遺跡の立地、その成立時期からみて決してこの開発と無関係ではありえないでしょう。そしてこの遺跡で検出された奈良時代後半から平安時代にかけての遺構遺物群は、本遺跡がこの時期この地域で重要な位置にあったことを想定せしめます。

一皮めくればすぐに洪積層のでてくるといった、大阪線のほとんどの遺跡群と全く異なった状態の遺跡ではありますが、その中に凝縮されている歴史は我々の分析能力をこえた内容を有しています。今後とも全力をあげて遺跡の歴史像を豊かに造りあげるべく努力していく所存です。

大阪府教育委員会、日本道路公団ほか関係各位の調査に対する御支援、御協力に対して深く感謝するものであります。

昭和59年２月

財団法人　大阪文化財センター
理事長　加　藤　三之雄

例　　言

1. 本書は日本道路公団が建設を進めている近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う発掘調査のうち、松原市大堀町に所在する大堀城跡第２次発掘調査概要報告書である。
2. 本調査は、大阪府教育委員会及び財団法人大阪文化財センターが、日本道路公団大阪建設局の委託を受けて実施したものである。
3. 本調査に要した費用56,690,000円はすべて日本道路公団が負担した。
4. 本調査は、昭和57年１月20日から昭和57年11月30日までの間実施した。
5. 本調査並びに本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施したものである。調査並びに本書作成に関係した者は以下の組織表のとおりである。

調査関係者組織表

事務局	理事兼事務局長	井上定清（現　東海アナース〔株〕顧問） 小林廣喜
	次長兼総務課長	大塚恭朗（現　大阪府立青年の家副所長兼業務課長） 尾田勝之
	主幹兼庶務係長	阪上允子、主査　田中喜代子、主事　秋山芳廣・灰本明子・千野和久・田口宗義・宮本哲男・鎗山洋子
	主幹兼普及係長	福岡澄男、技師　妹尾直子、主事　小島容子
調査総括責任者	業務課長	中井貞夫（現　大阪府教育委員会文化財保護課主査） 石神　怡
	業務課主幹	椋尾孝彦（現　大阪府土木部総合計画課主査） 吉村信男
長田分室	主幹兼業務第１係長	中西靖人（昭和56年９月より昭和57年６月まで業務第５係長兼務）、技師　山口誠治
久宝寺分室	業務第２係長	渡辺昌宏、技師　片山彰一
長吉分室	業務第３係長	赤木克視、技師　松岡良憲・一瀬和夫・平井貞子
	業務第４係長	広瀬和雄、技師　石神幸子・入江正則・辻本　武・藤沢真依・藤永正明・杉本二郎・岩瀬　透・阿部幸一・上林史郎・西村尋文
泉北分室	業務第５係長	尾上　実、技能員　立花正治

また、調査に際しては、日本道路公団大阪工事事務所、大阪府八尾土木事務所及び松原警察署等に格別の配慮を受けたと共に現場調査及び整理作業においては、以下の学生諸君の協力を

得た。

浅井利彦、家村富貴子、市原敦司、岩本敦美、上田浩子、浦上奈邦美、遠藤美栄子、太田邦子、川端修一、菊山孝子、木島哲治、小林妙子、後道　博、斉木優子、斎藤ゆみ、清水　修、高畠留美、高森郁恵、竹内佳代、月森香世子、富永健司、仲谷裕美子、西岡誠司、新田一貴、布目久夫、張本洋一、福島　敏、細川修平、松井智子、宮北千秋、村下佳子、森　哲哉、森　宏樹、山上弘、吉田恵子、脇田佳見

6. 本調査では、以下の諸氏の御指導、御協力を受けるとともに、鑑定を依頼した（順不同）。
山中一郎（奈良大学）、松沢亜生（奈良国立文化財研究所）、松藤和人（同志社大学）
小林博昭（岡山理科大学）、佐藤良二（奈良県立橿原考古学研究所）、佐藤隆春（八尾東高等学校）、日下雅義（立命館大学）、出水睦己（松原市郷さん室）。

7. 遺構の空撮並びに一部の実測図作製についてはアジア航測株式会社に委託した。

8. 本書の執筆分担は目次に示したとおりであるが、A調査区に関しては入江正則、B～C・E・W調査区の遺構に関しては西村尋文、遺物に関しては石神幸子が記述し、写真に関しては平井貞子・立花正治・片山彰一が行なった。また、梵字文瓦の解読は小島容子の協力を得た。また遺物トレースの一部は杉本二郎の協力を得た。

9. 本書の編集は、広瀬、石神の協力を得て西村が担当した。

10. 本遺跡は当初中・近世城郭の検出が予想されたため、契約時の遺跡名は、「大堀城跡」とされたが、調査を一部終了した現時点で、城郭に相当する遺構は確認できていない。そのため本文中の遺跡名の記載は、「大堀遺跡」とする。

11. 調査区は北より南へむけて、A調査区、B調査区、C調査区、とよぶ、またE、W調査区は、最近の大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う大堀城跡発掘調査によるものである。

12. 遺構名の記載の方法は、他調査区との誤認をさけるため、遺構記号と遺構番号との間に、調査区名をアルファベットで入れた。

例）溝　A　—　1

遺構記号　調査区名　遺構番号

なお遺構が複数の調査区におよぶ場合、複数の調査区名を記載することにした。

13. 本書の遺構平面図の方位はすべて真北を示す。

14. 遺構実測図の縮尺は 1/200、1/60、1/8、1/4、1/2を基本としたが、遺構の大きさにより縮尺を変えたものもある。

15. 遺物実測図の縮尺は基本的には以下の通りである。

土器　1/4、石器　2/3、木製品　1/8

16、レベル高は、T.P.土で表記した。

17. 遺構のスケールはm・cm、遺物はcm、石器の計測はmmで表示している。

18. 本調査にあたっては、写真、実測図などの記録を作成するとともに、カラースライドを多数作成したが、すべてを本書に掲載することは不可能であった。本書記述以外の資料については、財団法人大阪文化財センターで保管しているため、広く利用されることを希望したい。

大　堀　城　跡

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

目　　次

序文
例言
第Ⅰ章　はじめに……広瀬和雄……1
第Ⅱ章　大堀遺跡周辺の地理的・歴史的環境
　第1節　地理的環境……広瀬和雄……2
　第2節　歴史的環境……西村尋文……5
第Ⅲ章　調査の経過及び目的と方法……西村尋文……7
第Ⅳ章　調査の成果と概要
　第1節　A調査区……入江正則……9
　第2節　B、C、E、W調査区……西村尋文・石神幸子……41
第Ⅴ章　二、三の出土遺物の検討
　第1節　大堀遺跡出土の石器について……西村尋文……57
　第2節　大堀遺跡出土の製塩土器について……入江正則……77
　第3節　大堀遺跡出土の瓦について……入江正則……80
　第4節　奈良・平安時代初頭における土器の器種構成……入江正則……85
第Ⅵ章　調査により得られた知見と今後の課題
　第1節　大堀遺跡の歴史的変遷……入江正則・石神幸子・西村尋文……91
　第2節　奈良時代集落についての二、三の問題……広瀬和雄……93
　付章
　　Ⅰ　大堀遺跡出土の石器を構成する岩石種と推定産地……佐藤隆春……99
　　Ⅱ　大堀遺跡出土植物遺体について……山口誠治…105

図 版 目 次

図版１　大堀遺跡航空写真

図版２　遺構Ａ調査区全景

図版３　遺構Ａ調査区掘立柱建物

図版４　遺構Ａ調査区竪穴住居、井戸（竪穴住居Ａ－１～２、井戸Ａ－１）

図版５　遺構Ａ調査区井戸（井戸Ａ－２井戸枠、井戸Ａ－２井戸枠内下層遺物出土状況）

図版６　遺物Ａ調査区井戸（井戸Ａ－２井戸枠材）

図版７　遺物Ａ調査区溝、井戸出土土器（溝Ａ－１～２、井戸Ａ－１）

図版８　遺物Ａ調査区井戸、埋積谷堆積層出土土器（井戸Ａ－２井戸枠内、埋積谷堆積層）

図版９　遺物Ａ調査区土坑、埋積谷堆積層出土土器（土坑Ａ－１・４、埋積谷堆積層）

図版10　遺物Ａ調査区溝、溝状遺構出土土器（溝Ａ－２、溝及び溝状遺構）

図版11　遺物Ａ調査区溝状遺構、井戸出土土器（溝状遺構、溝状遺構及び井戸Ａ－２）

図版12　遺物Ａ調査区井戸出土土器（井戸Ａ－２掘方）

図版13　遺物Ａ調査区井戸、土坑出土土器（井戸Ａ－２及び土坑Ａ－３、井戸Ａ－１）

図版14　遺物Ａ調査区土坑出土土器（土坑Ａ－１、４）

図版15　遺物Ａ調査区土坑、埋積谷堆積層出土土器（土坑Ａ－５、埋積谷堆積層）

図版16　遺物Ａ調査区埋積谷堆積層、Ⅲ・Ⅳ層土出遺物

図版17　遺物Ａ調査区井戸、埋積谷堆積層出土土器（埋積谷堆積層、井戸Ａ－１）

図版18　遺構Ｂ調査区第二遺構面全景（北半部北西より、南西より）

図版19　遺構Ｂ調査区各遺構（落ち込みＢ－７台付壺出土状況、畦畔状遺構）

図版20　遺構Ｃ調査区南半部第二遺構面全景（南西より、北東より）

図版21　遺構Ｃ調査区各遺構、北半部第一遺構面全景（溝Ｃ－１～２・４～５、井戸Ｃ－２、土坑13～15、北半部北東より）

図版22　遺構Ｃ調査区各遺構（落ち込みＣＷ－１、溝Ｃ－３提瓶出土状況）

図版23　遺構Ｃ調査区溝断面（溝Ｃ－１土層断面、溝Ｃ－２土層断面）

図版24　遺構Ｗ調査区全景（北東より、南西より）

図版25　遺構Ｗ調査区各遺構（溝ＢＷ－５～７、落ち込みＣＷ－１）

図版26　遺構Ｗ調査区各遺構断面（溝ＢＷ－６土層断面、落ち込みＣＷ－１土層断面）

図版27　遺構Ｅ調査区全景（第一遺構面北東より、第二遺構面北東より）

図版28　遺構Ｅ調査区遺構・土層断面（土坑Ｅ－８軒丸瓦出土状況、Ｗ区南壁土層断面、Ｅ区南壁土層断面）

図版29　遺物Ｂ・Ｃ・Ｗ調査区、古墳～平安時代遺構出土土器（溝Ｃ－２～３・ＢＷ－６、落

ち込みB－7）
図版30　遺構E調査区、鎌倉～室町時代遺構出土瓦（土坑E－8）
図版31　遺物B・W調査区、古墳～奈良時代遺構出土土器（溝BW－6～7）
図版32　遺物B・C・W調査区、奈良時代遺構出土土器・土製品（建物B－1、溝B－1～2、落ち込みB－1～2・C－1）W
図版33　遺物B・C・W調査区、鎌倉～室町時代・江戸時代以降遺構出土土器・瓦（溝C－1～2・BW－5、土坑C－1・13・15）
図版34　遺物石器(1)
図版35　遺物石器(2)
図版36　遺物石器(3)
図版37　遺物石器(4)
図版38　遺物石器(5)
図版39　遺物製塩土器
図版40　遺物瓦

挿　図　目　次

第1図　調査地と周辺の遺跡分布……4
第2図　大堀遺跡位置図……5
第3図　調査区配置図（1/2000）……7
第4図　A調査区土層柱状図……9
第5図　竪穴住居A－1～2　平面、断面図（1/60）……10
第6図　竪穴住居A－2、溝A－1～2出土土器（1/4）……11
第7図　溝A－2　断面図（1/20）……12
第8図　A調査区　掘立柱建物　平面図（1/100）……15～16
第9図　井戸A－1　平面、断面図（1/40）……17
第10図　井戸A－1出土土器（1/4）……18
第11図　井戸A－1出土　曇昔土器（1/2）……19

第12図　井戸A－2　平面図（1/40）……20
第13図　井戸A－2　井戸枠南側面図（1/20）……20
第14図　井戸A－2　井戸枠内下層遺物出土状況（1/10）……20
第15図　井戸A－2　井戸枠材（1/4）……21
第16図　井戸A－2　掘方出土土器（1/4）……23
第17図　井戸A－2　井戸枠内出土土器（1/4）……24
第18図　溝A－3・5～7出土土器（1/4）……26
第19図　溝A－4出土　円面硯（1/4）……26
第20図　溝状遺構出土土器（1/4）……28
第21図　土坑A－1～4出土土器（1/4）……31
第22図　土坑A－5出土土器（1/4）……33
第23図　溝A－10出土土器（1/4）……34
第24図　小溝　平面図（1/200）……35
第25図　埋積谷堆積層出土土器(1)（1/4、166は1/8）……37
第26図　埋積谷堆積層出土土器(2)（1/4）……38
第27図　埋積谷堆積層、Ⅲ・Ⅳ層出土遺物（1/4）……40
第28図　Ⅲ・Ⅳ層出土　帯銙具（1/1）……40
第29図　A調査区遺構平面全体図（1/200）……付図
第30図　基本層位模式図……41
第31図　構BW－7出土土器（1/4）……42
第32図　溝C－3遺構平面図及び土層断面図（1/40）……43
第33図　溝C－3出土土器（1/4）……43
第34図　落ち込みB－7遺構平面及び断面図（1/40）……44
第35図　落ち込みB－7出土土器（1/4）……44
第36図　建物B－1遺構平面図及び断面図（1/60）……45
第37図　奈良時代遺構出土土器（1/4）……46
第38図　溝BW－6土層断面図（1/60）……47
第39図　溝BW－6出土土器（1/4）……48
第40図　落ち込みCW－1土層断面図（1/50）……49
第41図　溝C－1土層断面図（1/20）……50
第42図　鎌倉～室町時代遺構出土土器（1/4）・瓦（1/8）……51
第43図　溝C－2土層断面図（1/20）……52
第44図　土坑E－8遺構平面図及び土層断面図（1/20）……54
第45図　畦畔状遺構平面図（1/80）……54

第46図　江戸時代以降出土土器（1/4）……55
第47図　大堀遺跡B・C・E・W調査区遺構全体平面図（1/200）……付図
第48図　大堀遺跡出土石器(1)（3/5）……58
第49図　大堀遺跡出土石器(2)（3/5）……59
第50図　大堀遺跡出土石器(3)（3/5）……61
第51図　大堀遺跡出土石器(4)（3/5）……62
第52図　大堀遺跡出土石器(5)（3/5）……63
第53図　大堀遺跡出土石器(6)（3/5）……65
第54図　大堀遺跡出土石器(7)（3/5）……66
第55図　大堀遺跡出土石器(8)（3/5）……67
第56図　大堀遺跡出土石器(9)（3/5）……68
第57図　大堀遺跡出土石器(10)（3/5）……69
第58図　大堀遺跡出土石器(11)（3/5）……70
第59図　亀井遺跡出土旧石器（3/5）……71
第60図　製塩土器類型別実測図（1/5）……78
第61図　平瓦断面図及び拓本(1)（1/5）……82
第62図　平瓦断面図及び拓本(2)（1/5）……83
第63図　平瓦断面図及び拓本(3)（1/5）……84

表　目　次

第1表　玄武岩及び安山岩の石質一覧表……71
第2表　サヌカイト石器一覧表……73
第3表　玄武岩及び安山岩の石器一覧表……75
第4表　製塩土器類型別出土重量表……79
第5表　奈良・平安時代初頭における土器の器種構成表……86

付章　図版目次

図版１　岩石の顕微鏡写真(1)…… 103
図版２　岩石の顕微鏡写真(2)…… 104
図版３　溝Ａ－２、井戸Ａ－２　出土植物遺体…… 110

付章　挿図目次

第１図　二上山の地質図…… 101
第２図　信貴山周辺の火山岩岩脈…… 102
第３図　溝Ａ－２、井戸Ａ－２　植物遺体出土率…… 106

付章　表 目 次

第１表　溝Ａ－２、井戸Ａ－２　同定植物遺体一覧…… 108
第２表　溝Ａ－２、井戸Ａ－２　同定植物遺体一覧…… 109

第Ⅰ章　は　じ　め　に

松原市大堀付近は、南北朝期に「大堀庄」、また近世初頭には「大堀城」が存在したと推定され、松原市遺跡分布図にもその関連遺跡が記載されている。さて、この遺跡地を近畿自動車道大阪線が通過することになった。大阪府教育委員会と日本道路公団では協議の上、試掘調査を実施することになり、調査が（財）大阪文化財センターに依頼された。

第１次調査（試掘調査）は、昭和56年７月１日から８月31日まで実施され、当初の予想とは異なる古墳・奈良・平安時代の遺構・遺物が検出された。この結果に基づいて第２次調査(本調査)が行なわれることになった。

第２次調査は、大阪府教育委員会、（財）大阪文化財センター、日本道路公団による三者契約が昭和57年１月19日に締結され、同２月１日から59年３月31日の委託期間で実施することになった。この調査は近畿自動車道大阪線の大半の遺跡と同じく、２回に分けて行なわれた。まず道路橋脚部の位置決定の資料を得るために、幅10mのトレンチ調査を昭和57年４月１日開始した。調査は同10月末日に終了したが、奈良・平安時代の掘立柱建物をはじめ、多くの遺構が検出されたため、道路橋脚位置決定についての協議が長びくことになった。

いっぽうトレンチ調査終了後、出土した遺物や検出した遺構の整理事業を実施していたが、ほぼその概要がまとまるにいたった。本来ならば道路橋脚位置についての発掘調査の成果を待った上で一冊の報告書として刊行すべきであるが、道路工法等の協議についての見通しが昭和58年６月現在、たっていないため、とりあえずトレンチ調査だけの概要を報告することにした。

近畿自動車道大阪線建設に伴う発掘調査としては、今回報告するトレンチ調査と、その結果に基づき、遺構保存を考慮した道路橋脚位置についての調査とで完結するわけであり、遺跡についての調査報告ならびに考察等も一体のものであることが望ましいのはいうまでもない。しかし、上記の事情によりトレンチ調査だけの報告になったため、不都合な箇所もみられるかもしれない。御容赦をお願いしたい。

なお大堀遺跡については、昭和57年11月から58年１月まで、大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う発掘調査が、（財）大阪文化財センターにより実施されており、発掘調査報告書が既に刊行され、その成果の一部は、当概要報告書に含まれている。

第Ⅱ章　大堀遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節　地理的環境

厚い沖積土壌で覆われた河内平野の南側には洪積段丘が拡がり、両者があいまって大きな平野の景観を形造っている。ただ、地理学的には厳然と区別される両者であるが、開発が一方的に進み地形の改変が極めて著しいこの近傍では、地形は恰かも連続するかのような感を受ける。しかし、過去に遡及すればする程、地形は人間の生活にとって大きな前提的制約として眼前に立ちはだかっていた。

さて、凹凸が乏しい沖積地に比較して、洪積段丘は長時間の侵食作用に基づく多数の谷地形により、いくつかに分断されるのを常とする。沖積地に接する付近では、先端に大阪城をのせ河内平野の西を限る上町台地、東には津堂城山古墳や岡ミサンザイ古墳（仲哀陵古墳）などが立地する段丘、あるいは市の山古墳（允恭陵古墳）や誉田山古墳（応神陵古墳）がその雄姿をたたえる国府台地などがみられるが、それらにはさまれて沖積地に突出するように南から北へ伸びる洪積段丘がある。これが大堀遺跡の所在する段丘である。

この段丘も例にもれず数多くの開析谷が刻まれており、それらは現在溜池として利用されていることが多い。そのなかでも大堀遺跡に西接する開析谷はことに大きく、瓜破霊園の東側を南から北へおよそ2Km以上のび、途中、馬池、また谷頭部付近には上池が築造されている。この谷が原始以来、人間の生活とどのようにかかわってきたかはよくわからないが、現在のところ、大堀遺跡の西を画する地形的標識として認識したところでさほど大過はないであろう。一方、段丘東側の崖下には東除川が北流しており、さらにその東側には沖積地が拡がる。現代の開発による侵食が始まる以前は水平な景観を呈する水田地帯であったこの沖積地も、開発に伴う発掘調査が進行するにつれ、やはり地形の起伏が存在し、それに対応した土地利用がなされていたことが、徐々にではあるが判明しつつある。勿論段丘上の生活がこれら沖積地のあり方と決して無関係でありうるはずはないけれども、取り敢えずは東徐川の付近、つまり段丘崖をもって大堀遺跡の東限としておきたい。

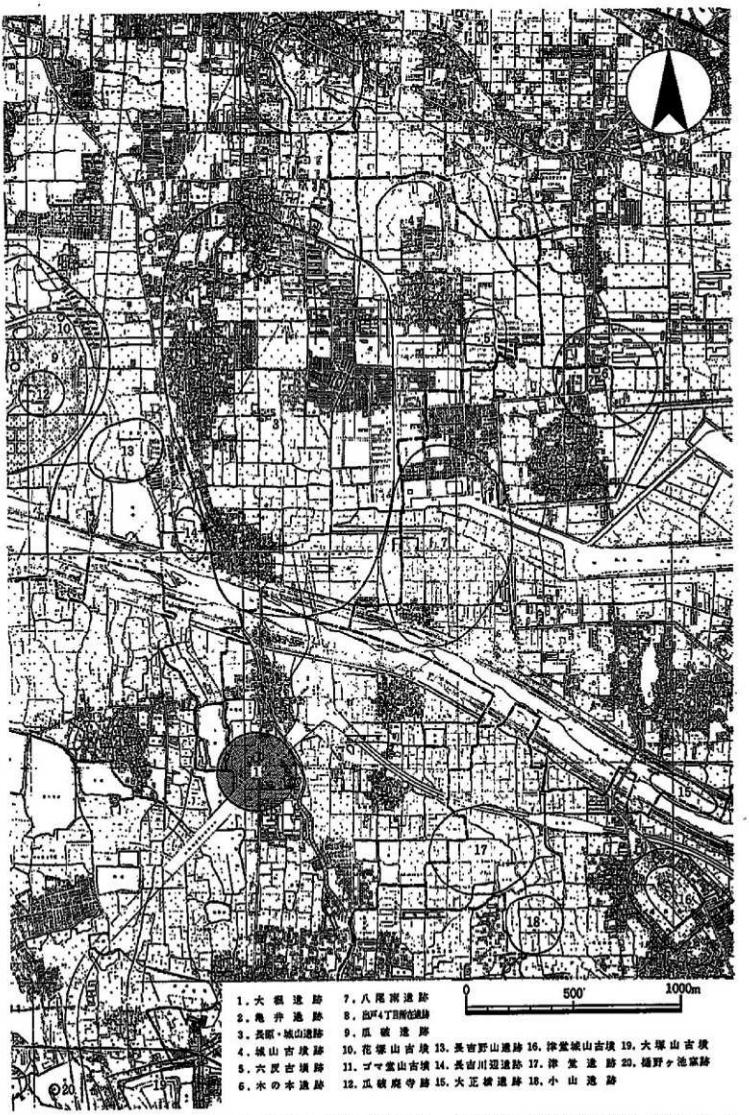
地形は刻々と変化する。遺跡を対象として人間の歴史を問題にする場合、この文字にするとわずかなことが重要となる。つまり、地形一般が問題になるのではなく、その時々の地形、ことに微地形が人間の生活と微妙にかかわってくる。今回の調査でも判明したように、段丘面においても地表に痕跡を残さない浅い開析谷が堆積されていたし、かつ、遺構のあり方などから判断すると、段丘面そのものはかなり削平されている。こういった現象がいかなる社会関係に起因するのか、自然の営為なのか、あるいは人為に基づくのか、もしくはその複合なのか、今後調査の成果を踏まえて十分に考えていかねばならない。

大堀遺跡がその一画を占める洪積段丘の北に大きく拡がる沖積地は、扇状地性低地、三角洲性

低地、潟湖性低地、自然堤防、旧河道などに地形分類されるが、これらは現地表面の分類であって、一定の時間的累積の結果を表現している。地形の変遷は上述した洪積段丘に比較して、沖積地のそれはかなり激しい。一般的には沖積地形成の基因となる土砂は河川によって運搬される。1704年に付け替えられる以前の大和川は、石川と合流したのち、玉串川、長瀬川、平野川の主要な分流となって河内平野に流れ込んでいたことが、これら三河川が大きな自然堤防を発達させていることから推測される。また、南からは東除川、西除川が前述の洪積段丘にはさまれた谷地形を北流して平野川に合流しており、これらの主要河川が河内平野の主体となる沖積地を形成したわけである。こうした地形の原景観がいつ頃まで遡及しうるのかといった課題を克服していく必要を感じるが、ここ数年来、実施されている近畿自動車道に伴う発掘調査の成果を垣間みると次のようになる。旧長瀬川、旧平野川の二大河川については、ほぼ7世紀頃には、大和川付け替え以前の流路とほぼ合致していたようである。また各遺跡における7世紀以降の遺構面等のレベルは、現代の耕土面とさほど変化のないものが多い。すなわち、7世紀頃には大和川付け替え以前の原景観が形成され、大和川付け替えによって現代の景観に近いものになった、ということが言えよう。さらに遡ると、5世紀頃の遺構面が現代の地表面に近い遺跡も多々あり、この頃に土砂堆積のピークを終えた地域も顕著であったように思える。しかしそれ以前、ことに弥生時代になると、各遺跡の土砂堆積量は千差万別で、かつその量も多く、各時期の地形復原はもはや個々の発掘調査で得られたデータの詳細な分析の集積以外には不可能と言わざるを得ない。

沖積地の形成、それは土砂供給量の多寡と、供給された土砂の滞留性とが基本的モメントと思われるが、前者については周辺の樹木の伐採、地面の耕起、水田化などが、一方後者は、「河内湾」「河内潟」「河内湖」などの変遷、あるいは海水準の変動などが深く関係する。また土砂を供給する河川の氾濫、あるいは河道の一時的もしくは長期的固定、さらには「難波の堀江」の開削など、自然的条件、人文的条件が相互的に作用しながら地形の変遷を規定していった。つまり自然の営為、自動的作用のみが地形を形成していった段階から、そこに人為が加えられる段階、人間による土地開発の進展により地形の改変の様相は変っていった。それとともに人間の生活基盤やその方法なども変化を余儀なくされる。そうした地形と人間の有機的連関を解明していくことが我々の一つの課題である。ことに沖積地のように低いところでは、水との関連からまさしく数10cmの微地形が問題となってくる。

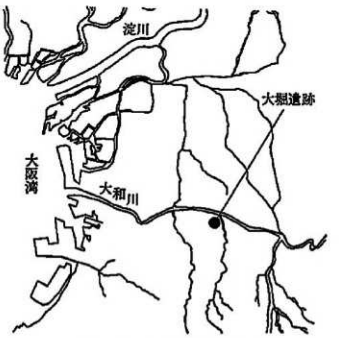
さて甚だ一般論に流れすぎた嫌いがなきにしもあらずだが、大堀遺跡が立地する洪積段丘の前面に大きく拡がる河内平野は、7世紀頃には現在の大和川を除いた地形の原景観を呈しており、7世紀以降の歴史を考える場合、大和川付け替え以前の地形を想定してもさほど乖離はないと思われる。ただ遺跡の所在する段丘については、開析谷が溜池に利用されるのはいつ頃か、あるいはそれ以前はどのような状態であったのか、また段丘面が削平された時期、その要因など、遺跡の内容を解釈するための地理的課題はいくつかある。それらが人間の行動様式の解明と一体となったときこそ、真に遺跡が理解されたということになるのであろう。



第1図　調査地と周辺の遺跡分布　（大阪府文化財分布図を複製、使用した。）

第2節　歴史的環境

大堀遺跡周辺には数多くの旧石器時代から近世までの遺跡が分布しており、大阪府下においても、有数の遺跡地帯といえる。以下、第1図の遺跡分布図を用い主要な遺跡を時代別に見ていきたい。



第2図　大堀遺跡位置図

旧石器時代　大堀遺跡の周辺地域は、最近の発掘調査に伴い旧石器の出土を報じる遺跡が増加している。主要な遺跡をあげると、北方 2.4Km地点に位置する亀井遺跡からは、有舌尖頭器、縦長剥片、翼状剥片、石核が出土している。[註-1] 長吉川辺遺跡・長吉野山遺跡・八尾南遺跡等の諸遺跡からは、少量ながらも、剥片・石核等の出土を見ている。また瓜破遺跡からは、国府型ナイフが数点出土している。なお長原遺跡においては、接合資料を含む、良好な遺物包含層の検出に成功している。[註-2] これらの遺跡の所在する地点は、羽曳野丘陵の前面に広がる洪積段丘及び瓜破台地の縁辺部にあたり、今後の調査に伴い遺跡数は増加するものと思われる。

縄文時代　縄文時代の主要な遺跡として、長原遺跡及び八尾南遺跡があげられる。長原遺跡からは縄文時代晩期に属する多量の土器、石器を伴って竪穴住居跡やV字溝、土坑などが検出され、[註-3] また最近の調査では、縄文晩期の土器棺が多量に検出された。[註-4] 八尾南遺跡からは縄文後期の河道、縄文晩期の溝、土坑等が確認されている。[註-5] 両遺跡の調査により、当地域の縄文時代集落の様相が明らかになりつつあることは確かである。

弥生時代　弥生時代にはいると当地域の遺跡数及び規模は増大する。それらの遺跡は古大和川の分流が形成した自然堤防上を中心に位置していて、農耕開始に伴う河内平野における開発史にとって、欠くことのできない様相を見せている。主要な遺跡をあげると、亀井遺跡、長原遺跡、瓜破遺跡、八尾南遺跡などがあげられる。なかでも亀井遺跡[註-6]及び瓜破遺跡[註-7]は、前期より後期に続く当地域の拠点的集落であり、当時の貴重品であると思われる青銅製品（亀井遺跡一貨泉・銅鐸片・小型仿製鏡・銅鏃、瓜破遺跡一貨泉・銅鏃）が出土している。

古墳時代　前方後円墳に代表される古墳時代の主要な遺跡は、南方 1.5Km地点に河内大塚山古墳、東方2Kmに津堂城山古墳がある。また従来まで空白地帯であった平野低地部においても、最近の調査により、亀井、長原、長吉川辺、八尾南、出戸4丁目所在遺跡[註-8]等の諸遺跡より5世紀代の小型方墳が多数確認され、従来の立地観をくつがえしている。また、古墳時代の集落跡として位置づけられる主要な遺跡として、八尾南、木の本、長原、津堂遺跡等の諸遺跡があげられ、長原、八尾南両遺跡においては、稲作農耕に伴う水田跡が確認され、より一層古墳時代集落の実態

が明らかになりつつある。

奈良時代　奈良時代にはいると、遺跡数は減少し、主要な遺跡としてあげられるものは、当遺跡を含め瓜破廃寺があげられる。瓜破廃寺からは飛雲文様の軒丸・軒平瓦をはじめ、多量の平瓦が出土していて、具体的な寺院遺構が遺存することも十分考えられる。[註一9] この他にも、本遺跡の南約1Kmの所には、古代の道と推定される大津道がある。また本遺跡周辺の沖積地には、東西・南北方向に整然と区画された条里制地割が広がっている。

平安時代以降　主要な平安時代以降の遺跡は、長原遺跡及び八尾南遺跡等があげられる。長原遺跡からは、建物を含む平安時代～鎌倉時代にかけての集落の様相が明らかになっている。また最近の調査により、同地域の平安時代以降の資料は増大し、諸集落の実態は明らかになりつつある。

以上のように、大堀遺跡周辺には、旧石器時代より連綿と各時代の遺跡が所在していることがわかる。また亀井、長原、瓜破、八尾南等の大規模な複合遺跡が所在することも、古代より栄えた地域であることを示している。

〔註〕

(註一1) 中西靖人、宮崎泰史、西村尋文ほか　1982　（『亀井遺跡―寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』）大阪文化財センター

(註一2) 大堀遺跡周辺の旧石器出土遺跡については、『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』で触れられている。
森　毅　1982　「第Ⅳ章第1節旧石器時代」（『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅰ―大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書―』）大阪市文化財協会

(註一3) 氷島哲臣慎ほか　1982　（『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ―大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書―』）大阪文化財協会

(註一4) 大阪市文化財協会　1982　「大阪市立第8幾護学校建設に伴う長原遺跡発掘調査概要」（『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会（第7回）』）

(註一5) 山本　昭、米田敏幸、原田昌則ほか　1981　（『八尾南遺跡―大阪市高速電気軌道2号線建設に伴なう発掘調査報告書―』）　八尾南遺跡調査会

(註一6) 高島　徹、尾谷雅彦、寺川史郎、金光正裕、広瀬雅信、畑　暢子、清原弘美ほか　1980　（『亀井・城山―寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書―』）大阪文化財センター

(註一7) 山本　博　1940　「河内国大和川床出土の弥生式遺物に就いて」（『考古学雑誌』）　30―11、31―2・7

(註一8) 大阪市文化財協会　1979　「平野区長吉出戸4丁目所在遺跡発掘調査略報」（『大阪府下埋蔵文化財担当者研究会第1回資料』）

(註一9) 氷島哲臣慎、田中清美ほか　1981　（『瓜破北遺跡Ⅱ―大阪市下水管渠築造工事（瓜破地区その8・その9）に伴う発掘調査報告書―』）大阪市文化財協会

第Ⅲ章　調査の経過及び目的と方法

調査による経過

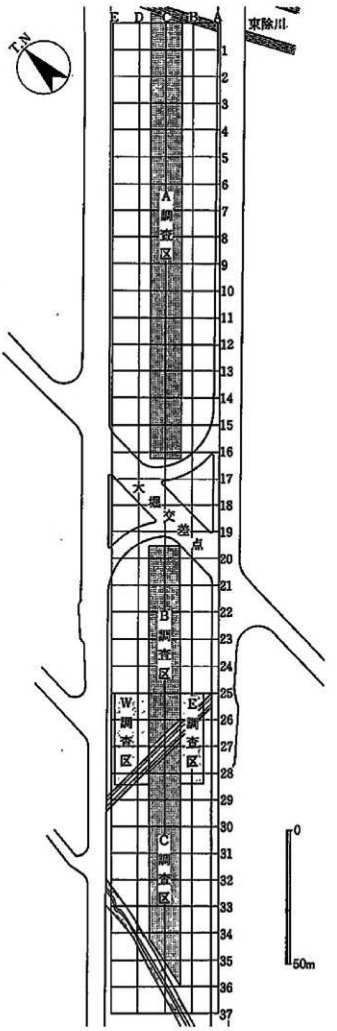
大堀遺跡の発掘調査は、日本道路公団大阪建設局からの全面委託を受けて実施したもので、調査に先立ち大阪府教育委員会、財団法人大阪文化財センター、日本道路公団大阪建設局の三者による契約を締結し、現地調査は財団法人大阪文化財センターが担当実施した。なお調査作業の内、機械・人力掘削はじめ準備工事等は、調査に伴う補助作業として土木施工業者に請負わせる形で実施していった。調査は、まず遺構及び遺物の包含状態を確認するため、昭和56年6月より2ケ月間、第1次調査を実施し、翌昭和57年4月より同年10月までの期間、第2次調査を実施した。なお、切り拡げ部の調査にあたる第3次調査については、橋脚位置及び調査区域について現在三者間において交渉中であり、近日中に開始される予定である。

調査の目的

大堀遺跡の調査は過去一度もなされたことはなく、わずかに文献資料中に『大堀庄』の記載[註一1]があるのみであった。そのため第1次調査（試掘調査）時の目的は、遺跡の範囲及び遺物の散布状況等を確認することにあった。また、試掘調査の成果として、当初推測された『大堀城』『大堀庄』に関連する遺構を見い出すことはできず、むしろ古墳時代の溝及び奈良時代の建物等の各種遺構を確認することができ、特に奈良時代の建物は集落跡の一端をおもわせ、当時の集落跡とその周辺の遺構を確認することが、第2次調査の大きな目的と変わった。

調査の方法

調査は、道路が高架道路であるため、経費、期間等の諸条件を考慮して、全面発掘調査より現況保存を優先した必要最小限度の調査を目的とし、発掘面



第3図　調査区配置図　(1/2000)

積を極力限定する方法がとられた。まず最初に路線中央の遺跡全長南北方向に幅10mのトレンチを設定し、その調査結果を検討して橋脚予定位置を決定するという、いわゆる“トレンチ調査方式”が採用された。調査区の設定は、調査区間に府道、用水路等を含んでいるため、調査区の分断を余儀なくされ、北より南へむけてA、B、C調査区、計3調査区に分けた。各調査区の長さは、A調査区 161m、B調査区76m、C調査区90mである。また最近、当大阪文化財センターにより、大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線事業に伴う大堀遺跡の発掘調査がなされ、[註—2] その調査区は、B、C調査区を東西にはさみ、東側をE調査区、及び西側をW調査区と設定された。調査区全体の地区割りは、第3図に示すように、10m×10mの区割りを設定して行い、遺物の取り上げも、遺構内出土遺物以外はこの区画内毎に行った。本書における遺構の位置等も原則としてこの区画によって示している。なお地区割りの基準線の方向はN—43°29′41″—Eである。各区画の地区名は、南北線を数字、東西線をアルファベットで示し、区割りの東西の交点の番号を南東優位の原則に従って用いた。

また、調査終了後旧石器時代の遺物包含層の有無を確認するため、任意に地区設定し、一部分地山を掘削したが、旧石器時代の遺物包含層を確認することはできなかった。

今回の調査では、いわゆる現地での発掘調査だけでなく、種子、石材の鑑定等、各専門分野からの参加を得て、当時の生活、環境の復元にも努めることにした。

〔註〕

(註—1) 大阪府史編集専門委員会 1979 (「大阪府史 第3巻」) 大阪府

(註—2) 西村尋文、石神幸子 1983 (「大堀城跡発掘調査報告書—大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う」) 大阪文化財センター

第Ⅳ章　調査の成果と概要

第1節　A調査区

A）基本層序

基本層序はⅠ～Ⅴ層に分層し得る。各層について簡単に説明を加える。

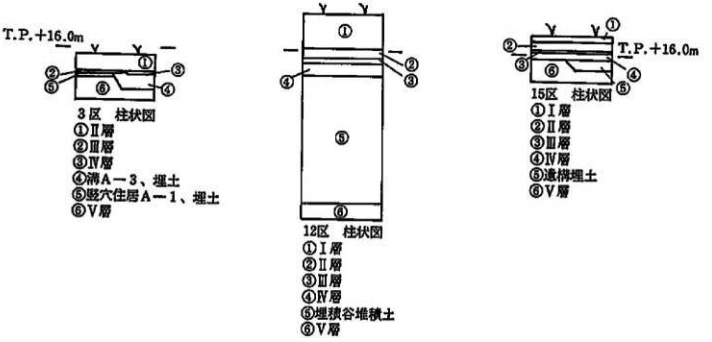
Ⅰ層　中央環状線道路工事に関連した盛土である。この層の上面が現地表面である。地表面の海抜高は16区では、T.P.+16.5m、3区ではT.P.+16.0mである。この層の厚さは地区によって異なり、40cmから全くない所まである。

Ⅱ層　黒灰色土層。中央環状線道路用地買収時まで、水田あるいは畑の耕作土であり、旧地表面だったものである。層の厚さは、25cmから全くない所まである。旧地表面は、3区ではT.P.+15.7m、8区ではT.P.+15.9m、14区ではT.P.+16.2mである。

Ⅲ層　灰褐色砂質土層。この層の性格は明らかではない。層の厚さは10cmまでで、地区によってさまざまであり、削平を受けたり、掘り返しが行なわれたりして、全く認められない所もある。遺物は少量であるが出土する。

Ⅳ層　灰褐色粘質土層。この層の性格は明らかではない。層は5cm～1cmの厚さである。この層はB・C3区、10～14区に存在し、特に後者からは多量の遺物を出土した。

Ⅴ層　灰白色粘土層、地山である。地区によって少し異なった土色、土質を示す。遺構の大半はこの層の上面から切り込み、埋積谷も存在する。この埋積谷の位置は、B9区、BC10～13区、C14～15区の一部分である。この層の上面は、15区はT.P.+15.8m、B14区はT.P.+15.2m、C13区はT.P.+14.8m、8区はT.P.+15.6m、3区はT.P.+15.2mである。C13区が埋積谷最深部である。



第4図　A調査区土層柱状図

B）古墳時代後期

この時代は、3～5区にて竪穴住居2棟、溝2条を検出した。遺構はまばらな分布を示す。

竪穴住居A－1（第5図、図版4）　調査区北端B3区に所在し、約半分は調査区域外に広がるが、検出した範囲での規模は5.6m×4.8m、深さ5cmを測る。本来はかなり大きなもので、一辺につき3本の柱で構成されていた可能性も考えられる。また、周囲には壁溝をめぐらしている。遺物は小さな破片を出土したのみである。埋土は暗灰紫色粘質土である。なお後に竪穴住居A－2が重複して建てられる。

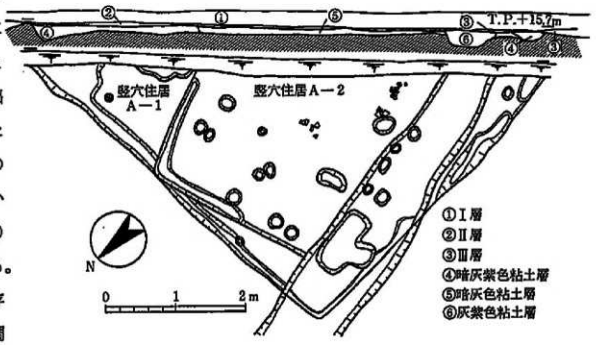
竪穴住居A－2（第5～6図、図版4）　検出した範囲内では、一辺 3.6mで他方の辺は溝A－3に切られている為明らかではない。深さは5cmを測り、竪穴住居A－1と同じく壁溝をめぐらしている。この竪穴住居内には数多くのピットが検出された。また床面から須恵器　杯、土師器　高杯・甕等の遺物が粉々になった状態で出土した。

出土遺物は、須恵器　杯・高杯、土師器　高杯・甕・かまど等である。

（1～2）は竪穴住居埋土中から検出した須恵器　杯である。両方とも小片である。（1）は受部径13.2cmを測る。色調は内面灰色、外面暗灰色を示し、胎土は少し大きな砂粒を含み、焼成は良好である。受部は水平につまみ出し、立ち上り部はやや内傾している。内外面回転ナデである。（2）は受部径13.8cmを測る。色調は内外面とも淡灰色、胎土は非常にきめ細く、焼成は良好である。調整は底部外面にヘラケズリが認められる。その他の部分は回転ナデである。受部は水平につまみ出され、立ち上り部は内傾している。

溝A－1（第6・29図、図版7）　調査区中央部B・C7～9区にて検出した。検出長32.5m、幅約 1.1m、深さ25cmを測り、浅い『U』字形の溝である。埋土は暗灰紫色粘土である。方向は東北東を示し、比較的真直ぐにのびる。この溝は洪積段丘を直交する方向に横切っているのが特徴であるが、その性格は確定できない。

出土遺物は極めて少なく、図示する以外には土師器　壺の体部と思われる破片を2片出土したのみである。ただ図示した遺物がこの溝の時期を示すかというと即断し難い。（3）は土師器　高杯である。脚柱部径 3.6cm、残存高 9.8cmを測り、色調は外面褐色、内面は淡



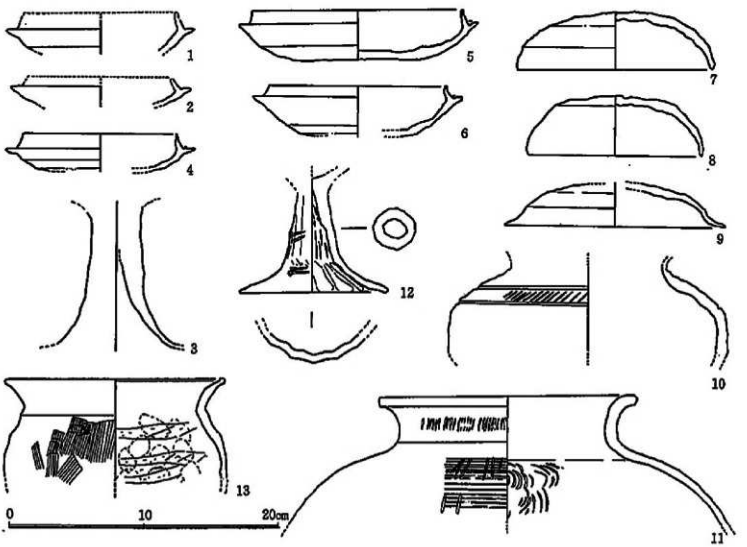
第5図　竪穴住居A－1～2平面、断面図　(1/60)

褐色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。形態は細い脚上部から緩やかな曲線を描きつつ開き端部に至る。先端は欠損して明らかではない。内面には、絞り痕が認められる。

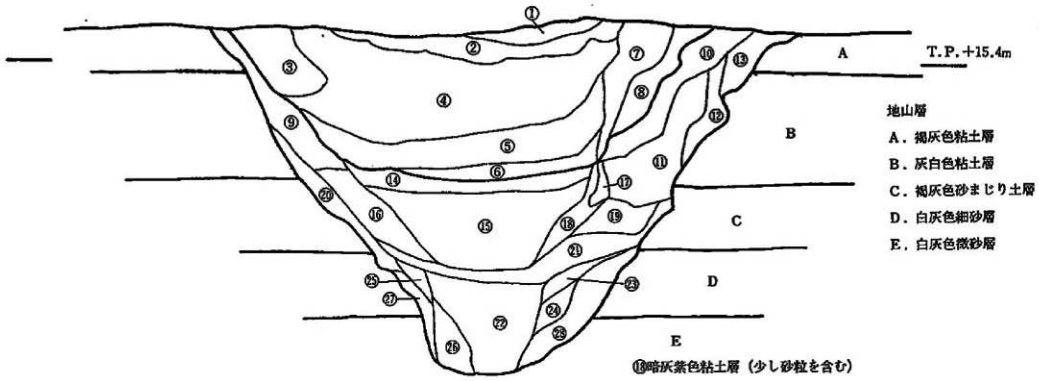
溝A－2（第6～7図、図版7、10）　調査区北端B・C4～5区より検出した。北東からカーブして西側へ伸びる。検出長16.3m、幅2.3m、深さ1.3mで断面は『V』字形を呈する。埋土は、大別すれば下層（9～28層）が粘土層、上層（1～8層）中央が細砂層であり、上層側面は、灰紫色粘土が堆積する。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・高杯・壺、土師器　椀・高杯・壺・甕である。

（4～6）は須恵器　杯である。（4）は口径11.5cm、器高 2.8cm、受部径14cmを測る。色調は外面青灰色、内面灰白色を示し、胎土、焼成は良好である。受部は水平に張り出し、やや内傾気味の立ち上り部の先端は尖り気味である。底部の回転ヘラケズリは、受部直下まで施されている。（5）は口径15.8cm、受部径17.8cm、器高 2.7cmを測る。色調は外面茶褐色、内面は灰茶色を示す。胎土は良好で、焼成はやや生焼けである。立ち上りは少し内傾するが垂直に近く、受部は少し上方を向く。底部は平らであり、全体は扁平な器形をなす。回転ヘラケズリは底部の¾を占める。（6）は口径13cm、残存高 3.8cm、受部径13.6cmを測る。色調は外面灰青色、内面は灰色を呈する。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。形態は、平らな底部から斜めに立ち上る体部とほぼ横方向に張り出す受部からなり、立ち上り部はやや内傾している。底部の⅔は回転



第6図　竪穴住居A－2、溝A－1～2出土土器　(1/4)



⑱暗灰紫色粘土層（少し砂粒を含む）
⑲灰紫色砂まじり粘土層

①淡灰褐色粘質土層
②灰色粘土層
③灰紫色砂まじり粘土層
④灰褐色細砂層
⑤褐色細砂層
⑥褐灰色細砂層
⑦灰紫色砂まじり粘土層
⑧褐灰色砂質土層
⑨灰紫色砂まじり粘土層
⑩灰紫色粘土層
⑪灰褐色粘土層（細砂を多く含む）
⑫灰紫色粘土層（細砂を少し含む）
⑬灰褐色粘土層（少し暗い）
⑭暗灰紫色粘土層
⑮暗灰紫色粘土層（⑭層より暗い）
⑯暗灰紫色砂まじり粘土層
⑰灰紫色砂まじり粘土層
⑳灰紫色砂質土層
㉑暗灰青色粘土層
㉒暗青灰色粘土層
㉓暗灰紫色粘土層
㉔暗灰紫色粘土層（㉓より少し暗い）
㉕暗灰紫色砂まじり粘土層
㉖暗灰青色粘土層（砂粒を少し含む）
㉗暗灰色砂質土層（砂粒が多い）
㉘灰紫色砂層（大小の砂粒からなる）

第7図　構A－2断面図（1/50）

ヘラケズリを施す。（7～9）は須恵器　杯蓋である。（7）は口径14.7cm、器高4.4cmを測る。色調は内外面暗灰黄色を示し、口縁部付近では淡灰青色を示す。胎土、焼成は良好である。やや平らな天井部から大きく彎曲して短く垂直に下り口縁部に至る。天井部は回転ヘラケズリ、口縁部は回転ナデ調整である。（8）は口径12.8cm、器高 4.5cmを測る。色調は外面暗灰褐色、内面は暗茶灰色を示し、胎土、焼成は良好である。天井部は回転ヘラ切りのままで、他は回転ナデである。（9）は口径16.5cm、残存高 3.2cmを測る。色調は外面黄褐色、内面は暗灰色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。この杯蓋は、あまり見る事のない形態である。丸みを少し持った天井部と、大きく水平に開く口縁部からなる。外面天井部は回転ヘラケズリを施し、内面は回転ナデである。（10）は須恵器　壺の体部である。頸部径は11cm、体部最大径20.9cmを測る。色調は内外面淡灰色を示し、胎土は良選され、焼成は良好である。形態はやや肩を張って、最大径部付近にて垂直に下る。内外面とも回転ナデである。肩部の下部に二条の沈線と、その間に右上から左下の列点文を刻む。（11）は須恵器　甕である。口径19cm、残存高 9.5cmを測る。色調は内外面灰色を示し、胎土、焼成は良好である。形態は大きく張った肩部を持ち、頸部は垂直から徐々に外反して水平に至り、先端は丸めている。体部外面は縦方向の平行タタキ成形の後に、全面にカキメ調整を施す。また、体部内面は同心円文が認められる。

（12）は土師器　高杯である。脚端部径10.9cm、残存高 8.3cmを測る。脚内面には、絞り成形痕があり、脚端部には指圧痕が放射状に並んでいる。脚柱部外側には目の粗い横ハケ調整の後、ナデ調整を施す。杯部は欠損している。（13）は土師器　甕である。口径16.4cm、残存高 7.6cmを測る。色調は外面暗灰色及び灰色を示し、内面は灰色で部分的に炭化物が付着している。頸部は外彎し斜め上に伸び、口縁部内側に一条沈線がみられる。体部内面は指圧成形の後横方向のヘラケズリ、口縁部外面は回転ナデ、体部は縦方向のハケ調整を施す。

C）奈良時代～平安時代初頭

この時期の遺構は、C13区、BC14～16区に集中しており、掘立柱建物5棟、柵列2条、井戸2基、土坑5基、溝5条、溝状遺構などが、また、このほかC2区、BC3区からも柱穴数個、溝1条が検出されている。なお、出土した遺物には、須恵器、土師器、黒色土器、灰釉陶器、製塩土器、屋瓦等がある。

掘立柱建物A－1（第8図、図版3）　BC15区に所在し、3間（6.75m）×2間（4.5m）の南北棟である。柱間寸法はそれぞれ2.25m（7.5尺）である。掘方は0.7m×0.5mの楕円形か方形である。深さは30cmである。この建物には、溝A－6が伴った可能性がある。主軸方位はN—7°—Eを示す。

掘立柱建物A－2（第8図、図版3）　B15～16区に所在し、4間以上（8.4m以上）×2間（4.2m）の南北棟である。柱間寸法は 2.1m（7尺）である。掘方は0.9m×0.8mの方形である。この建物には、溝A－4、A－7が伴った可能性がある。主軸方位はN—5°—Eを示す。

掘立柱建物A－3（第8図、図版3）　BC15区に所在し、3間（5.4m）×2間（3.6m）の

南北棟である。東側に0.6m離れて柱列があり、廂と考えられる。身舎、廂とも柱間寸法は1.8m（6尺）である。掘方は 0.6mの隅丸方形である。この建物には、溝A－6が伴うと考えられ、また井戸A－1はこの建物の時期には掘られていたと考えられる。主軸方位はN—9.5°—Eを示す。

掘立柱建物A－4（第8図、図版3）　C14～15区に所在し、2間以上（6.75m以上）×2間（3.6m）の東西棟である。柱間寸法は2.25m（7.5尺）と1.8m（6尺）である。この建物に南側 1.5m（5尺）の所に廂がつくと思われる。掘方の大きさは不揃いであるが、一辺0.8m×0.6mまでである。判明するだけで2間×2間に1間の廂付の建物と考えられる。主軸方位はN—6°—Eを示す。この建物には溝A－5が伴うと考えられる。井戸A－2もこの建物と同時期に使用されている可能性がある。

掘立柱建物A－5（第8図、図版3）　C14区に所在し、3間（5.4m）×2間（4.8m）の東西棟である。柱間寸法は2.4m（8尺）と1.8m（6尺）である。この建物は溝A－6を伴うと考えられる。主軸方位はN—6.5°—Eを示す。

掘立柱建物A－6（第8図、図版3）　B15区に所在し、2間（3.0m）×1間（1.95m）を測る南北棟である。柱間寸法は1.5m（6尺）と1.95m（6.5尺）である。主軸方位はN—5.5°—Eを示す。

柵A－1（第8図、図版3）　B15区に所在し、柱穴4個（8.4m）を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）である。主軸方位はN—7°—Eである。

柵A－2（第8図、図版3）　B15区に所在し、柱穴3個（6.3m）を検出した。柱間寸法は2.1m（7尺）である。主軸方位はN—10°—Eである。

これらの遺構はA調査区では2群にまとめられる。掘立柱建物A－1からA－3と柵A－1、A－2をあわせてA群と称し、掘立柱建物A－4とA－5をB群と称す。このほかB調査区にも掘立柱建物が2棟あり、これをC群と称す。それぞれの群での切り合い関係は古い順にならべると次の通りとなる。

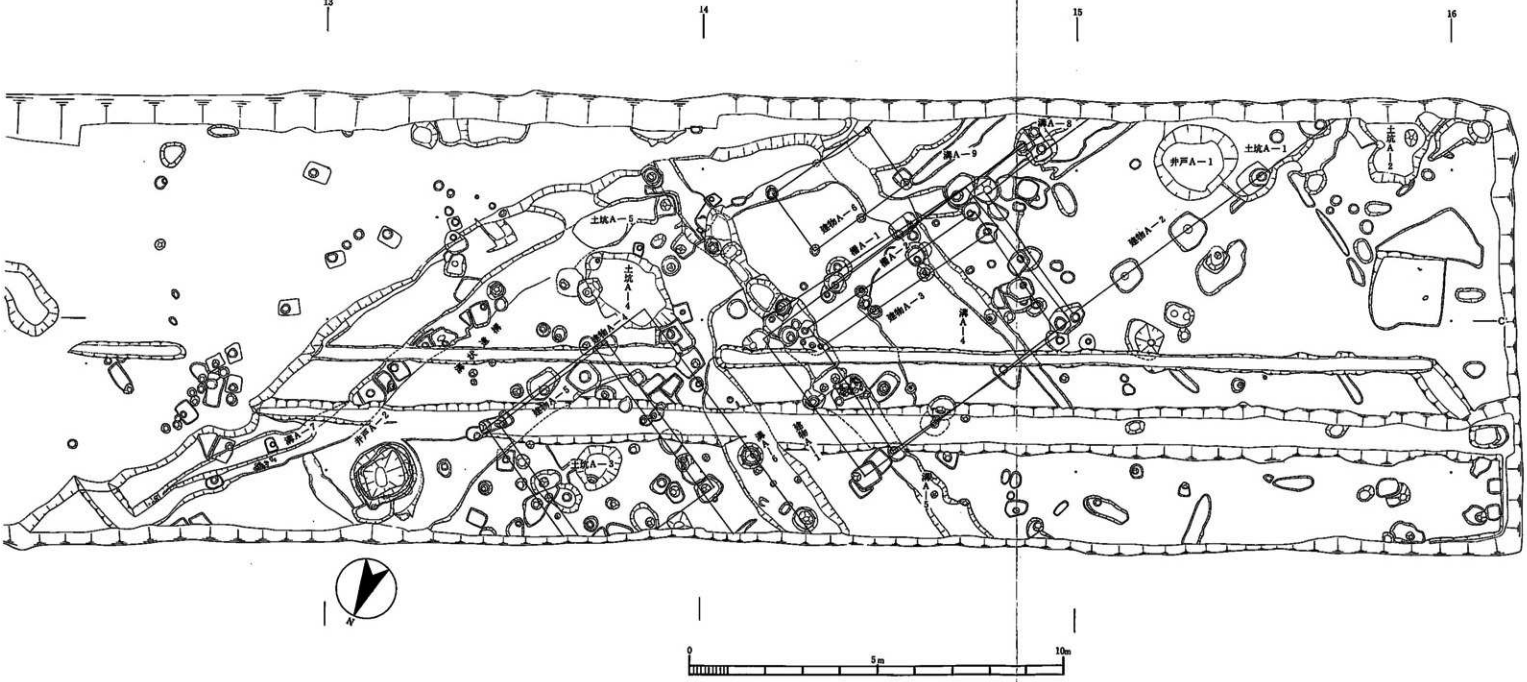
A群　掘立柱建物A－1→掘立柱建物A－2→掘立柱建物A－3→溝状遺構→柵A－1→柵A－2

B群　掘立柱建物A－4→掘立柱建物A－5

C群　掘立柱建物は互いに切り合わない。

これらの掘立柱建物及び柵の時期は、おおよそ8、9世紀と考えられる。柱穴は最大 0.9m×0.7mの隅丸長方形から、最小直径30cmの円形まであり、そのほか隅丸方形や楕円形のものも存在する。柱穴の深さは最深40cmである。柱痕径は最大15cm、最小7cmまである。

井戸A－1（第9～11図、図版4・7・13）　調査区南端B16区で検出した素掘りの井戸で、埋没後その上に土坑A－8が掘られている。規模は2.2m×2.0m、深さ 1.0mを測り、壁面はほぼ垂直に近い角度を示し、底部は平らである。埋土は掘方壁面に灰白色砂層が、中央部下層には

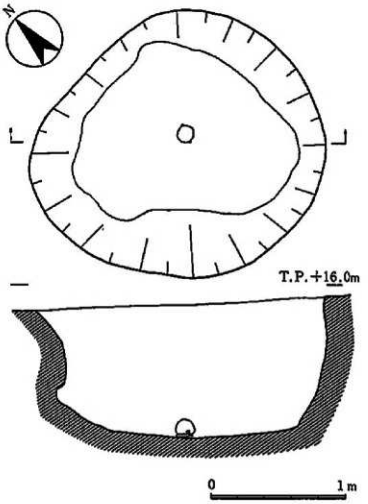


第8図　A調査区掘立柱建物平面図　(1/100)

紫灰色粘土層、上層は灰紫色粘土層が堆積している。遺物は上層、下層より数多く出土した。なお、(25) の把手付甕は底部中央にさかさまの状態で出土した。

井戸A－1上層　出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・甕、土師器　杯・皿・椀・鉢・高杯・甕・かまど・羽釜等である。更に墨書土器が1点出土している。

(14) は須恵器　杯である。口径9.5cm、高さ 4.2cmである。口縁部は高台部からすぐ外上方に立ち上り、わずかに内彎する。口縁部内外面は回転ナデである。高台取付け部が沈線状に窪んでいる。(15) は須恵器　甕、口径20.6cmを測る。口頸部は外反し、口縁端部は水平で、内側に少し突出している。肩は大きく張り、肩部外面は縦方向の平行タタキの上からカキメ調整を施す。



第9図　井戸A－1平面、断面図　(1/40)

内面は同心円文が認められる。口頸部は回転ナデである。この2点は時期の少し新しいものである。

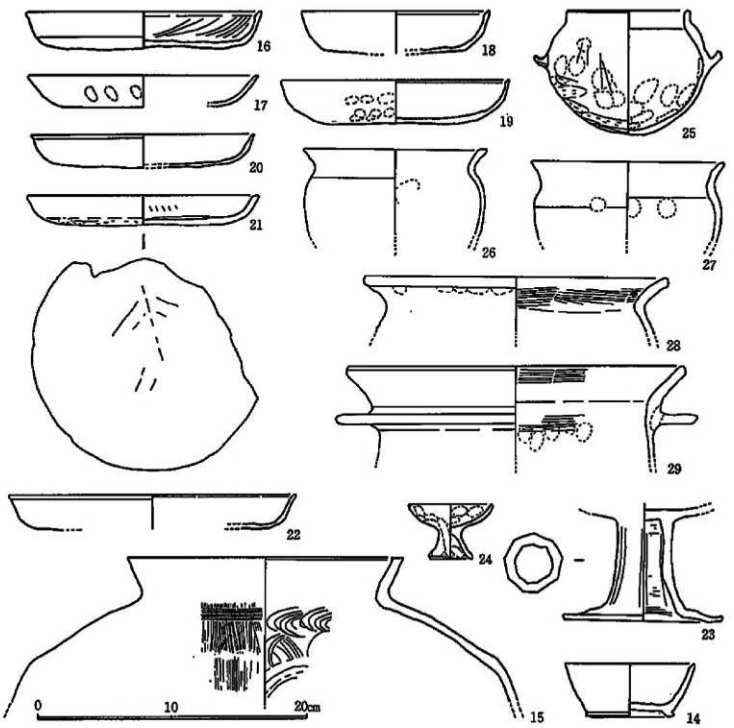
(16～17) は土師器　皿である。(16) は斜放射状暗文を施し、口縁内側に沈線を巡らす。(17) は口径16.4cm、器高 2.3cm、外面に指頭圧痕があり他は不明である。

この他に墨書土器 (30) を1点、上層より (16) 等の土器とさほどレベル的に差もなく出土した。器種は土師器　皿である。口径16.4cm、器高 2.3cmを測る。色調は灰黄色、胎土は微砂を少し含み、焼成は良好である。口縁部は底部から斜め上方に立ち上り、口縁端部は外側にわずかにつまみ出している。調整は口縁部内面、外面とも回転ナデ、底部には指頭圧痕が認められる。全体的に剥離が著しく、暗文については不明である。この皿の口縁部の外傾度、調整技法からすると平城Ⅳ期頃に比定し得る。裏面中央に『長』の文字が書かれている。長さ 1.5cmの楷書体である。

井戸A－1下層　出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・壺・提瓶・甕、土師器　杯・皿・椀・鉢・甕・かまど・羽釜等である。

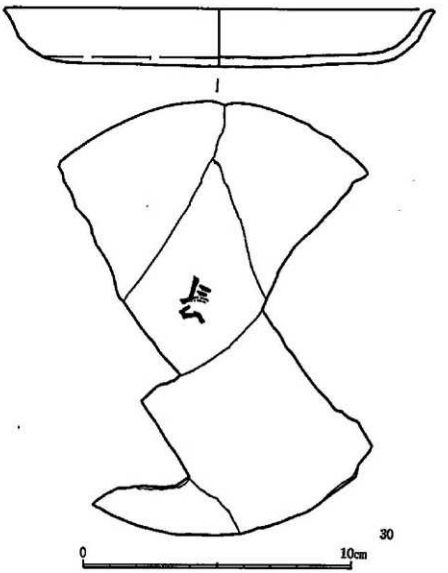
(18～19) は土師器　杯である。(18) は口径13.2cm、器高 3.3cmを測る。色調は内面灰白色、外面淡灰褐色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部は底部から内彎しつつ立ち上り、口縁端部に内側に傾斜する面を作る。その面の下端は稜をなす。口縁部は内外面回転ナデを施すが他は磨耗の為不明。(19) は底部から緩やかな曲線をもって口端部に至る。口縁端

部内側は少し肥厚している。外側に指頭圧痕が認められる。（20～22）は土師器　皿である。（20）は口径16.7cm、器高 2.5cmを測る。色調は淡灰褐色、胎土は微砂粒を少し含み、焼成はやや不良である。口縁部は底部から緩やかに立ち上り、口縁端部は、外側へつまみ出している。口縁部内外面は回転ナデであるが、その他は磨耗の為不明である。（21）は少し厚手であり、口縁端部に沈線はない。口縁部内外面は回転ナデ、底部内面はナデ調整を施す。外底面には木の葉圧痕が認められる。（22）は口径21.4cm、器高 2.6cmを測る。色調は淡灰褐色、胎土は微砂粒を多く含み、焼成は良好である。口縁部は、平らな底部から立ち上り、外上方へ真っすぐ延びる。口縁端部はやや内傾する面を作るかの様であるが、明瞭な面は認められない。底部外面は指圧成形痕、口縁部内外面には回転ナデ調整がみられる。（23）は土師器　高杯である。脚部外面は面取りを施し、9角形である。内面はヘラケズリを施した後、ハケ調整を行なう。（24）はミニチュアの高杯である。高さ6.2cm、杯部径6.4cmを測る。杯部は椀状を呈し、脚部はさほど大きくない。



第10図　井戸A－1出土土器　(1/4)

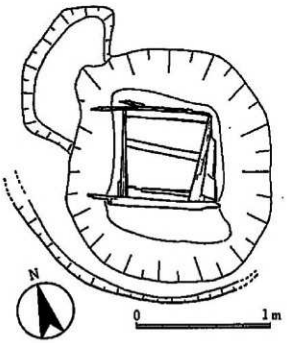
全体に指頭圧痕が明瞭に残る。（25～28）は土師器　甕である。（25）は把手が付く。口縁部は短く、垂直に立っており、回転ナデを施す。体部は球形で指頭圧痕が残る。下部にはヘラケズリを施す。外面に煤が付着する。井戸底面から出土した。（26～27）は中型甕である。この２つは外面の剝離が著しく、調整は不明である。（28）は大型甕である。口縁部内面にハケ調整を、体部内面はヘラケズリを施す。（29）は土師器　羽釜で、胎土は他の器種とは異なり、暗茶色砂粒の多いものである。口縁部は外反しており、鍔の接合部分が最も厚くなる。鍔は水平で先端は少し厚くなる。



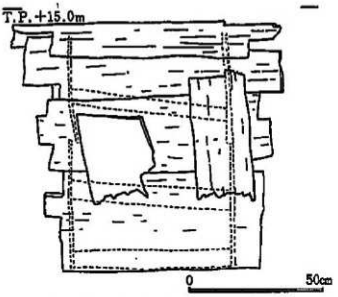
第11図　井戸Ａ－１出土墨書土器　（1/2）

上層のうち（14～15）は奈良時代前半、下層の遺物中にも奈良時代前半のものがあるが、この他に少し古い時期のものも混在している。

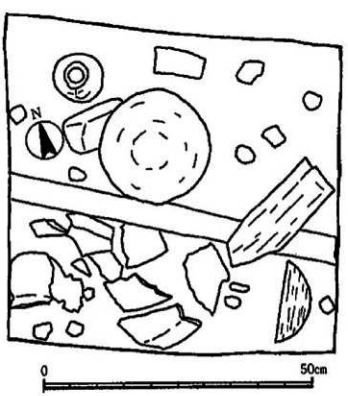
井戸Ａ－２（第12～17・29図、図版５～６・８・12～13）　この井戸は掘立柱建物Ａ－４、Ａ－５の北西、C14区にて検出し、これらの掘立柱建物のいずれか、あるいは双方と共存したと考えられる。井戸の掘方の規模は、南北にやや細長い1.9m×1.8mの不整の円形で、深さは 1.6mである。この井戸は内部に井戸枠を持つ構造である。井戸枠の外側寸法は、64cm×63cmを測り、ほぼ正方形になる。東側、北側、西側の三方は、63cm×50cm、厚さ 1.5cmの一枚板を二段重ねにして、互いを枘組みにして、『コ』字状に組み合わせており、南側は細長い板材を重ねて閉じている。『コ』字状に組まれた上下の板材は３～４本の鉄釘で留めている。また、南側の細長い板材を用いた側面は、他の三方に比べて一番掘方から離れている。この井戸枠材は、支柱の無いのが特徴である。支柱が無いために、北側板材、南側板材に接して、東西方向に横梁を３本ずつ入れている。この横梁は一段目片側２本、二段目片側１本で、これが北側と南側に認められる。このほか、井戸底部の北側と南側の板材にはさまれた中央に東西方向の横梁が１本存在する。これらの横梁は出枘を造り出して、東・西の板材に組まれているのではない。むしろ横梁は土圧によって板材が窪む為、落下しないだけである。しかし一部分では横梁のずり下がる痕跡も認められ



第12図　井戸A－2平面図　(1/40)



第13図　井戸A－2井戸枠南側面図　(1/20)



第14図　井戸A－2井戸枠内下層遺物出土状況 (1/10)

る。また板材の接合部分の外側に薄い、やや小さな板材を重ねている。

次に主要な板材について述べる。二段組みを構成する板材は、腐食が少しずつ進み、特に二段目では相当凹凸が激しく、板材も薄くなっている。(31) は北側一段目の板材の実測図である。この板材は両側面に出枘を作り出している。東・西の板材の場合には、それぞれ北側板材と組み合わさる部分においてのみ、出枘が造り出されており、他側面は平坦である。(32) は、南側の細長い板材のうち、最下段のものである。この板材は突起部分を含めた長さは83.0cm、幅38.8cm、厚さ 4.1cmを測るものである。表面および側面には手斧の痕跡が残っている。この板材は片側面に裁断された痕跡が認められる。

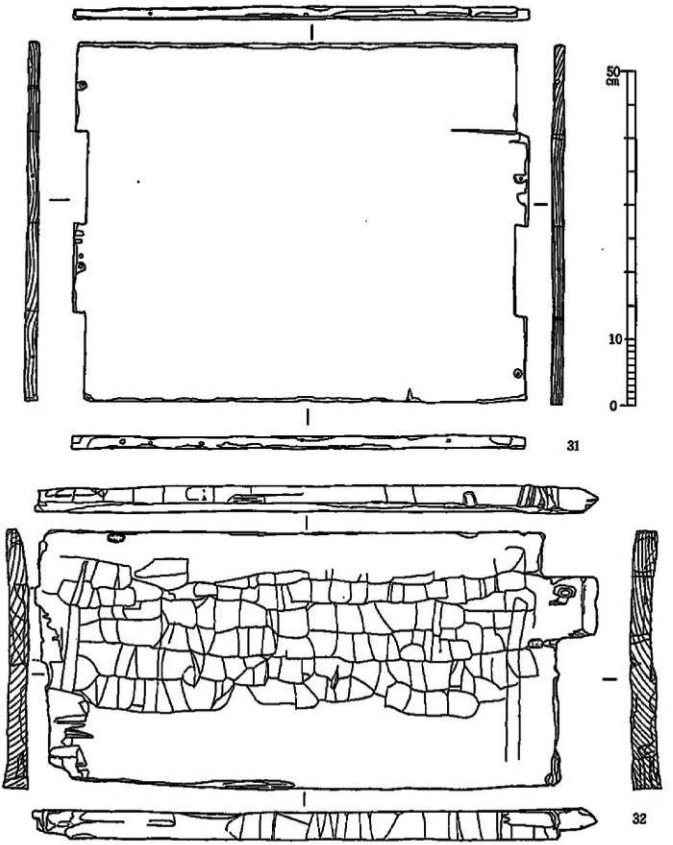
次に埋土について述べる。掘方下部は地山を掘り込んだ青灰色粘土ブロックで再び埋めもどしており、炭化物はほとんど含まない層である。また遺物もほとんど含まない。掘方の上部、中部は暗灰色粘土層で、炭化物を比較的多く含み、遺物も多量に含んでいる。井戸枠内部には、中央が少し窪む水成堆積層がある。下層は暗灰色粘土層、上層は暗灰茶色粘土層である。井戸枠内底部から、須恵器　小壺、土師器　鉢・甕等の一括遺物を出土した。井戸枠内最底部には、約3cm大の小石が多量に泥と入り混じって検出された。

以下掘方出土遺物、井戸枠内出土遺物について説明する。

井戸A－2掘方中部　出土遺物は、須恵器　皿・鉢底部・壺、土師器　杯・甕、製塩土器等である。

(33) は須恵器　皿である。口径18cm、器高

2㎝を測り、色調は灰白色を呈する。良選された胎土であるが、わずかに砂粒を含む。焼成は良好である。口縁部は外側にわずかにつまみ出す。口縁部、内外面は回転ナデである。底部内面は仕上げナデ、底部外面は回転ヘラ切りである。（34）は須恵器　壺の口縁部で、口径18.7㎝を測る。色調は灰色から灰白色を呈する。胎土は精良であり、焼成は良好である。口縁部内外面は回転ナデである。口縁端部はほぼ垂直方向につまみ上げている。（35）は須恵器　鉢の底部である。体部外面下部は回転ヘラ削り、この上に内外面は回転ナデを施す。（36）は須恵器　壺である。底径23.6㎝である。体部外面下部は平行タタキを施し、中部は回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ



第15図　井戸A－2井戸枠材　(1/4)

を施す。

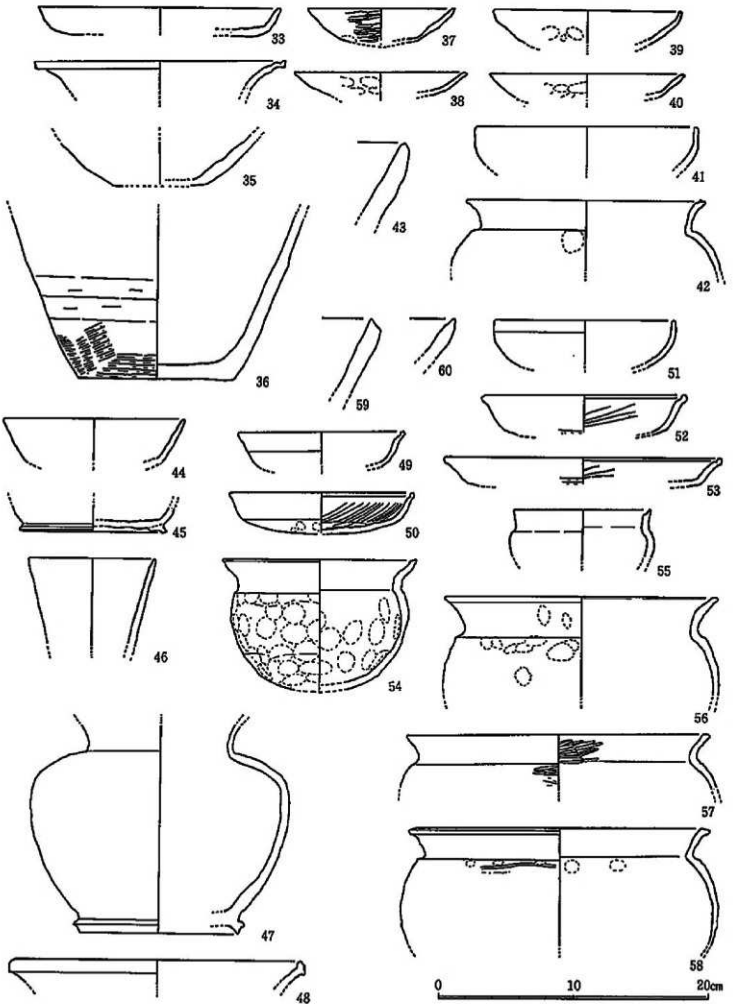
(37～41) は土師器　杯・皿である。(37) は口径11.0cm、器高2.5cm、色調は外面黄褐色、内面は灰白色を呈する。胎土は精良な粘土で焼成は良好である。外面は指圧成形の後、横方向のヘラミガきを施している。(38) は口径12.9cmである。大きく外側に傾斜した口縁部を持つ。外には指頭圧痕が施こされ、この上に内外面回転ナデを施している。(39) は口径19.2cmを測り、口縁部は大きく開き、口縁端部は垂直近く立ち上り先端を肥厚させている。外面に指頭圧痕があり、内外面とも回転ナデを施す。(40) は口径14.6cmを測り、口縁部は外側へ大きく傾斜し、斜外上方につまみ上げる。外面には指頭圧痕があり、内外面とも回転ナデを施す。(41) は口径16.6cmを測り、口縁端部がほぼ垂直方向に立ち上り、先端を肥厚させている。内外面は回転ナデを施す。(42) は土師器　甕の口縁部で、口径17.6cm、残存高 5.0cmを測る。色調は灰白褐色から白灰色を呈し、良選された胎土ではあるが、2～4mmの砂粒少しを含む。焼成は良好である。口縁端部で外に屈曲する。肩部は少し張っている。

(43) は製塩土器の口縁部である。色調は内外面、赤褐色を示す。胎土は少し粗い砂粒を含むが、焼成は良好である。内外面にナデを施している。

井戸A－2掘方下部　出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・壺・甕、土師器　杯・皿・椀・鉢・甕・羽釜等である。

(44～45) は須恵器　杯である。(44) は色調青灰色で、胎土、焼成は良好である。口縁部下半は少し丸みを帯びる。(45) は高台径10.3cmを測る。色調は淡灰色である。胎土は精良である。高台は基部が幅広く、先端は細い。ハの字状の形状である。高台端部内側が接地面となる。(46) は須恵器　長頸壺の口縁部である。口径 9.6cm、色調は灰茶褐色から灰黄褐色である。焼成は良好である。内外面とも回転ナデを施す。口縁部は真っすぐ外上方に伸びる。(47) は須恵器　短頸壺である。口縁端部及び底部は欠損している。残存高15.1cm、高台径11cmを測る。色調は外面暗灰色、内面灰青色を呈し胎土は精良である。焼成は良好である。調整は内外面とも回転ナデを施している。体部は肩が少し下がり、丸みをおびた形である。(48) は須恵器　甕の口縁部である。口径21.4cmを測る。色調は灰色から青灰色を示す。胎土、焼成は良好である。口縁部外側が厚くなる。

(49～53) は土師器　杯・皿・椀である。(49) は杯である。口径12.6cm、残存高 2.6cmを測る。色調は淡褐色を示す。口縁部は外反し、端部は肥厚する。(50) も杯である。口径13.8cm、器高 3.1cmを測る。色調は淡灰茶色である。内側に斜放射状暗文と底面に螺旋状暗文を施している。外側底面は指頭圧痕がある。口縁端部内側には沈線を一条施す。(51) は椀である。口径13.6cm、残存高 3.5cmを測る。色調は淡黄褐色を示す。外面は指圧成形痕、内側は回転ナデを施す。口縁部は内爆している。(52) は杯である。口径15.4cm、残存高 3.0cmを測る。色調は灰茶色から灰茶褐色である。胎土、焼成は良好である。内面に斜放射状暗文を施している。口縁部内側には一条の沈線を施す。(53) の皿は口径20.6cm、残存高 2.1cmを測る。色調は淡灰茶色であ



第16図　井戸A－2掘方出土土器　(1/4)

る。胎土、焼成は良好である。内側は斜放射状暗文を施し、口縁端部に一条の沈線を施す。外面底部ヘラ削りで他は回転ナデを施す。(54～58) は土師器　甕である。(54) は中型甕である。口径14.4cm、体部最大径12.6cm、残存高 9.3cmを測る。色調は灰黄色から淡灰黄色である。胎土

は少し砂粒を含み、焼成はあまり良くない。体部内外面は指圧成形痕が全面に認められ、口縁部は回転ナデを施し、少し内彎している。口縁部は上端部にほぼ水平な端面を作る。（55）は小型甕である。口径10.1cm、体部最大径11.8cmを測る。色調は灰黄色である。胎土は少し砂粒を含む。口縁端部は内傾する面を作り、外端をつまみ上げる。体部外面は指圧成形である。（56）は口径20.4cmである。この場合、口縁端部のつまみ出しはあまりなく、端部上面は丸めており、端部内側に沈線状の窪みを作る。体部外面は、指圧成形を施している。（57）は口径22.3cmを測る。精良な胎土であるが少し砂粒を含む。焼成は良好である。口縁部は斜め上方に伸び、端部上面は水平な面を作る。体部外面にはヘラケズリを施し、口縁部内面はヘラ磨きを施す。口頸部のくびれはあまりない。（58）は口径22.4cmを測り、色調内面白灰色、外面灰褐色を呈する。胎土はやや精良な粘土であるが砂粒を少し含む。焼成は良好である。口縁部は端部を外側に大きくつまみ出し、ほぼ水平な面を作る。口頸部は回転ナデの為に大きく内側に陥んでいる。口頸部外面に指圧成形痕が認められる。その他は剥離の為、調整は明らかではない。

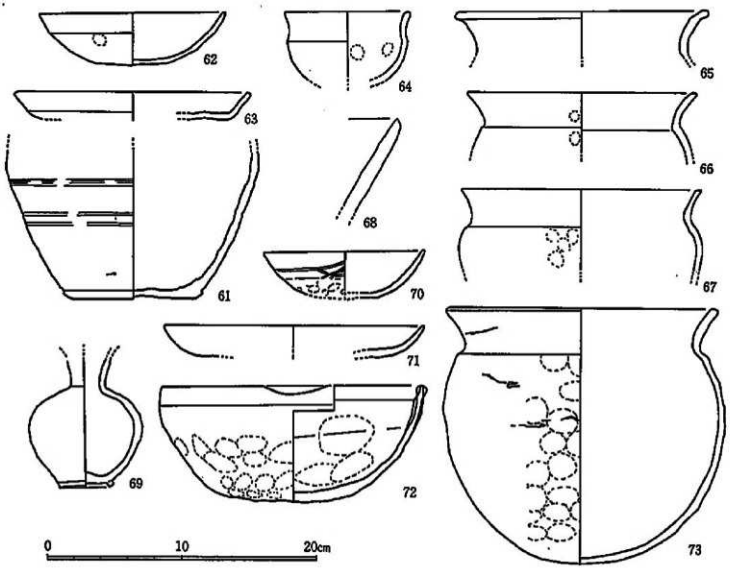
（59～60）は製塩土器である。製塩土器は相当量出土したが、すべて破片で完形品は全くなかった。しかもその破片の大きさは図示するものが最も大きく、他は小さく壊れていた。（59）は内面は布目痕で、外面は横ナデを施し、口縁端部は指でナデ切っている。（60）は内外面とも横ナデを施したあと、先端をつまみ上げている。

井戸A－2井戸枠内上層　出土遺物は、須恵器　壺、土師器　杯・皿・甕、製塩土器等である。

（61）は須恵器　壺である。底部径10.5cm、残存高11cmを測る。色調は外面灰黄色、内面は白灰黄色である。胎土は少し粗く1～2mmの砂粒を含む。焼成は良好である。体部内外面には回転ナデを施し、その後体部中位以下に三条の沈線を施す。底部内外面は指圧成形を施す。底部は平底である。

（62）の土師器　杯は口径13.8cm、器高 3.9cm、色調は淡灰茶色を示す。胎土、焼成は良好である。底部から緩やかに立ち上る。体部外面に指圧成形、口縁部は回転ナデが認められる。（63）は土師器　皿である。口径17.6cm、器高 2.1cmを測る。色調は淡灰茶色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁端部に沈線を施す事はなく、暗文も認められない。口縁部内外面は回転ナデ、底部は指圧成形である。（64）は土師器　小型壺である。口径 9.4cm、残存高 4.7cmを測る。色調は外面が淡灰褐色、内面では灰褐色を示す。胎土、焼成は良好である。口縁部が最大径を示し、体部は下へすぼまる形をなす。（65～67）は土師器　甕口縁部である。（65）は口径18.6cmを測る。色調は外面は暗茶灰色、内面は淡茶灰色を示す。胎土、焼成は良好である。口縁部外側の屈曲は強い。（66）は口径17.2cmを測り、外面淡灰褐色、内面淡灰茶色を示す。胎土、焼成は良好である。口縁部内外面は回転ナデである。口頸部はあまり屈曲しない。（67）は口径16.8cmを測り、色調は外面は淡茶褐色、内面は淡灰茶色を示す。胎土、焼成は良好である。口縁端部上面に平坦面を作る。体部外面は指圧成形、口縁部は回転ナデを施す。

（68）は製塩土器である。色調は白灰色であり、胎土は1～2mmの砂粒を多く含み、内外面ナ



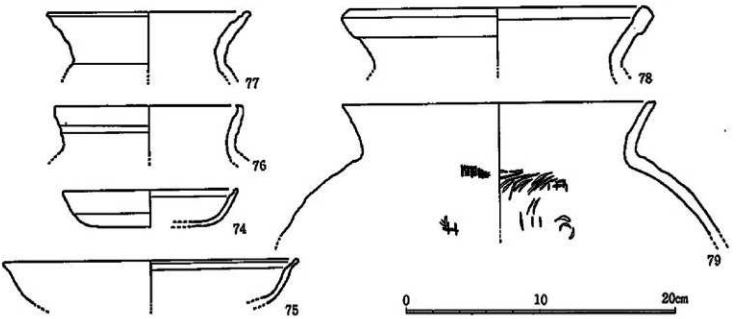
第17図　井戸A－2　井戸枠内出土土器　(1/4)

デである。

井戸A－2井戸枠内下層　出土遺物は、須恵器　小壺、土師器　杯・皿・鉢・甕等である。

(69) は須恵器　小型壺である。最大径 8.3cm、残存高 9.7cm、高台径 4.1cmを測る。色調は外面暗灰色を示す。胎土は砂粒を含む。焼成は良好である。調整は外面回転ヘラケズリの後、回転ナデを施している。外面には自然釉が付着する。

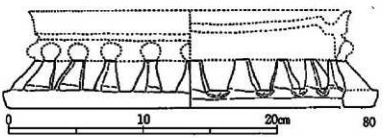
(70) は土師器　杯である。口径は12cm、器高 3.5cmを測る。色調は黄褐色を示す。胎土、焼成は良好である。底部から緩やかに立ち上る。外面には指頭圧痕があり、この上に雑なヘラミガキを施している。内面は回転ナデである。(71) は土師器　皿である。口径19.5cm、器高 2.4cmを測る。色調は内外面淡褐色か淡灰褐色である。胎土は砂粒を少し含み、焼成は良好である。口縁端部外側をつまみ上げる。口縁部内外面は回転ナデである。(72) は土師器　片口鉢である。口径19.8cm、器高 8.5cmを測る完形品である。色調は内面茶灰色、外面は黄灰色を示す。胎土、焼成は良好である。内外面指圧成形を施し、口縁部付近は回転ナデを施している。内面はさらに下半を指ナデしている。口縁部は内彎しており、口縁端部は少し内側に肥厚している。(73) は土師器　甕である。口径19.5cm、体部最大径21cmを測る。色調は褐色であるが外面は煤が付着している。胎土はやや粗く1～3mmの砂粒を含んでいる。焼成は良好である。形状は球形の体部である。調整は内外面とも指圧成形の後、ナデている。口縁部は内外面回転ナデを施している。



第18図　溝A－3・5～7出土土器　(1/4)

溝A－3（第18・29図）　調査区北端B・C3区において検出した溝である。東除川によって削られた崖に近接した所に位置し、方向はN—11°—Wである。検出長14.5m、幅0.7m、深さ10cmを測る。埋土は灰紫色粘土である。東側部分では竪穴住居A－1、A－2を削平している。この溝の東側では掘立柱建物に伴うと思われる方形の柱穴を検出している。

この溝から、須恵器　杯・杯蓋、土師器　甕等が出土した。(74)の土師器　杯は、口径13.0cm、器高 2.8cmを測る。外面は淡い黄褐色、内面は黄褐色を示す。胎土・焼成は良好である。口縁端部内側に沈線状の窪みを示す。口縁部は底部から斜め外上方に、真直ぐに立ち上がる。口縁部内外面は回転ナデであり、暗文は認められない。



第19図　溝A－4出土円面硯　(1/4)

溝A－4（第19・29図、図版10）　調査区南端B・C15区に位置し、東西方向に伸びている。検出長 9.2m、幅0.2m～0.7m、深さ13mを測り、埋土は灰紫色粘土である。出土遺物は、円面硯の他須恵器　杯・鉢、土師器　杯・甕等の細片がある。

須恵器　円面硯（80）は、脚部のみ残存していた。復元脚部径22.3cm、残存高 3.6cmを測る。厚さ約1cm、幅2cmのドーナツ状の円盤の上に、やや内傾して支柱がある。この支柱は上から下へ、緩やかな曲線をもって太くなっており、支柱は断面三角形を示す。出土した部分では全面的に自然釉が付着していた。いわゆる蹄脚硯である。

溝A－5（第18・29図）　溝A－4から北へ約4m、B・C14～15区にあり、西から東へ流れる溝である。検出長13.4m、幅0.5～1.0m、深さ約10cmを測る。この溝は柱穴を削平しているため、溝底に柱穴を検出する。また埋没後、一部は溝状遺構によって、あるいは柱穴によって削平される。埋土は灰紫色粘土である。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋、土師器　杯・甕・羽釜等がある。

（75）の土師器　杯は、口径19.5cmを測る。色調は赤褐色である。口縁端部を少し内側に丸め、沈線を巡らす。口縁部内外面に回転ナデを施すが、暗文は認められない。

溝A－6（第18・29図）　溝A－5から北へ約 1.6m、C15区にあり、西から東へ流れる溝である。溝A－4、A－5、A－6は互に平行である。検出長 6.0m、幅 1.7m、深さ約30cmを測る。この溝は土坑A－4の手前で途切れ、埋積谷に通じていない。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・鉢・壺、土師器　杯・鉢・高杯・壺・甕・羽釜等がある。

（76）の須恵器　壺の口縁部は、口径13.8cmを測る。色調は内面が淡灰色、外面は暗灰色を示す。胎土、焼成は良好であり、口縁部はほぼ垂直に近い形で立ち上っている。内外面とも回転ナデである。

溝A－7（第18・29図、図版10）　調査区北端B15区にあり、埋積谷の東端落ち際上部に埋積谷に沿って掘られた溝である。検出長25.0m、幅0.3～1.4m、深さ10cmを測る。少し屈曲した溝である。この溝は開削される時にそれまでの柱穴を壊し、また埋没後にも再び柱穴が掘られる。この後溝状遺構が掘られて、上部が削平される。

出土遺物は、須恵器　杯・壺、土師器　杯・鉢・甕等である。

（77～79）は須恵器　壺である。（77）は口径15.2cmを測る。色調は内外面灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。内外面回転ナデである。（78）は口径22cmを測る。胎土は少し粗く、焼成は良好である。口縁部内外面とも自然釉が付着している。口縁端部は肥厚しており、内外面は回転ナデである。（79）は口径23.3cmを測る。色調は内外面暗灰色、外面は灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁部は斜め上方に立ち上り、端部は水平面を作る。体部外面には平行タタキを施し、内面は同心円文である。

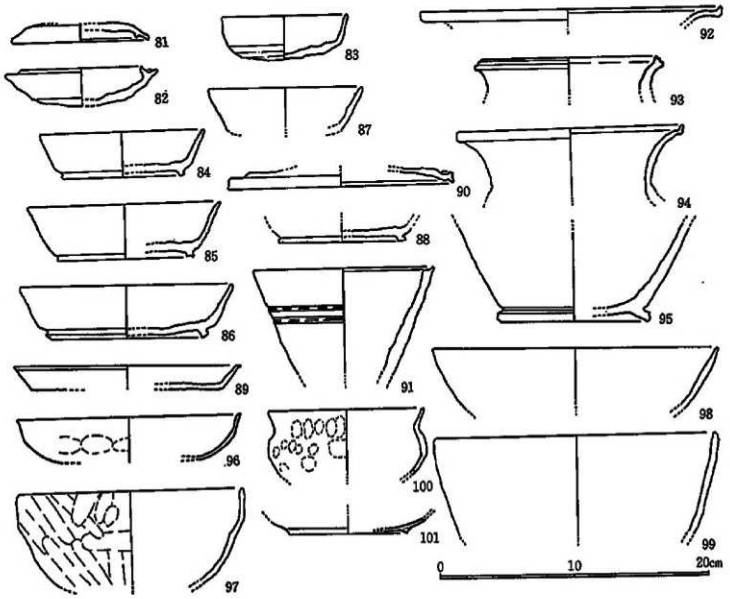
溝A－8（第29図）　調査区南端B15～16区にて検出した溝である。検出長4.6m、幅0.4m、深さ10cmを測る。この溝は柱穴を削平して作られ、また埋没後には、他の柱穴が掘られる。溝A－4と接するが、溝A－4が後出となる。埋土は灰紫色粘土である。この溝内から須恵器　杯、土師器　杯・甕、黒色土器等が出土したが小片の為図示していない。

溝状遺構（第20・29図、図版10～11）　検出位置はB・C13～15区である。検出した長さ20m、幅4m、深さ10cmを測り、ほぼ南北に延びている。肩部は急傾斜で掘り込まれて溝底部に達し、底面は平らである。埋土は暗灰色粘土であり、遺物は井戸A－2附近が多かった。この遺構は、掘立柱建物A－2、A－3、A－4、A－5の一部分、井戸A－2、溝、土坑、柱穴の上部を削平している。今回の調査では、性格を決める事ができなかった。今後の調査の課題としたい。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・皿・摺鉢・壺、土師器　杯・鉢・甕、黒色土器等である。

（81～90）は須恵器　杯・杯蓋・皿である。（81）の杯蓋は、口径10cm、受部径 8.8cm、残存高1.4cmを測り、色調は灰色から青灰色を示す。胎土は少し粗く1～1.5mmの砂粒を含んでいる。焼成は堅緻である。内面のかえりは口縁部先端より内側に位置する。天井部は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。（82）は、口径8.8cm、受部径11.3cm、器高2.9cmの杯である。底部に『ノ』

字形のヘラ記号を有する。色調は淡灰色、胎土、焼成は良好で、立ち上りは内傾し短くなっている。（83）の杯は、口径9.5cm、器高3.3cmを測る。色調は灰色を示し、胎土も精選され、焼成は良好である。外面の底部全体にヘラケズリが施され、内面の回転ナデも丁寧である。（84）は口径12.2cm、器高3.4cm、高台径9.1cmの杯である。色調は灰白色。胎土は精選されているが焼成は不良である。口縁部は斜め上方向に真っ直ぐ伸びる。（85）は口径14.4cm、器高 4.5cm、高台径10.2cmの杯で、色調は灰色から暗灰色、胎土は精良で焼成は良好である。底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデを施す。（86）は口径15.9cm、高台径12.2cm、器高 3.9cmの杯で、色調は淡灰色であり、胎土は精選され、焼成は良好である。高台は口縁部への屈曲部より内側にあり、高台の内端が接地する。内外面とも回転ナデである。（87）は口径11.6cm、残存高 3.4cmの杯で、色調は灰白色を呈する。胎土は精良であり、小さな砂粒を含み、焼成は良好である。底部外面は回転ヘラ切り、他は回転ナデを施す。（88）は高台径8.7cm、高台高0.4cm、残存高1.3cmの杯で、色調は白灰色を示し、胎土は精選されている。焼成は堅緻である。（89）は皿である。口径16.8cm、器高1.75cmを測る。平坦な底部から、折れ曲るように口縁部に至る。口縁端面は平坦面をなす。色調は淡灰色である。胎土は精良・密であり、焼成は良好である。底面は回転ヘラ切り、他は回転ナデである。（90）は杯蓋である。口径11.7cm、残存高 1.3cmを測り、色調は青灰色、胎



第20図　滑状遺構出土土器　（1/4）

土は精良であるが少し砂粒を含む。焼成は良好である。（91）は須恵器　摺鉢である。口径13.6㎝、残存高 8.1㎝、色調は暗灰色である。体部は斜め上方に伸び、口縁部は浅く窪んだ面を作る。（92～94）は須恵器　壺の口縁部である。（92）は口径21.6㎝、残存高 1.4㎝を測り、色調は白灰色である。胎土は精良、焼成は良好である。口縁端部は水平に拡がり、上方に少しつまみ上げている。口縁部内外面は回転ナデである。（93）は口径11.2㎝を測る。色調は外面は灰色を示し、内面は自然釉が剥離しているために不明である。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。口縁端部は上下に拡張しており、外傾する面を作る。この部分に二条の沈線を有する。外面は回転ナデを施す。（94）は口径17㎝、残存高３㎝を測り、色調は青灰色、胎土は精良な粘土、焼成は良好である。外鬱する口縁部、端部を上方につまみ上げている。口縁部内外面回転ナデである。（95）は須恵器　壺の体部及び高台部である。高台径11.5㎝、残存高 6.9㎝を測る。色調は暗青灰色で胎土は精選されている。焼成は良好である。高台は外側に『ハ』字形に張り出し、体部は底部から斜め上方に伸びる。体部下半は回転ヘラケズリを施し、さらに回転ナデを施す。

（96）は土師器　杯である。口径16.7㎝、残存高 3.4㎝を測る。色調は黄茶褐色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成も良好である。口縁端部付近のみ回転ナデを施し、その為に外へ少し屈曲する。外面には指圧成形痕が認められる。他は剥離の為不明である。（97～99）は土師器　鉢である。（97）は口径26.8㎝、残存高 7.1㎝を測る。色調は茶褐色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部は垂直に立ち上る。外面は指圧成形の後、斜め方向の指ナデを施す。内面はナデている。（98）は口径21.2㎝、色調は内面黄褐色、外面赤褐色である。胎土はやや精選されている。焼成は良好である。口縁部は斜め上方に立ち上り、口縁端部はつまみ上げている。調整は剥離が激しく、不明。（99）は口径21.2㎝、残存高 7.6㎝を測る。色調は内外面黄褐色から赤褐色である。胎土はやや精良で焼成は良好である。口縁部は垂直に近く立ち上り、口縁端部は丸めている。（100）は土師器　小型甕である。口径は11.6㎝、残存高 5.0㎝を測り、色調は内外面とも淡褐色を示す。胎土はやや精良であり、焼成は良好である。外面には指圧成形痕が認められる。

（101）は黒色土器である。高台径は 8.8㎝を測り、断面三角形状の高台をもつ。色調は外面は淡黄灰色、内面は黒色を示す。胎土はやや精良であり、焼成は良好である。剥離が進行している為、詳細な点は不明である。

土坑Ａ－１（第21・29図、図版９・14）　調査区南端Ｂ16区にて検出した。この土坑は井戸Ａ－１及び柱穴を削平している。規模は4.5m×2.1m以上、深さ10㎝、最深部で20㎝程度の浅いものである。埋土の大半は灰紫色粘土層であるが、暗灰紫色粘土層を示す所もある。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・壺、土師器　杯・皿・鉢・壺・甕等である。

（102）は須恵器　杯である。高台径10.5㎝、色調は淡灰色である。（103）は須恵器　小型壺である。最大径11.5㎝、残存高11.1㎝を測る。体部は肩が張っている。高台径は幅広く大きい。高台径 7.3㎝を測る。体部下半は回転ヘラケズリを施しており、この上から回転ナデを施す。口

頸部は内面まで回転ナデを施している。色調は淡灰色である。（104）は須恵器、壺の体部上半の部分である。体部最大径19.7cmを測る。色調は外面灰色、内面淡灰色を示し胎土は精良であり、焼成も良好である。体部最大径部分直上に一条の沈線がある。体部内外面回転ナデである。

（105）は土師器　杯である。口径20.6cm、残存高 4.0cmを測る。色調は内面は淡灰色、外面は茶灰色を示す。胎土、焼成は良好である。調整は剝離の為に明確ではない。（106）は土師器　甕の口縁部である。口径28cmである。色調は淡褐色を示している。口縁端部に上方に肥厚する。調整は不明。（107）は土師器　甕で、口径24.0cm、残存高11.9cmを測り、色調は外面が赤褐色、内面が茶褐色を呈する。胎土は微砂粒質の粘土であり、焼成は良好である。口縁部内外面は回転ナデを施すが、体部内外面は指圧成形である。口縁端部は外傾する面を作り、端部はつまみ出している。（108）は円錐状のもので用途は不明である。口径6.0cm、高さ4.1cmを測る。色調は灰黄色から灰茶褐色を示す。内面に粘土紐が認められ、さらに絞り痕がみられる。外面は放射状に外へ向かってナデている。これは外面を上に使用している。使用目的については全くわからない。長岡京ではこれを竈子と称して、ミニチュアの竈に竈子を乗せている。この場合、内面を横ナデしている為当遺跡のものとは性格は異なると考えられる。

土坑Ａ－２（第21・29図）　調査区南端Ｂ16区にて検出した。土坑Ａ－１に隣接する。規模は1.6m×1.4m以上、深さ30cmを測る。埋土は灰紫色粘土である。

出土遺物は、須恵器　杯、土師器　甕・羽釜、黒色土器等である。

（109）は須恵器　杯である。高台径10.1cm、高台高 0.5cmを測る。色調は灰色、淡灰茶色である。胎土、焼成は良好である。

土坑Ａ－３（第21・29図）　調査区南端Ｃ14区にて検出した。規模は1.2m×1.1m、深さ 0.5mを測る。掘方上面は楕円形で断面も擂鉢形をなす。埋土は小石を比較的多く含む暗灰紫色粘土である。

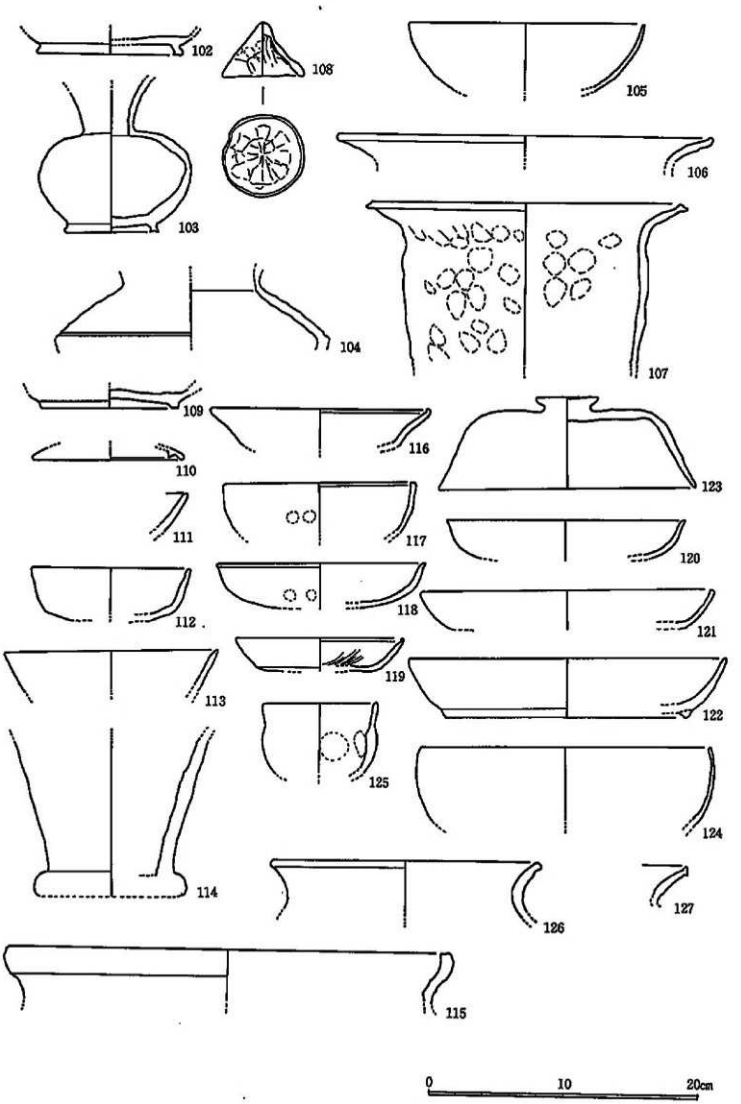
出土遺物は少ないが、須恵器　杯・杯蓋、土師器　杯である。図示し得たのは次の２点である。

（110）は須恵器　杯蓋である。口径10.8cmを測り、色調は灰色から淡灰色を示す。胎土、焼成は良好である。内側にかえりを有する。（111）は須恵器　杯口縁部である。口径は小片の為計測し得ない。色調は内外面とも淡灰色を示す。胎土、焼成は良好である。内外面とも回転ナデを施す。

土坑Ａ－４（第21・29図、図版９・14）　調査区南端Ｂ14区にて検出した。この土坑は後に溝状遺構の削平を受ける。規模は2.8m×1.6m、深さ 0.3mを測る。埋土は６層に分かれ、下層から順に灰色粘土層、炭化物層、暗灰紫色粘土に灰黄色粘土がブロック状に混入する層、灰黄色粘土層、暗灰紫色粘土層、灰紫色粘土層の順となる。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・皿・壺、土師器　杯・杯蓋・皿・椀・鉢・高杯脚部・壺等である。

（112～113）は須恵器　杯である。（112）は口径11.8cm、残存高 3.7cmを測る。色調は外面は灰色、内面は白灰色を示す。胎土、焼成とも良好である。口縁部内外面とも回転ナデを施し、



第21図　土坑A－1～4出土土器　(1/4)

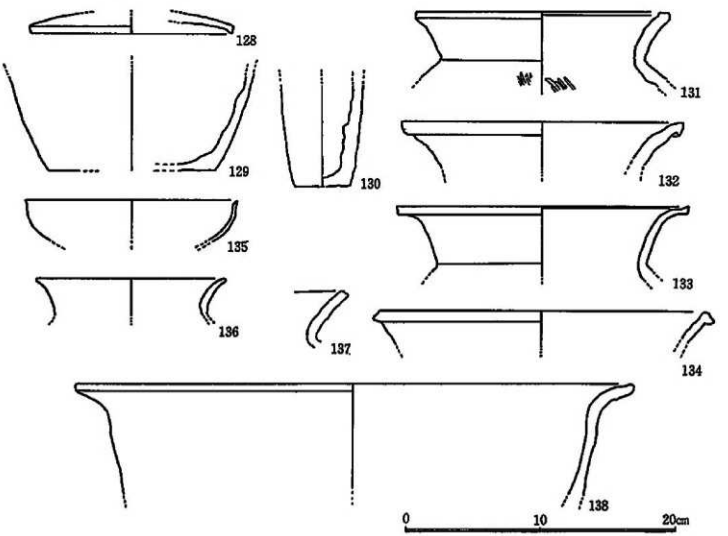
底部は回転ヘラ切りである。（113）は口径15.8cmを測り、内外面とも灰色を示し、調整は回転ナデである。胎土、焼成は良好である。(114）は須恵器　摺鉢である。底径 8.2cm、残存高11.8cmを測る。色調は内外面とも灰色を示す。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は良好である。調整は内外面とも回転ナデを施している。（115）は須恵器　壺の口縁部である。口径33.6cmを測る。内面は灰色、外面は暗灰色を示す。胎土は精良で、焼成は良好である。口縁上端面は少し窪んでおり、内外面とも回転ナデを施している。

(116～122) は土師器　杯・皿・椀である。（116）の皿は、口径16.5cm、残存高 2.8cmを測る。色調は内外面とも黄褐色で、胎土は少し砂粒を含む。焼成は良好である。口縁部は外側にわずかに反っており、端部は内側に丸め込み、この下部に一条の沈線を巡らす。（117）の椀は口径14.4cm、残存高 3.7cmを測る。色調は内外面とも赤褐色を示す。胎土は精良であり、焼成は良好である。口縁端部は丸くおさめられているが、少し内側に肥厚している。調整は剝離の為、明らかではない。（118）は杯である。口径15.6cm、器高 3.3cmを測り、色調は内外面とも黄褐色を示す。胎土、焼成は良好である。内外面の調整は剝離の為明らかではない。（119）は杯で、口径12.6cm、高さ 2.6cmを測る。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。口縁端部内側に沈線状の窪みを作り、内面は回転ナデを施し、さらに斜放射状暗文を施している。口縁部外面は回転ナデを施し、底部には指圧成形痕が認められる。（120）は皿で、口径17.8cm、残存高 2.8cmを測る。色調は茶褐色を示す。胎土、焼成は共に良好である。調整は剝離の為不明である。（121）も皿で、口径22cm、高さ 2.9cmを測る。色調は内外面とも褐色である。胎土、焼成は良好である。口縁端部内側をつまみ上げており、内面は回転ナデを施す。暗文は認められない。（122）は杯である。口径23.6cm、器高 4.3cmを測り、色調は内面は白褐色、外面は褐色である。胎土、焼成とも良好である。口縁部外面上半はヘラミガキ、下半は回転ナデを行なっている。内面は回転ナデである。(123）は土師器　蓋で口径19.2cm、器高6.8cmを測る。色調は内外面とも淡灰褐色を呈し、胎土は少し砂粒を含む。焼成は良好である。水平な天井部から大きく斜め下方向に屈曲し、口縁部に至る。内外面の調整は剝離の為明らかでない。（124）の土師器　鉢は口径21.6cm、残存高 5.8cmを測る。色調は内外面とも灰黄色を示す。胎土は少し砂粒を含む。焼成は良好である。口縁部は内彎しつつ立ち上り、端部は内傾する。調整は剝離の為、明らかではない。（125）は土師器　小型壺で、口径8.4cm、残存高5.3cmを測る。色調は外面が褐色、内面は白褐色を呈す。焼成は良好だが胎土はやや粗く 0.1～2mm程度の砂粒を含む。口縁部はわずかに外傾する。体部は肉厚となり、口頸部から体部へはあまり屈曲しない。(126～127) は、土師器　甕である。（126）は口径20.3cmを測る。色調は外面は黄褐色、内面は褐色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部内外面は回転ナデである。（127）は小破片である為、口径は計測し得ない。色調は内外面とも赤褐色である。胎土は精良であり、焼成は良好である。口縁部は外反し、端部は外側からナデつけられる為、上下に拡張している。口縁部内外面は回転ナデである。

土坑Ａ－５（第22・29図、図版15）　調査区南端Ｂ14区にて検出した。この遺構は溝状遺構より後に形成された。規模は2.4m×1.0m、深さ18cmを測る。形状は不整形である。この土坑には、土器・瓦・石が土坑肩口より盛り上がる様に埋められていた。埋土は灰色砂層である。

出土遺物は、須恵器　杯蓋・壺・甕、土師器　杯・杯蓋・椀・甕等である。

（128）は須恵器　杯蓋であり、口径14.9cmを測る。色調は淡灰茶色から淡灰紫色を示す。胎土は少し砂粒を含み、焼成は良好である。調整は内外面とも回転ナデである。（129）は須恵器壺の底部である。底径12.4cmを測る。色調は内面は灰色、外面は灰白色を示す。胎土は少し砂粒を含む。焼成は良好である。底部外面はナデており、それ以外は回転ナデ。（130）は須恵器小型壺の体部である。底部径6.1cm、残存高6.5cmを測る。色調は内外面とも暗灰色である。胎土、焼成とも良好である。底部外面には糸切り痕が認められ、体部内面には雑な回転ナデの凹凸が認められる。（131～134）は須恵器　甕の口縁部である。（131）は口径18.8cmを測る。色調は内外面とも灰白色である。口縁端部の上端が水平面をなし、体部内面は同心円文が認められる。口縁部は回転ナデである。（132）は口径21cmを測る。色調は内外面とも暗灰色を示す。胎土はやや粗く、焼成も良好である。（133）は口径21.8cm、残存高4.3cmを測る。色調は外面は暗灰色、内面は黒灰色を示す。胎土は精良、焼成は良好である。口縁端部は外側からナデる為に少し上へもり上がる。内外面は回転ナデを施す。（134）は口径24.2cmを測る。色調は内外面とも暗灰色を示す。胎土は精良で、焼成は良好である。口縁端部は外側へつまみ出しており、外側下方へ傾



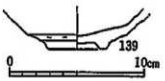
第22図　土坑Ａ－５出土土器　(1/4)

斜する面を作る。内外面とも回転ナデを施している。

（135）は土師器　杯である。口径15.8cm、残存高 3.1cmを測り、色調は外面が淡灰褐色、内面が白灰茶色を示す。胎土は少し砂粒を含む。口縁端部は外端をつまみ上げている。調整は剥離の為、明らかではない。（136）は土師器　甕である。口径14.2cmを測る。色調は外面は淡茶灰色、内面は白灰茶色を示す。胎土、焼成は良好である。調整は不明である。（137）は土師器　甕の口縁部である。小片の為、口径を復元し得ない。焼成は良好である。内外面の調整は回転ナデである。（138）は土師器　鉢である。口径41.9cm、残存高 8.4cmを測り、色調は内外面とも褐色から淡褐色を示す。胎土は少し砂粒を含む。焼成は良好である。調整は剥離の為、不明。

D）鎌倉時代以降

この時期の遺構は検出数も減少し、溝等に限定されてくる。また遺物出土量も減少する。検出地区も移り、3～7区、10～13区が中心となる。主な遺構は溝5条、土坑6基、小溝である。



第23図　溝A－10出土土器　(1/4)

溝A－10（第23・24図）　C10～11区にて検出した。この溝は小溝と同じく、堆積谷堆積層Ⅰ層上面から切り込んでいる。検出長は 3.6m、幅は0.6m、深さ0.1mを測り、方向はN—5°—Wである。肩口からややゆるやかに掘り込まれ、底面は平らである。この溝から図示するような唐津焼椀（139）が出土した。この椀は高台を削り出しており、露胎である。胎土は淡灰黄色を示す。口縁部と体部内面には淡灰色の釉がかかる。内面には焼き台を使用した痕跡が残る。17世紀前半の遺物である。

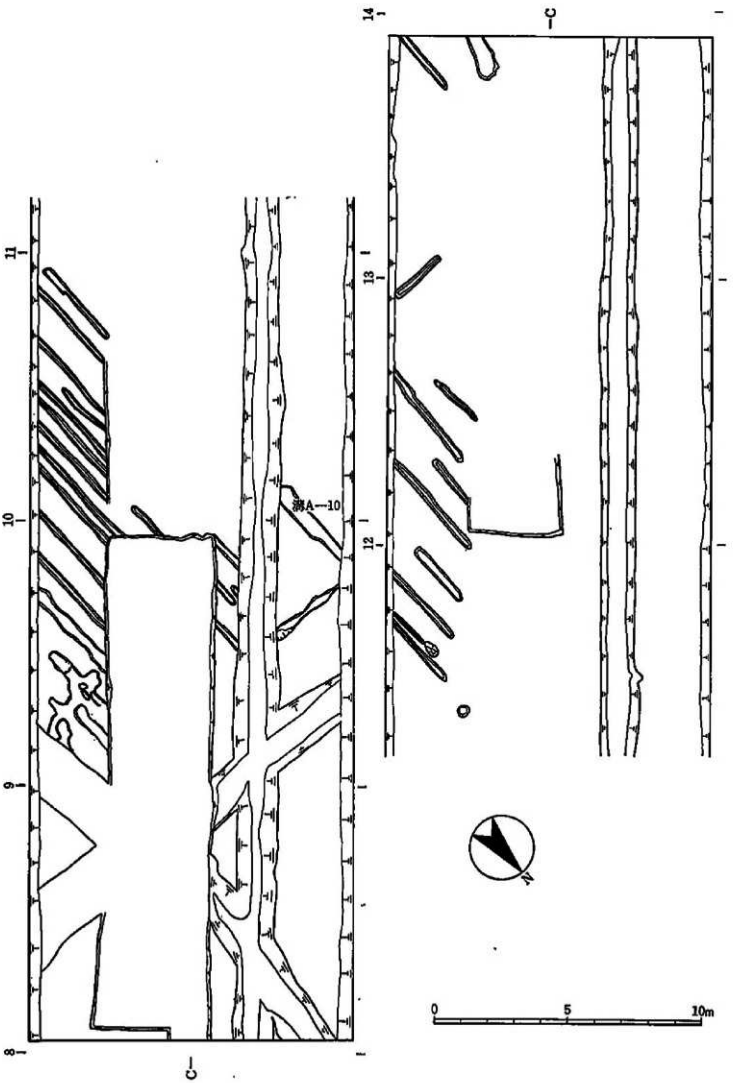
溝A－11（第29図）　B・C4区、検出長11m、幅2m、深さ0.5m。溝の方向はN—28°—Wを示し、南東側へ流れる。埋土は、灰黄色粘土、灰色粘土、灰褐色砂質土のブロック層である。

溝A－12（第29図）　B・C6区、検出長14m、幅1.5m、深さ 0.2m、溝の方向はN—89°—Wを示し、東側へ流れる。埋土は暗灰色砂質土層、灰褐色砂質土層である。

溝A－13（第29図）　B・C6～7区、検出長14m、幅2m、深さ0.9m。溝の方方はN—90°—Wを示し、東側へ流れる。この溝は非常に複雑な堆積層を示す。基本的な堆積層は、灰白色粘土ブロック層、灰色シルト層である。溝は東側へ流れる。

溝A－14（第29図）　C9～10区、検出長17m、幅1.5m、深さ0.2m。この溝は折れ曲っている。それぞれの主軸方向は、N—23°—EとN—88°—Wである。性格は灌漑用の溝であり、中央斑状線道路用地買収時まで使用されていた。溝底部からは、江戸時代中期以降の唐津焼きの椀を出土し、伊万里焼きの椀・壺・小杯等を出土した。

小溝（第24図）　B・C10～13区堆積谷堆積層の上面で検出した。幅15cm～20cm、深さ10～20cmを測る。調査範囲内では最長 4.8mであるが、実際にはまだ延びる長い溝と思われる。溝の形状は、大部分が肩口から急傾斜をもって底面に達し、底面は『U』字形か平らである。溝の方向はN—5°—Wであり、北西へ流れる。この様な溝は互いに平行で0.2m～1.0m間隔に21条検出した。遺物は少量の土器細片を出土し、性格は、現在検討中である。



第24図　小　溝　平　面　図　(1/200)

土坑（第29図）　鎌倉時代以降では土坑を６基検出した。これらはＢＣ６～７区に集中している。このほか今回は報告しないが時期不明の土坑が７基ある。

土坑Ａ－６、ＢＣ６～７区、長径5.2m、短径2.2m、深さ10cm　埋土は灰褐色粘土と灰黄色砂のブロック層。

土坑Ａ－７　ＢＣ７区　長径2.9m　短径1.6m　深さ10cm　埋土は土坑Ａ－６と同じ。

土坑Ａ－８　ＢＣ７区　長径4.4m　短径2.8m　深さ10cm　埋土は土坑Ａ－６と同じ。

土坑Ａ－９　ＢＣ７区　長径2.2m　短径1.5m　深さ10cm　埋土は土坑Ａ－６と同じ。

土坑Ａ－10　ＢＣ７区　長径2.5m　短径（調査値）1.0m　深さ 0.6m　埋土は灰褐色粘土と灰色粘土ブロック層。

土坑Ａ－11　ＢＣ７区　長径2.7m　短径2.1m　深さ0.6m　埋土はＡ－10と同じ。

これらの土坑は出土遺物が少なく、時期決定は困難であるが、一応この項に入れて報告した。

埋積谷堆積層及び出土遺物（第25～27図、図版８～９・15～17）　Ａ調査区の中央付近には、かなり広い範囲にわたって、基本層序で少しふれた埋積谷が存在する。この埋積谷は、幅20m以上、深さ 0.7mであり、底面には所々窪みがあり、少し深くなる部分がある。この深さは 1.0mである。埋積谷の方向は南北に延びていて、北側が低くなる。埋積谷の形状は東側肩口がゆるやかな傾斜をもって底面に達し、西側肩口では急な傾斜をもって底面に至る。この埋積谷は４層に分層できる堆積層によって埋没している。堆積層は、Ⅰ層淡灰褐色粘土層、Ⅱ層灰色粘土層、Ⅲ層灰褐色粘土層、Ⅳ層暗茶色粘土層である。

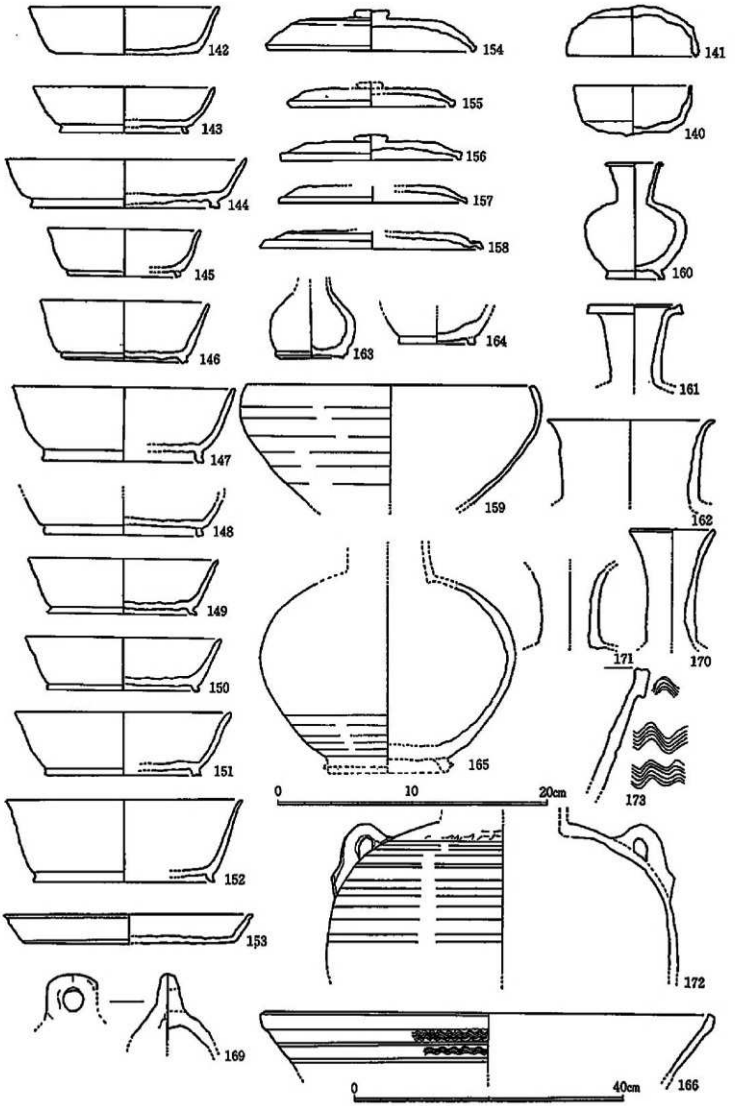
この堆積層の性格について、自然堆積層かあるいは人工的な整地層として考えるのか、判断を下すことは非常に難しく、今後の検討課題としたい。

なお、Ⅰ～Ⅲ層までの出土遺物は、土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦器のほか瓦塔である。Ⅳ層の出土遺物は、土師器、須恵器である。

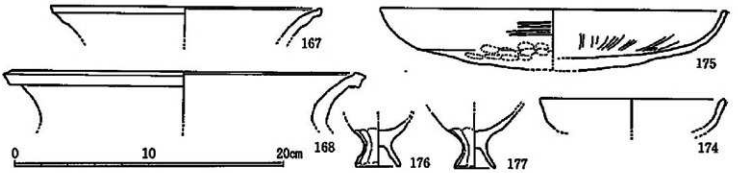
次に堆積層から出土した遺物について説明するが、今回は埋積谷の西側に検出した掘立柱建物群を考えるために、この時期に近い遺物を集めた。

出土遺物は、須恵器　杯・杯蓋・皿・鉢形土器・壺・甕・タコ壺、灰釉陶器　壺・甕、土師器　杯・盤・ミニチュア高杯等であり、この他に、軒丸瓦、塔、土馬が出土している。

（140）は須恵器　杯である。口径8.7cm、器高3.8cmを測る。少し生焼け気味であり、外面は茶褐色、あるいは暗灰色、内面は茶褐色を示す。胎土は良好で、焼成は不良である。内外面とも回転ナデを施し、底部は回転ヘラ切りのままである。（141）は須恵器　杯蓋である。口径 9.6cm、器高 3.8cmを測る。色調は内外面青灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁端部は丸くおさめる。天井部はヘラ切りのままであり他は回転ナデである。（142）～（152）は須恵器　杯である。（142）は口径14.2cm、器高 3.6cmを測る無高台の杯である。色調は内外面とも淡灰色を呈す。胎土、焼成とも良好である。口縁部内外面は回転ナデ。底部は回転ヘラ切りのままである。（143）は口径13.6cm、器高 3.6cmを測る。色調は内外面とも淡灰色を呈し、胎土、焼成は



第25図　堀籠谷堆積層出土土器(1)　(1/4、166は1/6)



第26図　坦筬谷堆積層出土土器(2)　(1/4)

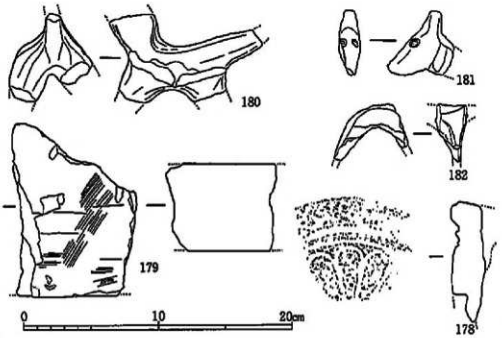
ともに良好である。内外面は回転ナデである。（144）は口径18.2cm、器高 3.3cmを測る。色調は外面淡灰色、内面暗灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。高台は『ハ』字形に開き、外端部が接地する。（145）は高台径11.4cm、器高 3.6cmを測る。色調は内外面とも灰白色を呈する。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。口縁部はわずかに外側に屈曲する。（146）は口径12.5cm、器高 4.5cmを測る。色調は内外面とも淡灰色を呈し、胎土は良好である。（147）は口径16.4cm、器高 5.6cmを測る。色調は内外面とも淡灰色である。胎土、焼成は良好である。口縁部は底部から屈曲して立ちあがり、さらに外上方にのびる。（148）は高台径11.7cmを測る。色調は内外面淡灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。（149）は口径13.8cm、器高 4.2cmを測る。内外面は淡灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁部は外上方にのびる。高台は『ハ』字形に開く。（150）は口径14.6cm、器高4.1cmを測る。色調は淡灰色であり、胎土は少し粗く、焼成は良好である。口縁部は底部から外上方へほぼ真直ぐにのびている。高台部は『ハ』字形に開く。（151）は口径16.2cm、器高 4.8cmを測る。色調は内外面淡灰色から灰色である。胎土・焼成は良好である。口縁端部は少し外側に屈曲している。（152）は口径17.6cm、器高 6.2cmを測る。色調は内外面淡灰色を呈し、胎土・焼成は良好である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁端部は少し外反させる。高台は『ハ』字形に開く。（153）は須恵器　皿である。口径は17.4cm、器高 2.2cmを測る。色調は淡灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁端部外面は心持ちつまみ出している。底部は回転ヘラ切りのままであり、その他は回転ナデを施している。（154～158）は須恵器　杯蓋である。（154）は口径15.5cm、器高 3.1cmである。色調は内外面とも淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好である。口縁部は天井部から緩やかなカーブを描く。天井部外面はヘラケズリの後ナデ、他は回転ナデである。（155）は口径12.4cm、器高 1.4cmを測る。色調は淡灰色を呈し、焼成は良好である。平たい天井部外面は回転ヘラ削りである。（156）は口径13.6cm、器高 1.9cmを測る。色調は白灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。天井部外面中央はヘラ削りであり、他は回転ナデである。（157）は口径14.1cmを測り、色調は内外面とも灰色を示す。胎土、焼成は良好である。（158）は口径16.6cmを測る。色調は淡灰色である。胎土、焼成は良好である。口縁部は一度大きく屈曲して端部に至る。（159）は須恵器　鉢鉢形土器である。口径21.4cm、最大径22.8cm、残存高 9.0cmを測る。色調は内外面とも暗灰青色を示すが、少し外面が明るい。胎土は精良であり、黒色粒を含む。焼成は良好である。器壁は非常に薄く、

3㎜前後の部分もある。口縁端部は、器壁が厚くなり、端面はわずかに平面を作る。体部外面は回転ヘラケズリを施している。（160～165）は須恵器　壺である。（160）は口径 4.4㎝、高さ18.8㎝を測る。外面の色調は暗灰色を呈す。胎土・焼成とも良好である。壺体部は偏球状をなし、肩が少し張っている。口縁部は少し外傾して立ち上り、端部は外側に屈曲する。体部外面は回転ナデである。（161）は口径 7.2㎝を測る。色調は暗灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は径1～2㎜の砂粒を多く含んでいる。内外面回転ナデである。（162）は壺の口縁部である。口径12.4㎝を測る。外面は灰色、内面は暗灰色を呈し、焼成は良好である。内外面は回転ナデである。ほぼ垂直近く立ち上る口頸部に、外反する口縁端部をもつ。（163）は底径5.0㎝、残存高5.5㎝を測る。色調は暗灰色を示し、胎土は、砂粒を少し含む。焼成は良好である。底部には糸切り痕が認められる。外側は回転ヘラケズリの後回転ナデを施す。（164）は底径 5.7㎝を測る。底部器壁は肉厚である。色調は外面黒灰色、内面青灰色を示す。胎土、焼成とも良好である。体部外面下半は回転ヘラケズリで、内面は回転ナデを施す。（165）は長頸壺の体部である。最大径は19㎝、残存高13.1㎝を測る。色調は内外面青灰色を呈し、焼成は良好である。体部内外面は回転ナデである。（166）は須恵器　甕の破片で口縁端部外側が肥厚し、この下に二条の沈線と三条の波状文を巡らす。復原口径45㎝を測る。色調は外面は黒みがかった灰色、内面は淡灰色を呈する。胎土、焼成は良好である。（167）は須恵器　甕である。口径20.4㎝を測る。色調は淡灰色を呈し、黒色粒を少し含む。焼成は良好である。内外面回転ナデである。口縁端部は外側に垂直な面を作る。（168）は須恵器　甕である。口径25㎝を測る。色調は外面が灰褐色、内面が灰色を呈し、焼成は良好、胎土は少し砂粒を含む。自然釉が外面に付着している。口縁部は外反し、口縁端部外面は肥厚している。端部上面は少し外傾している。内外面は回転ナデである。（169）は須恵器　タコ壺である。残存高 5.0㎝を測る。色調は白灰色を呈し、胎土は砂粒を含む。焼成は悪く、生焼けである。上部の孔の付近のみ残る。

（170）は長頸壺の口縁部である。口径6.4㎝、残存高8.4㎝を測る。色調は白灰色である。胎土、焼成は良好で口縁部内外面は回転ナデである。灰釉陶器と思われる。（171）は灰釉陶器　壺の口縁部で口縁端部は欠損している。残存部最大径5.6㎝、残存高5.2㎝を測る。色調は外面黄白灰色、内面灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。内外面は回転ナデである。（172）は灰釉陶器　四耳壺である。法量は体部最大径26.2㎝を測り、色調は内外面とも灰白色を示す。胎土、焼成は良好である。体部から肩部にかけて円弧を描いている。その肩部に把手がついている。この把手は上端近くに孔があき、下部は長い。体部内面は回転ナデ、外面は回転ヘラケズリを施している。（173）は須恵器　大甕の口縁部である。小片のため口径は不明。色調は外面は淡灰茶色、内面は淡灰色を呈し、胎土、焼成は良好である。口縁端部は外側に肥厚しており、口縁部に3条の波状文を施している。

（174）は土師器　杯である。口径12.6㎝、残存高 2.4㎝である。色調は外面淡灰色、内面淡灰茶色で、胎土、焼成は良好である。調整は摩耗の為、明らかでない。（175）は土師器　盌で

ある。口径25.7cmを測る。色調は外面赤褐色、内面は褐色である。胎土、焼成は良好である。丸みを持った底部はゆるやかに立ち上る。口縁端部は平坦面を作る。盤底部内面には正放射状暗文を施し、底部外面には指圧成形痕がみられ、さらにこの上にヘラケズリ調整を施す。(176～177)はミニチュアの土師器　高杯である。両者とも色調は茶褐色を示す。（176）は底径 3.2cm、残存高 3.2cmを測るが、剥離が著しく調整も明らかでない。（177）は底径 3.0cm、残存高 4.2cmを測る。脚部外面はヘラによってナデているようである。全体的に剥離が著しい為、詳しい調整についてはもうひとつ明らかではない。（178）は軒丸瓦である。出土層位は埋積谷埋土灰色粘土層である。掘立柱建物群の位置から遠く離れた埋積層から出土した。復元径21.0cmを測る。内区は蓮子は欠損して明らかでなく、弁数は復元すると単弁18葉になる。系譜的には複弁が単弁化した時期のものと考えられる。一重圏線が内区と外区の間にある。外区は直立線で、無文である。

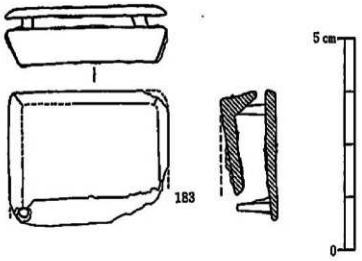


第27図　埋積谷堆積層、Ⅲ・Ⅳ層出土遺物　(1/4)

（179）は埴である。厚さ 6.5cmを測る。色調は白灰色を示し、砂粒を少し含む。焼成は良好である。欠損している為、全体の大きさは不明である。

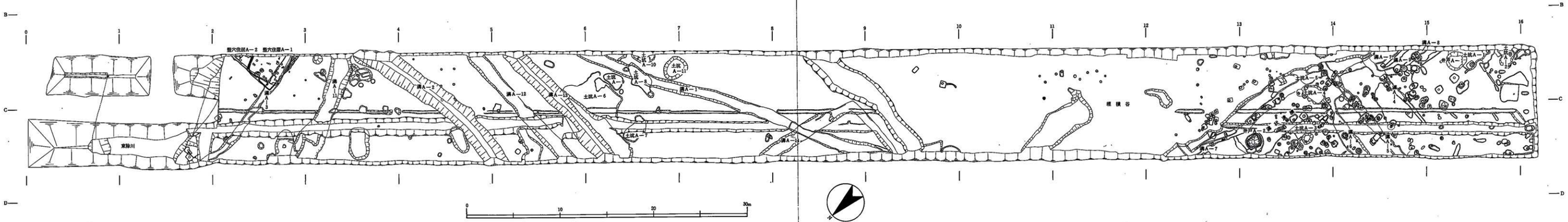
（180～181）は土馬である。（180）は前脚、後脚両先端部、および顔の部分は欠損している。馬具の痕跡は全く認められない。計測値は長さ10.5cm、高さ6.7cmを測る。（181）は顔の部分のみ遺存しており、竹管文にて眼を表している。残存部分の計測値は長さ4.9cm、高さ4.9cmを測る。

Ⅲ・Ⅳ層出土遺物（第27～28図、図版16）　（182）はC13区出土の土馬である。土馬の後脚部分の破片で、左後脚部分は大きく欠損し、胴部も全く欠損している。計測値は長さ 2.4cm、高さ 4.4cmを測る。



第28図　Ⅲ・Ⅳ層出土帯鋳具　(1/1)

（183）は帯鋳具の巡方である。横 3.0cm、縦2.5cm、厚さ1.0cmを測る。全体に腐食が進行し、表面は凹凸が激しい。また下方の長方形孔は欠損している。各構造は、底板に長さ約6mm、太さ約 1.5mmの支柱を四隅に立て上板と底板を留める。この支柱を支える穴は、底板裏面から貫通している。これは、銅、鉛スズを含む青銅製品である。



第29図　A調査区遺構平面全体図　(1/500)

第２節　Ｂ・Ｃ・Ｅ・Ｗ調査区

Ｂ・Ｃ両調査区間に近年当大阪文化財センターにより大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設に伴う大堀遺跡の発掘調査が実施された。その調査区はＢ・Ｃ調査区を東西にはさみ、各々東側をＥ区及び西側をＷ区と設定し報告されている。[註-1] そのため本概要をまとめるにあたり、ふたつの調査の関連性を重視し、今回Ｅ・Ｗ区の調査概要も合せて報告することにした。そのため先の報告と一部重複する事項も現われることをあらかじめ断っておく。

Ａ）基本層位

当調査区における層位を略述する。層位を大別すれば、Ⅰ層～Ⅴ層に分層することができる。また各層を色調及び細部にいたる土質より細分すれば、Ⅲ層をⅢ―①層及びⅢ―②層、Ⅳ層をⅣ―①～Ⅳ―④層に分けることができた。そしてⅠ～Ⅴ層までの上下関係及び切り合い関係は第30図の柱状模式図に表わした。

Ⅰ層　調査区全域を覆う盛土である。厚さは約40cm。上面（現地表面）は平坦で、平均Ｔ.Ｐ.＋17.5mを測る。

Ⅱ層　ほぼ調査区全域を覆う近年までの耕作土。層厚は約20cm。

Ⅲ―①層　（淡灰褐色砂質土層）ほぼ調査区全域を覆う土層であり、旧石器・古墳時代～江戸時代までの遺物を含む。層厚は約10cm。

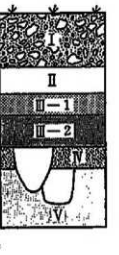
Ⅲ―②層　（淡灰黄褐色砂質土層）ほぼ調査区全域を覆う土層であり、酸化鉄が沈着し微細なマンガンノジュールが散在している。旧石器・古墳時代～江戸時代までの遺物を含んでいる。層厚は約20cm。

Ⅳ―①層　（暗茶褐色粘土層）Ｂ調査区北端部Ｂ・Ｃ20～21区を除き、ほぼ調査区全域を覆う土層であり、古墳時代後半～鎌倉時代までの遺物を含む。層厚は約５cmである。

Ⅳ―②層　（暗黄褐色粘土層）Ｗ調査区Ｄ28・29区周辺を中心に堆積している土層であり、古墳時代後半～鎌倉時代までの遺物を含む。層厚は約10cmである。Ⅳ―①層とⅣ―②層は切り合わないため新旧関係は確認できなかった。

Ⅳ―③層　（暗灰茶褐色粘土層）Ｂ調査区北端部Ｂ・Ｃ20～21区周辺を中心に堆積している土層であり、古墳時代後半～平安時代までの遺物を含む。層厚は約20cmである。Ⅳ―①層、Ⅳ―②層との切り合い関係は確認できなかったため、今後の検討を要する。

Ⅳ―④層　（暗黄色粘土層）Ｃ調査区南端部Ｂ・Ｃ34～37区周辺を中心に堆積している土層であり、古墳時代後期の遺物を



第30図　基本層位模式図

多量に含む。層厚は約10cmである。Ⅳ—①層とⅣ—④層との上下関係は、Ⅳ—④層はⅣ—①層に比べれば下層にあたる。

Ⅴ層　（灰黄色粘土層：地山層）当遺跡のベースになる層で、ひび割れ状の古乾痕の発達が著しい。全調査区全域にほぼ水平に堆積するが、C調査区南端部B・C35～37区付近より南へむけて上がっている。上面はT.P.+16.3～16.8mを測る。

遺構面は、Ⅳ層上面及びⅤ層上面（地山面）に合わせて2面確認することができた。Ⅳ層上面を第1遺構面、Ⅴ層上面を第2遺構面と呼ぶことにした。両遺構面の所属時期は、Ⅳ層を鍵層として、第1遺構面を室町時代より江戸時代前半、第2遺構面を室町時代より以前として位置づけることができる。また両遺構面は上層からの削平を顕著に受け、残存状態は非常に悪く、各々第1遺構面は江戸時代及び第2遺構面は鎌倉末～室町時代二時期にわたっての削平時期が考えられる。

以上、各層位の概要について述べたが、ひき続き主要な遺構の概要を時代順に見ていきたい。なお、当調査区においては、遺物の出土量及び原位置を留めているものが非常に少ないということが、各時代の遺構に共通しているため、遺構の時代比定に関しては今後の検討を要するものもあろう。

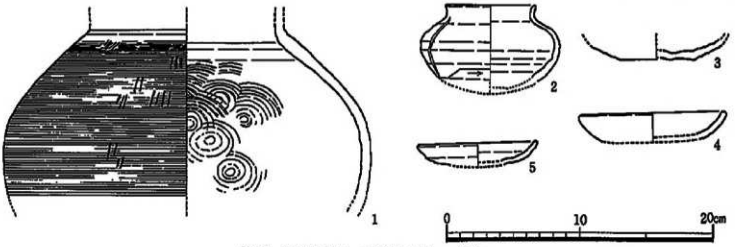
B）古墳時代

古墳時代のものとして、溝、落ち込み等の遺構があげられる。

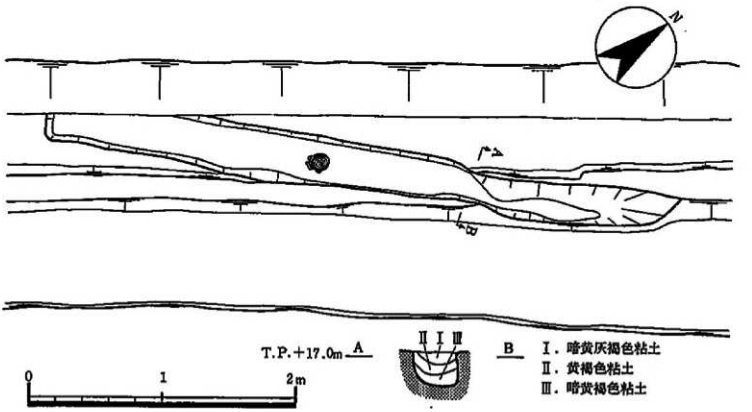
溝BW－7（第31・47図、図版25・31）　B・C27区に所在する。後世の削平により、本来の形状を留めていない。幅40cm、深さ20cmを測る。溝の方向はW調査区よりB調査区へむけて東西方向へ伸び東端では南方へ屈曲している。時期は6世紀後半～7世紀初頭に位置づけられる。

溝BW－7からは、須恵器、土師器を検出した。須恵器では壺・短頸壺・杯、土師器では小皿・羽釜などの器種がある。

須恵器壺（1）は、体部上半部のみ残存し、最大径26.4cm、残存高12.7cmを測る。外面は平行叩き成形後カキメ調整を施しており、内面は回転ナデ調整を施しているが、同心円文が残っている。口頸部は欠損しているが垂直に立ち上がる短頸壺である。短頸壺（2）は口径 6.8cm、残存



第31　図溝BW－7出土土器　(1/4)



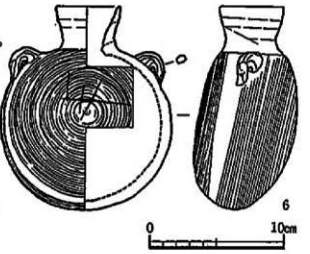
第32図　溝C－3遺構平面図及び土層断面図　(1/40)

高5.7cm（復原高7.7cm）、体部最大径10.4cmの小型品である。体部に縦方向に「｜」のヘラ記号がある。肩部に最大径を有し、丸底を呈する。口縁部は短かく外反してのび、端部は丸い。体部上半部は回転ナデ調整、下半部は回転ヘラ削り調整が施されている。杯（3）は底部のみ残存し、底径5.8cm、残存高1.1cmを測る。外面は回転ヘラ切り後未調整で6世紀末～7世紀初頭[註2]の小型杯になると考えられる。

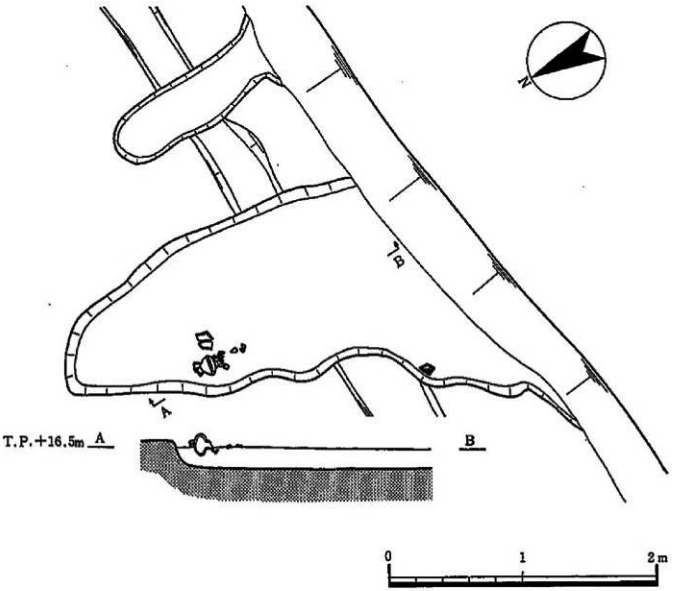
土師器小皿（4）は口径11.0cm、残存高 2.0cmを測り、体部は平底より丸く屈曲して立ち上がり口縁端部は丸い。小皿（5）は口径9.0cm、残存高1.6cm（復原高 1.8cm）を測る。体部は浅い丸底より外反して立ち上がる。

溝C－3（第32～33図、図版22・29）　C33区に所在する。幅40cm、深さ25cmを測る。方向は、北東方向へ伸び、後世のユンボの掘削溝により端部は欠損している。埋土はⅠ～Ⅲ層に分層することができる。Ⅰ層は暗黄灰褐色粘土、Ⅱ層は黄褐色粘土、Ⅲ層は暗黄褐色粘土である。時期は6世紀後半を想定して間違いないだろう。

溝C－3からは、須恵器提瓶（6）の完形品を検出した。これは口径9.8cm、体部最大径12.8×7.2cm、器高15.2cmを測り、小型化している。頸部は外反して立ち上がり口縁部はやや外傾して立ち上り、端部は丸い。体部はほぼ正円形を呈し、一方の面は平坦面、他方の面は丸い面である。また丸い面の中央には円板で蓋をしてふさいだ痕跡がみられる。これは平坦面を底部にしてロクロ回転により成形し、底部にあたる面は回転ヘラ削り（ロクロ回転右方向）調整



第33図　溝C－3出土土器　(1/4)

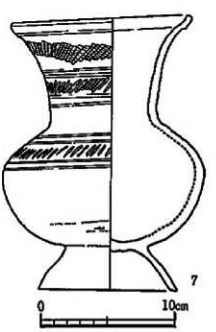


第34図　落ち込みB－7遺構平面図及び断面図　(1/40)

を施して薄くした後、全体にカキメ調整を施している。両肩部には平坦面に傾むいた環状の耳が貼付されている。体部中央に「卅」と鋭く陰刻されたヘラ記号がある。これは6世紀後半のものと考えられる。

落ち込みB－7（第34～35図、図版19・29）　B調査区南端C27区に所在する不定形な土坑である。調査区南壁に接しているため南半部は未検出であり、その全貌は定かでない。幅1.4m、深さ30cmを測る。時期は6世紀後半である。

落ち込みB－7からは須恵器台付壺の完形品を検出した。この他にも須恵器甕体部破片がある。台付壺（7）は口径13.4cm、体部最大径14.9cm、器高20.0～20.7cm、脚部径10.3cmを測る。頸部から体部上半部にかけて2条の凹線が4段巡っており、口縁部と一段目の間、一段目と二段目の間、三段目と四段目の間に右→左方向へ施文された三段の櫛描列点文がある。口縁部直下の列点文は非常に浅く不明瞭である。口頸部内外面、肩部には自然釉がかかっている。このような台付壺は6世紀後半に属すると考えられる。



第35図　落ち込みB－7出土土器（1/4）

C）奈良時代

奈良時代のものとして、建物、溝、落ち込み等の遺構があげられる。

建物B－1（第36～37図、図版18・32）　B調査区北壁に接し、B・C20区に所在する。2間×2間（4.5m×4.5m）の柱穴を確認することができた。約半分は未検出であるため、詳細な方向及び柱穴の数等は、不明であるが、南北棟と考えている。

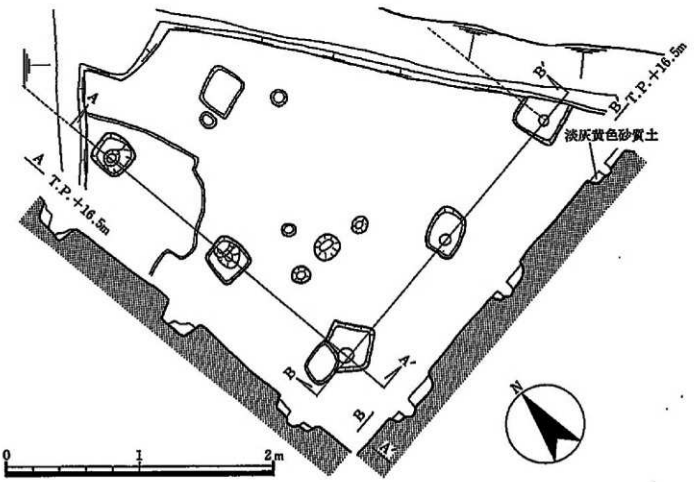
出土遺物として、柱穴柱根部及び掘方埋土中より須恵器の杯蓋、土師器の塝把手・小皿・丸底壺の細片を検出した。

須恵器杯蓋（8）は復原口径約13.6cm、残存高0.9cmを測る。口縁端部で垂直に屈曲しており、天井部中央に宝珠つまみのつく、扁平な8世紀代の杯蓋である。土師器塝把手（9）は、正面形は三角形状を呈し、先端部は上方に大きく屈曲した形態である。塝の体部に挿入されて作られている。

建物B－2（第47図、図版18）　C21区に所在する。全貌は定かでないが、2つの柱穴を確認することができた。柱穴間は1.8mを測り、調査区西側に中心があるものと考えられる。

出土遺物として、柱掘方よりカキメ調整の須恵器壺体部破片及び土師器の細片数点などがみられる。

溝B－1（第37・47図、図版18・32）　B・C20～21区に所在する。B調査区を南北に横切り、落ち込みB－1を切り込んでいる。幅50cm、深さ10cmを測る細長い溝である。溝B－1～3を切り合い関係より比較してみれば、最も古い溝である。



第36図　建物B－1遺構平面図及断面図（1/60）

出土遺物として須恵器の壺・杯・甕の細片、土師器の高台付杯・高杯脚部・羽釜等の細片がみられる。

須恵器壺（10）は底部のみ残存し、底径14.8cm、高台高0.9cm、残存高3.0cmを測る。底部と体部の境界真上及び底部外面に回転ヘラ削り調整を施している。

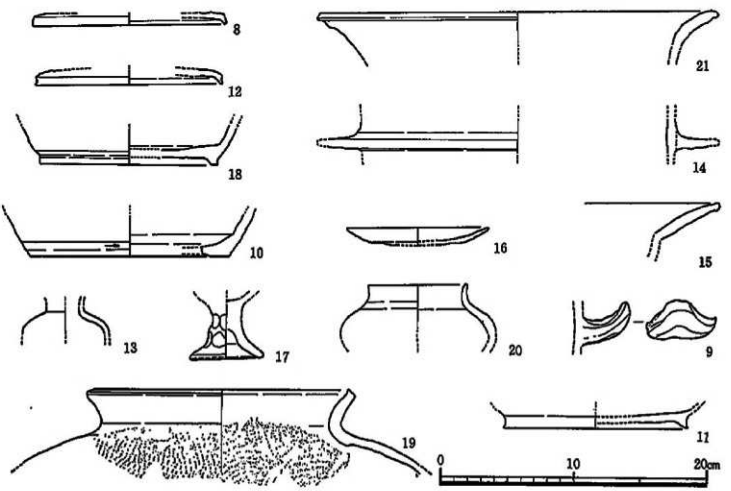
土師器高台付杯（11）は高台径13.8cm、高台高0.9cm、残存高1.5cmを測る。高台は断面三角形を呈する。

溝B－2（第37・47図、図版18・32）　B・C21区に所在する。東方へ彎曲しながら、落ち込みB－1～2、溝B－1を切り込んでいる。幅50cm、深さ15cmを測る細長い溝である。

出土遺物として、須恵器の杯蓋、小壺、甕体部破片、土師器の羽釜鍔部分・その他の細片多数を検出した。須恵器の杯蓋（12）は口径13.9cm、残存高 1.1cmを測り、口縁端部が屈曲して垂直に下る形態である。小壺（13）は頸部径2.8cm、残存高1.8cm、体部最大径5.8cmを測る。 肩部の一部分のみ残るため全体形はわからないが、短頸壺になると考えられる。

土師器の羽釜（14）は鍔部のみ残存し、残存部分体部径は約23cm、残存高2.6cmを測る。鍔部の端部は欠損しておりその長さは不明であるが、現存部では2.4cmである。磨耗が著しく、調整はわからない。茶褐色を呈し、胎土に石英、長石、雲母、角閃石を含む生駒西麓産の土器と思われる。

溝B－3（第47図、図版18）　B・C21区に所在する。溝B－2を切り込み南北方向へ伸びる、幅50cm、深さ20cmを測る細長い溝である。切り合い関係より、溝B－1～3を比較してみれば、最も新しい溝である。



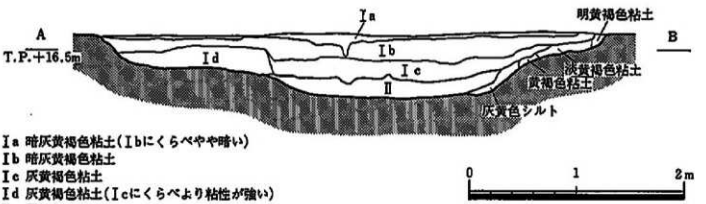
第37図　奈良時代遺構出土土器　（1/4）

出土遺物は、土師器小皿口縁端部の小片をはじめ、土師器の細片のみである。

溝BW－6（第38～39図、図版25・29・31）　B～D25～27区に所在する。B・W調査区を、東西に横切る比較的規模の大きな溝であり、調査地区外においても、比較的長く続いているものと考えられる。幅 6.0m、深さ60cmを測り、幅のわりに浅い溝である。埋土は大別して、Ⅰ～Ⅱ層に分層することができる。Ⅰ層は、灰黄褐色系の粘土層であり、黒褐色系のシルト質を呈するⅡ層とは、趣きを異にする。またⅠ層の出土遺物中には、瓦器椀底部があり、Ⅱ層とⅠ層間には、埋没時期の差異を指摘することができる。掘削時期は、下層であるⅡ層中の遺物より、7世紀後半と考えている。

Ⅰ層の出土遺物として、須恵器では杯4点・高台付杯・杯蓋3点・平瓶・甕・壺・鉄鉢形土器・壺・甕の細片数点、土師器では小型高杯脚部・短頸壺・羽釜・瓦器椀、この他に朝顔型埴輪、6世紀代とみられる杯蓋、7世紀初頭とみられる杯の破片、砂岩製砥石などがみられる。

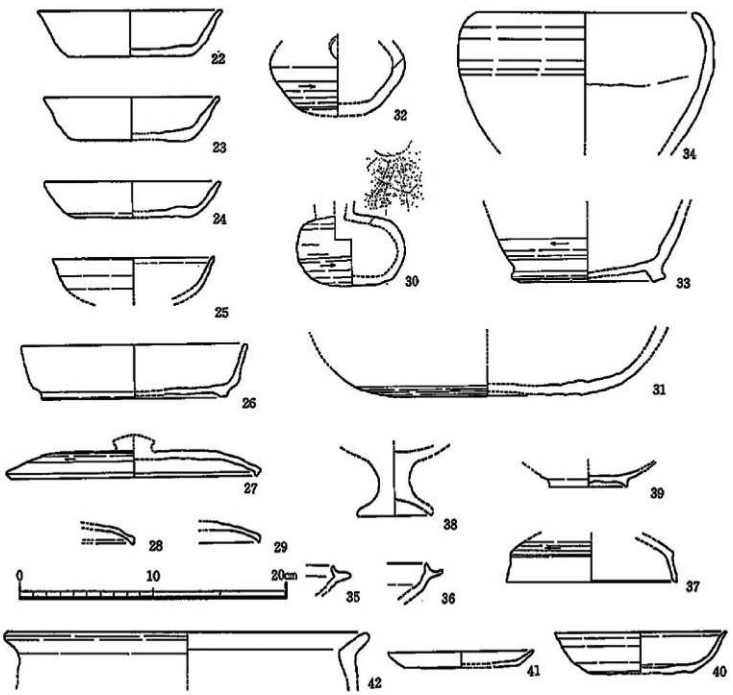
須恵器杯（22）は、口径13.7cm、器高3.4cm、底径9.0cm、（23）は口径13.2cm、器高3.3cm、底径9.0cm、（24）は、口径13.2cm、器高2.7cm、底径8.7cm、（25）は口径12.0cm、残存高2.6cmを測る。（22）・（23）は、底部は回転ヘラ切りによるが、回転ナデ調整が丁寧に施され平らな面を呈しているが、（24）の底部は回転ヘラ切り痕のままで凹凸のある面になっている。高台付杯（26）は、口径16.8cm、器高4.0cmを測る大型品である。底部と体部の境界部よりやや内側に高台径13.8cm、高台高 0.5cmの断面逆台形を呈する高台が貼り付けられている。底部中央部は回転ヘラ切り痕のままである。杯蓋（27）は、口径18.5cm、残存高 2.0cmの大型品で、天井部中央に扁平な宝珠つまみがつく。天井部は回転ヘラ削り調整後回転ナデ調整が施されている。下方へ短かく屈曲した口縁端部は内傾した凹面を呈する。（28）・（29）も同様な杯蓋であるが、（28）は口縁端部は垂直に下がる凹面、（29）はやや内傾した凹面を呈する。この杯・杯蓋8点は、8世紀前半に位置すると考えられる。平瓶（30）は、体部のみ残存し、体部最大径8.0cm、残存高1.7cmの小型品である。口頸部は欠損している。頸部直下の天井部に「八」のヘラ記号がある。巻上げ成形後体部下半はヘラ削り調整が施されている。（31）は破片のため明確な断定は下し難いが、平瓶の底部破片と考えられる。底径14.0cm、残存高 2.7cmを測り、かなり大きなものになる。底部外面中



第38図　溝ＢＷ－６土層断面図　（1/60）

央部に粘土紐巻上げ痕が残り、回転ヘラ削り調整、周縁部には、ナデ調整、内面には、回転ナデ調整が施されている。底部内面には自然釉がかかっている。瓶（32）は体部のみ残存し、体部最大径10.0cm、残存高 4.4cmを測る。体部中央に最大径を有し、底部は丸底を呈する。体部下半は回転ヘラ削り調整、上半は回転ナデ調整を施している。体部中央に勾配の急な孔が穿たれている小型瓶である。壺（33）は底部のみ残存し、残存部最大径14.5cm、残存高 4.8cmを測り、底部に「ハ」の字形に高台径11.4cm、高台高0.8cmの高台を貼り付けている。高台直上の体部下半から底部にかけて回転ヘラ削り調整が施されている。鉢形土器（34）は、口径16.3cm、残存高 9.6cmを測る。体部はゆるやかに円弧を描いて外上方へのび、口縁部は内彎し端部は丸く終る。体部下半は、回転ヘラ削り後回転ナデ調整を施しており、上半部及び内面は回転ナデ調整を施している。

土師器高杯（38）は脚部の柱部のみ残っており、脚柱中央部径2.3cm、残存高4.3cmを測る小型高杯である。磨耗のため調整は不明である。



第39図　溝ＢＷ－６出土土器　(1/4)

瓦器椀（39）は底部のみ残っており、高台径5.8cm、高台高0.6cmの断面三角形の高台がつく。表面磨耗のため暗文の有無もわからず、詳細な時期は不明である。

Ⅱ層の出土遺物として、須恵器では杯・壺・甕の破片、土師器では小皿・甕・羽釜の破片などがみられる。

須恵器杯（40）は、口径12.6cm、器高 3.1cmを測り、底部と体部の境界から外上方に内彎気味に立ち上り、口縁部は内傾する面を成す。底部は回転ヘラ切り痕のままであるが、底部内面には仕上げナデ調整が施されている。これは７世紀後半頃と考えられる。

土師器小皿（41）は口径10.8cm、器高 1.2cmを測る。表面は磨耗のため調整不明である。甕（42）は口頸部のみ残存し、口径27.2cm、残存高 3.1cmを測る。口頸部は「く」の字形を呈し、端部は丸くおさめるが、非常に短い。体部は余り張らず、長胴を呈すると思われる。表面は磨耗のため調整不明である。

落ち込みＢ－１（第37・47図、図版18・32）　Ｃ20～21区に所在する。溝Ｂ－１～３により切り込まれている、不定形な浅い落ち込みである。長径5.5m、短径1.8m、深さ５cmを測る。

出土遺物として、須恵器細片、土師器の鉢、土師器の細片多数、黒色土器小皿を検出した。土師器の鉢（15）は、口縁部が大きく屈曲した部分から先端部の破片で、口径も全体の形態も明確にはわからない。黒色土器（16）は口径10.6cm、残存高1.2cm（復原高1.3cm）を測る。底部に指頭圧痕が残るのみで、他の調整は不明である。８世紀末頃のものと考えられる。

落ち込みＢ－２（第37・47図、図版18・32）　Ｂ21区に所在する。溝Ｂ－１～２により切り込まれている不定形な浅い落ち込みである。長径2.8cm、短径70cm、深さ３cmを測る。

出土遺物として、須恵器破片、土師器の高杯脚部、土師器の細片を検出した。土師器の高杯（17）は、脚部底径5.5cm、残存高4.2cmを測る小型高杯である。磨耗が著しく調整は不明だが外面に二段の指頭圧痕が観察される。

落ち込みＣＷ－１（第37・40図、図版22・25・32）　Ｂ～Ｄ27～29区に所在する。Ｗ調査区中央を南北に浅い谷状に広がる幅広な落ち込みである。北端部は溝ＣＷ－７を切り込み、結果的には削平している。南端部は東へ伸びＣ調査区へ続いている。幅 5.6m、深さ30cmを測る。埋土は大別して、Ⅰ～Ⅲ層に分層できる。Ⅰ層は灰褐色系の砂質土層であり、シルト層を呈するⅡ・Ⅲ層とは趣を異にする。Ⅰ層は自然堆積層と捉えるより、人為的な整地による埋土の可能性がある。

出土遺物として、須恵器では、高台付杯・甕口頸部の他に、平瓶・甕・提瓶の破片、土師器で

第40図　落ち込みＣＷ－１土層断面図（1/50）

は短頸壺・甕・高台付杯・羽釜・円筒形土製品などがみられる。

須恵器の高台付杯（18）は、口縁部が欠損しており、体部残存部径16.0cm、残存高 2.8cmの大型品である。体部は底部より屈曲して立ち上り、底部立ち上り部分に底径13.2cm、高さ 0.5cmの断面台形の高台が貼付けられている。底面は回転ヘラ切り後高台を貼り付けて回転ナデ調整、底部内面では仕上げナデ調整が施されている。甕（19）は、口径19.9cm、残存高 5.6cmを測る。肩部外面には平行叩き痕、内面には凹凸の著しい同心円文がある。大きく広がる肩部から口頸部は外反してのびるが短かく、口縁部は外傾する端面を成す。

土師器の短頸壺（20）は、体部最大径11.5cm、残存高 3.1cmを測り、体部上半部のみ残るが口縁端部は欠損している。磨耗のため表面の調整は不明である。甕（21）は口頸部のみ残存しており、口径約30cm、残存高 2.6cmを測り、かなり大きく外反している。おそらく奈良時代の長胴の甕の口頸部と考えられる。

この他に須恵器の壺頸部の破片を利用し、その周辺を打ち欠いて作った径3.6×3.6cmの円板状土製品がある。円筒形土製品は二個体あり、中心部が空洞につくられており上端部は何か接合するものがあり、下端部は細く、剝れたようにもみられる。二個体の接合面はほぼ平坦で接合する面とも別々の個体とも考えられる。用途不明である。他に円筒埴輪の破片も検出されている。

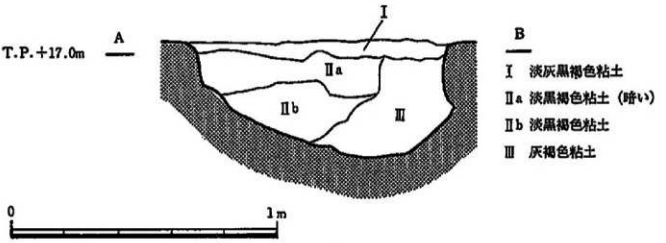
D）鎌倉～室町時代

鎌倉～室町時代の時期として捉えられる遺構は、溝、小溝、井戸、土坑、畦畔状遺構があげられる。

溝C－1（第41～42図、図版23・33）　B～C32～33区に所在する。C調査区を南北方向に延び溝C－2を切り込んでいる溝である。幅 1.0m、深さ45cmを測り、埋土は大別してⅠ～Ⅲ層に分層することができる。Ⅰ層は淡灰黒褐色粘土、Ⅱ層は淡黒褐色粘土、Ⅲ層は灰褐色粘土を呈している。

出土遺物として、須恵器の杯・瑠・甕の破片、土師器の細片、瓦器椀、平瓦の破片等がある。

瓦器椀（43）は底部の一部分のみ残っている。高台径5.7cm、残存高1.1cmを測る。底部に断面逆台形のしっかりした高台が貼付けられている。高台端面は欠損している。調整及び暗文は磨耗

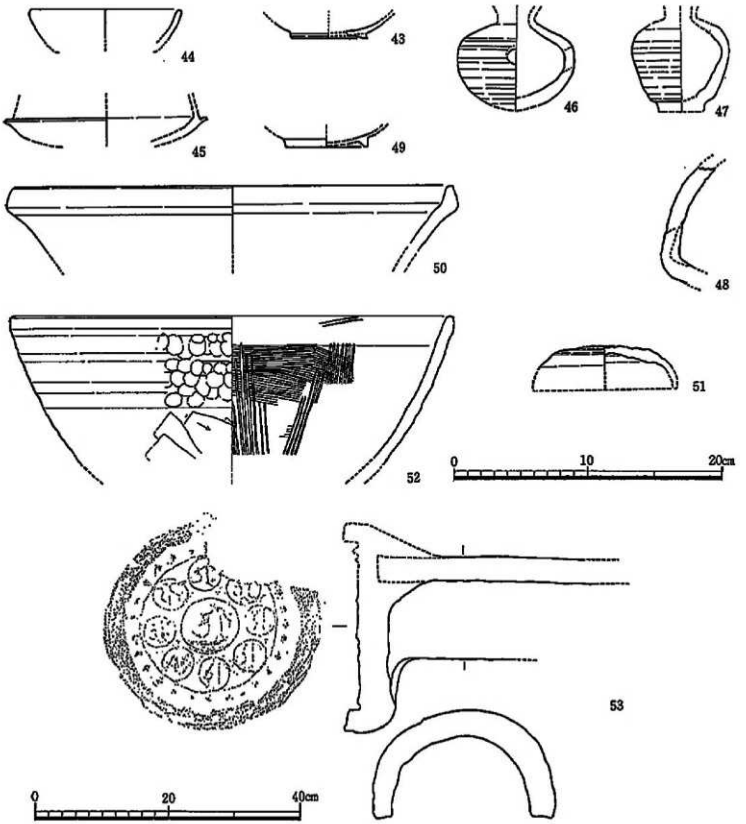


第41図　溝C－1土層断面図　（1/20）

のため不明であり、所属時期も確かなことはわからないが、高台の形態より13世紀になると考えられる。

須恵器杯（44）は口縁部破片で、口径約11cm、残存高 2.3cmを測る小型品である。外上方に内彎してのびた体部は口縁部で直に立ち上がり、７世紀のものになると考えられる。杯（45）は受部破片で、受部径約15.0cm、残存高 2.0cmを測る。６世紀後半になると考えられ、（44）と同様混入したものであろう。

この他に凸面には縄目痕、凹面には糸切り痕の残る平瓦破片が出土している。



第42図　鎌倉～室町時代遺構出土土器（1/4）・瓦（1/6）

溝C－2（第42～43図、図版23・33）　B～C33～34区に所在する。C調査区西方より東へ向けて延び、溝C－1に接し、南へ屈曲している。幅 1.3m、深さ50cmを測るが、東端部では広がっている。埋土は大別してⅠ～Ⅲ層に分層できる。上層であるⅠ層と、最下層にあたるⅢ層との間には、シルト質を呈するⅡ層が存在し、埋没時期の相違が明確に指摘できる。またⅠ層は自然堆積と捉えるより人為的な整地による埋土の可能性をもつ。溝C－1～2の所属時期は、両者の切り合い関係より、溝C－1を14世紀前半以後、溝C－2を13世紀末にあてたい。

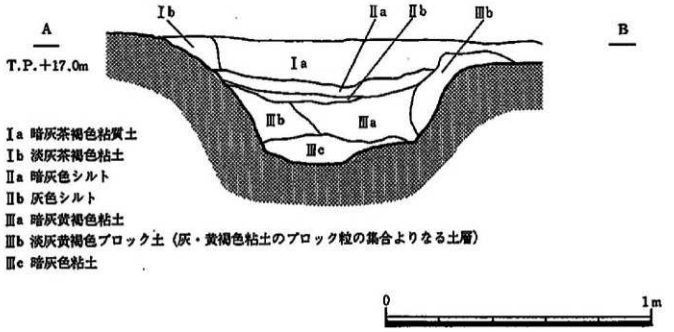
出土遺物として、須恵器では瓶・小瓶子・大甕・甕や壺の細片、土師器では杯・甕・小皿、瓦器椀、須恵器こね鉢、平瓦等がみられる。

須恵器の瓶（46）は体部最大径8.8cm、残存高6.1cmを測る小型品である。体部下半部は回転ヘラ削り調整、体部上半部、内面は回転ナデ調整を施している。小瓶子（47）は体部最大径7.3cm、残存高 6.3cmを測る。肩部に丸みをもつ瓶子で、底部には高台が削り出されている。最大径を有する部分から下は回転ヘラ削り調整後回転ナデ調整、その上部は回転ナデ調整である。8世紀後半～9世紀になると考えられる。甕（48）は頸部のみ残存し、小片のため口径は不明であるが、器壁も 1.2cmと厚く、大甕になるとみられる。上端部に段を形成する凹線が2条ある。頸部の基部に一部分粘土を補って補強している。

瓦器椀（49）は高台径6.2cm、残存高0.9cmを測る。貼り付け高台は断面逆台形である。表面は磨耗のため調整及び暗文は不明であるが、高台の形態より溝C－1出土の瓦器椀より古くなると考えられ、12世紀後半になるのではないだろうか。

須恵器こね鉢（50）は口縁部破片で、口径約32cm、残存高 5.0cmを測る。体部は外上方に立ち上り、口縁部で上方に屈曲して内傾する。端部は丸い。これは播磨魚住窯の製品と思われ、13世紀～14世紀のものである。

平瓦は4点あり、内3点は凸面に縄目痕、凹面に布目痕が残り、その内、側面の残る2点は側



第43図　溝C－2土層断面図　（1/20）

面にも布目痕が残り、両側縁を面取りしている。この２点は一枚作りの平瓦である。他の１点は凹面に糸切り痕が残るが、凸面は磨耗のため縄目痕があるのか、ナデ調整が施されているのか不明である。側面は削られている。

小溝Ｂ－１～８、Ｃ－１～８、Ｅ－６～10、Ｗ－９（第47図）　各調査区より検出された小溝である。溝の方向は大別して、東西方向へ延びるものと、南北方向へ延びるものとがある。幅40～15cm、深さ２～５cmを測る。切り込み面はⅣ層上面からであり、埋土は淡灰褐色の砂質土である。出土遺物は少量の土師器片及び須恵器片が混入しているのみで、詳細な時期は不明であるが、室町時代のいずれかの時期のものであろう。性格的には、農耕作業の際に掘られた溝と思われる。

井戸Ｃ－１（第47図、図版22）　Ｃ調査区28区において検出された。径1.1～1.2m、深さ 2.8mを測る円形の素掘り井戸である。埋土は人工的な埋め込みにより、大別して、Ⅰ～Ⅱ層に分層することができる。上層よりⅠ層は灰茶褐色粘土、Ⅱ層はブロック土（灰色、茶色粘土及び暗灰色粗砂の混った）である。Ⅰ層の灰茶褐色粘土は、突き固められ、かなり硬質である。

出土遺物として、須恵器・土師器の細片がみられるのみで、混入したものである。

井戸Ｃ－２（第47図、図版21）　Ｃ調査区Ｃ33区において検出された、径 1.4～ 1.5m、深さ 2.8mを測る円形の素掘り井戸である。 埋土は、大別してⅠ～Ⅶ層に分層することができる。上層より、Ⅰ層（淡灰褐色土）、Ⅱ層（暗赤褐色シルト）、Ⅲ層（灰褐色粘質土）、Ⅳ層（黄褐色・灰褐色粘土粒によりなるブロック土）、Ⅴ層（淡茶褐色粘土）、Ⅵ（灰色粘土）、Ⅶ層（暗灰色粘砂）である。

出土遺物として、須恵器の杯蓋・甕の破片があるが、ともに混入したものである。

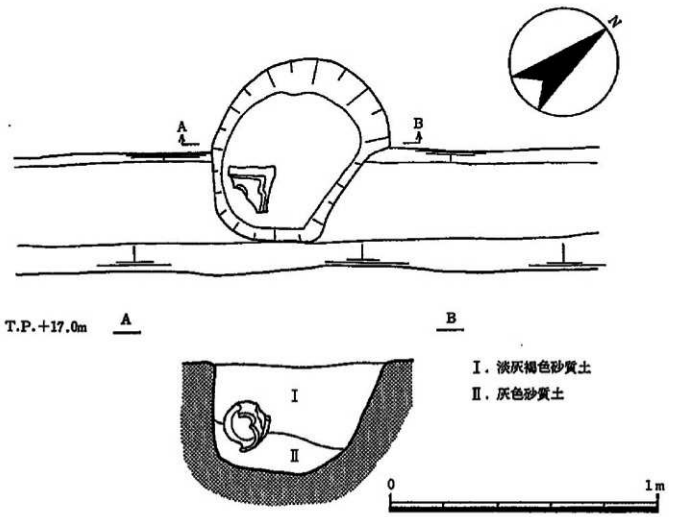
須恵器杯蓋（51）は残存部最大径10cm、残存高 1.8cmを測る。天井部中央には回転ヘラ切り痕がみられ、天井部内面には仕上げナデが施されている。６世紀末の小型杯蓋になると考えられる。人為的な埋め込みの際に混入したものであろう。

土坑Ｃ－１（第42・47図、図版21・33）　Ｃ調査区北端Ｂ28区に所在する円形の土坑である。径 1.4m、深さ45cmを測る。埋土は灰色砂質土であり、同層中には茶褐色粘土ブロックを含んでいる。土坑の底には、付着する状態で、15～16世紀前葉の土師質土器擂鉢の出土を見ている。

出土遺物として、土師質土器擂鉢、瓦器細片、須恵器壺・甕の破片などがある。

土師質土器の擂鉢（52）は口径33cm、残存高11.2cmを測る。体部は浅く内彎気味に外上方へのび、口縁端部で上方にわずかにのび、端面は丸い。内外面とも磨耗しているが、外面上半部は指頭圧痕、下半部にはヘラ削り痕がみられる。内面は横方向のハケ調整が施される。その後に 0.5～ 1.5mm幅で、８条以上12条位の擂目がつけられている。また片口もつくられている。これは15世紀後葉～16世紀前葉の擂鉢である。[註－3]

土坑Ｅ－８（第42・44図、図版28・30）　Ｅ調査区東南端Ａ29区に所在する円形の土坑である。径70cm、深さ40cmを測り、埋土はⅠ～Ⅱ層に分層することができる。Ⅰ層下部より梵字文軒丸瓦が１点出土しているが、土坑の切り込み面及び出土状況を考えて、原位置を保っているものとは

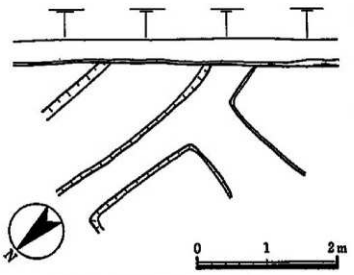


第44図　土坑E－8遺構平面図及び土層断面図　(1/20)

考えられない。

梵字文軒丸瓦（53）は、瓦当直径15.1～15.8cmで丸瓦部を含めた残存長19.0cmを測る。丸瓦部内面には布目痕がついている。瓦当面には中心にやや大きめの梵字「アー」、その周囲に八葉の梵字が配され、内縁には連珠文が配される。外縁は無文である。瓦当面の梵字は胎蔵界曼荼羅中台八葉院を表わしていると思われる。胎蔵界曼荼羅中台八葉院は胎蔵界五仏と四菩薩とから構成されている。

畦畔状遺構（第45図、図版19）　B調査区B22区に所在している遺構である。上部幅50cm、下部幅60cm、高さ5cmを測る。畦畔はⅣ—①層を削り出して成形されており、T字形に交差して、夫々ほぼ南北方向・東西方向へと延びている。残存状態は後世の削平をうけ非常に良くない。埋土は黄灰色を呈する砂質土層である。詳細な時期については、今後の検討を要する。



第45図　畦畔状遺構平面図　(1/30)

出土遺物として、須恵器、土師器、瓦器の細片がみられるのみである。

E）江戸時代以降

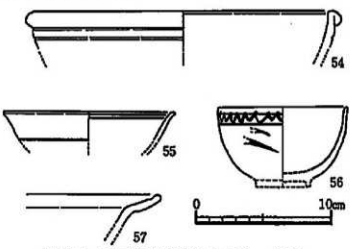
江戸時代以降の時期として捉えられる遺構は、溝、井戸、土坑等があげられる。

溝BW－5（第46～47図、図版25・33）　B・W両調査区B～D25～26区において検出された東西方向に延びる、幅 2.0m、深さ20cmを測る溝である。時期は、江戸時代以降に形成されたⅡ層上面より切り込んでいるため、江戸時代以降のものと考えられる。

出土遺物として、瀬戸焼の鉢、磁器の茶椀、中・近世の平瓦、須恵器の杯・高台付杯・甕の破片、土師器の羽釜の破片等がみられる。

瀬戸焼の鉢（54）は口縁部破片で、復原口径23.4cm、残存高 2.8cmを測る。肥厚した口縁部上面を除いて内外面に釉薬がかけられており、胎土は茶褐色を呈し、釉薬は灰緑色を呈している。口縁部直下に浅い凹線が１条巡っている。磁器の茶椀（55）も口縁部破片で、復原口径12.8cm、残存高2.2cmを測る。口縁部内面に２条の直線文の巡る茶椀である。

小溝W－1～8、E－1～5（第47図）　W、E両調査区、C27～28区、A、B27区で検出された小溝群である。幅30～70cm、深さ２～５cmを測り、東西方向へ延びている。同小溝群は、Ⅱ層上面より切り込んでいて、埋土はⅡ層である。詳細な時期は不明であるが、江戸時代以降と考えられる。性格的には、農耕作業の際に掘削された溝と思われる。



第46図　江戸時代以降出土土器　(1/4)

井戸C－3（第47図、図版20）　C調査区B32区において検出された幅60～70cm、深さ 2.6cmを測る素掘り井戸である。大別してⅠ～Ⅲ層に分層することができる。上層よりⅠ層は淡灰褐色砂質土層であり、Ⅱ層は暗灰色シルト層、Ⅲ層は暗灰色砂礫層である。Ⅰ層は他の井戸C－1～2と同様人為的な埋め込みによるものと考えられる。Ⅱ層下部より近世瀬焼の平瓦が出土していて、時期的には江戸時代以降と考えられる。また性格的には、農耕に伴う井戸と考えられる。

土坑E－4～6（第47図、図版27）　E調査区A～B27区において検出された円形及び不正円形を呈する土坑である。幅1.0～1.5m、深さ40～60cmを測る。土坑内には漆喰製の野壺が検出され、埋土中には有機質を多量に含む土層が確認された。時期的には、江戸時代以降であろう。

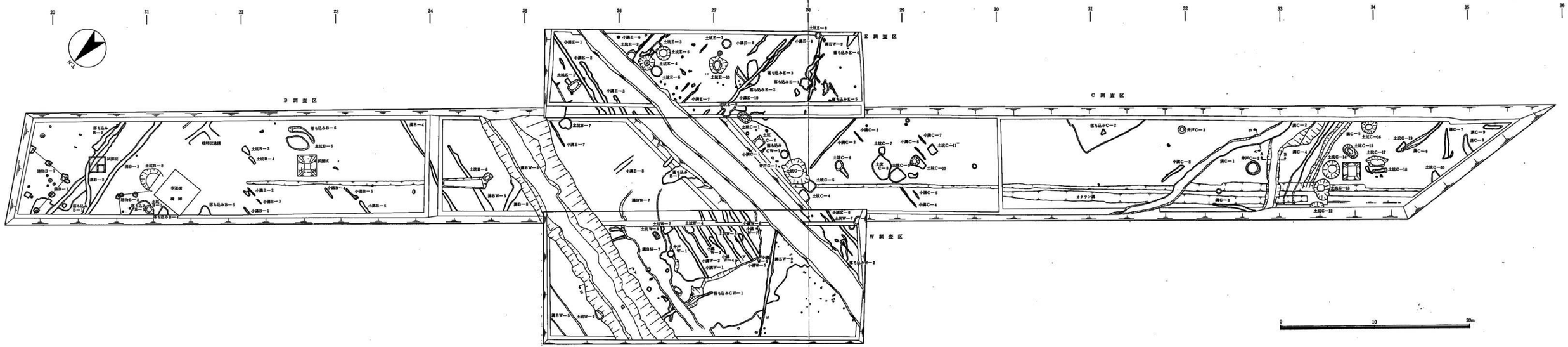
土坑E４から幅13cm、長さ6.5cmの鉄製鍬先を検出した。

土坑C－12～16（第47図、図版33）　C調査区B・C34区で検出された土坑群である。幅 2.2～ 0.9m、深さ53～74cmを測り、若干東方へ彎曲しながら、南北へ伸びるように、五つの土坑が並んでいる。埋土は非常に類似していて、ほぼ同時に埋没したものと考えられる。時期は江戸時代以降である。

土坑C－13からは染付茶椀、中世平瓦細片、須恵器の破片を検出した。

染付茶椀（56）は、口径9.6cm、残存高5.3cmを測る。外面に文様が描かれている。

土坑C－15からは陶器、瀬戸焼の鉢（57）口縁部破片を検出した。小片のため口径は不明だが口縁部は屈曲して外に大きく開く。胎土は褐色を呈し内面には白緑色、外面には淡緑色の釉薬が



第47図　大淵遺跡B・C・E・W調査区遺構全体平面図　(1/600)

かかっている。

土坑B－6（第47図）　C25区に所在する楕円形状の土坑である。径は1～0.8mを測り、深さは38cmを測る。埋土はⅠ～Ⅱ層に分層することができ、上層であるⅠ層は、灰色砂質土を呈し、黄褐色粘土粒を含んでいる。Ⅱ層は灰褐色粘土を呈している。

出土遺物として、須恵器・土師器・磁器・近世染付茶椀・近世平瓦などの細片がみられる。

土坑B－7（第47図）　B26区に所在する不正円形の土坑である。径は1.4～1.3mを測り、深さは24cmを測る。埋土は土坑B－6のⅠ層同様灰色砂質土を呈し、黄褐色粘土ブロックを多量に含んでいる。

以上遺構及び遺物の概要をまとめてみたのだが、前記した遺物の他に遺構に伴なわないものとして、多数の石器が出土している。それらの石器については、A調査区の事例も含め次章で触れることにする。

〔註〕

（註－1）西村母文、石神幸子　1983　（「大垣城跡発掘調査報告書－大和川下流東部流域下水道大井処理場放流幹線建設事業に伴う」）大阪文化財センター

（註－2）中村　浩編　1979　（「陶邑Ⅱ－大阪府文化財調査報告書第30輯」）大阪府教育委員会

（註－3）広瀬和雄、森　茂　1981　（「大園遺跡発掘調査概要・Ⅴ－府道松原～泉大津線建設予定地内－」）大阪府教育委員会

第Ⅴ章　二、三の出土遺物の検討

第１節　大堀遺跡出土の石器について

A）はじめに

大堀遺跡より出土している石核、剥片等を含む石器の総点数は86点である。出土遺構及び層位は表２～３のとおりである。出土している遺構の時期及び層位より考えるに、原位置を留めている可能性を有しているものは、皆無と考えて差し支えないであろう。そのため大堀遺跡出土の石器より時代性を考察することは不可能であり、個々の石器を分析することが主要な研究対象となる。この場合石器を分析する主要な項目は、製作技術における分類、石材における分類、器種による分類、等の研究対象が考えられる。

大堀遺跡出土の石器を、製作技術で大別すれば、打製石器と礫石器とに分類することができる。礫石器としてあげられる石器は、和泉砂岩製の砥石２点のみであり、他の84点の石器は全て打製石器である。なお礫石器は数量的にあまりにも少量であり、次報告時に一括して報告することにする。また打製石器を石材より大別すれば、サヌカイト製の石器と玄武岩及び安山岩の石器とに大別することができる。そして後者の石材は石質により、輝石橄欖（かんらん）石玄武岩、無斑晶質輝石安山岩、斑状輝石安山岩　計３種に分類することができる。後者（注－1）の３種の石質よりなる石器は、風化が著しく進んでいて一見特異な石器群である。

以上大堀遺跡出土の石器についての概要を簡単に触れたのだが、次に主要な石器を説明する。

B）サヌカイト製石器

石材がサヌカイトよりなる石器は計63点出土していて、大堀遺跡出土の全打製石器の中で75%を占めている。以下主要な器種ごとに説明していく。

サヌカイト原石（第48図１）

サヌカイト原石は計３点出土している。

1.　6㎝×4㎝大のサヌカイト原石である。表面は転磨により磨滅を受けている。

分割礫（第48図２）

分割礫として分類できるものは計４点出土している。

2.　a・b両面共に大きな一面の、ポジティブ・ネガティブな剥離面よりなる肉厚な板状の分割礫である。c面はa面からの加撃による折れ面状を呈している。板の木口にあたる背後の面には、礫面を顕著に残している。形状より推定して、打面が失われた盤状剥片（注－2）と考えられる。

石核（第49図３～５）

旧石器時代の石核として分類できるものは２点、縄文時代以降の石核として分類できるものは２点、計４点出土している。

3. 典型的な翼状剥片石核である。a面は、部分的に残る礫面と打面調整よりなる。b面にはポジティブな底面を残している。c・b面に残る翼状剥片剥離痕には、大小2面の剥離痕が認められる。

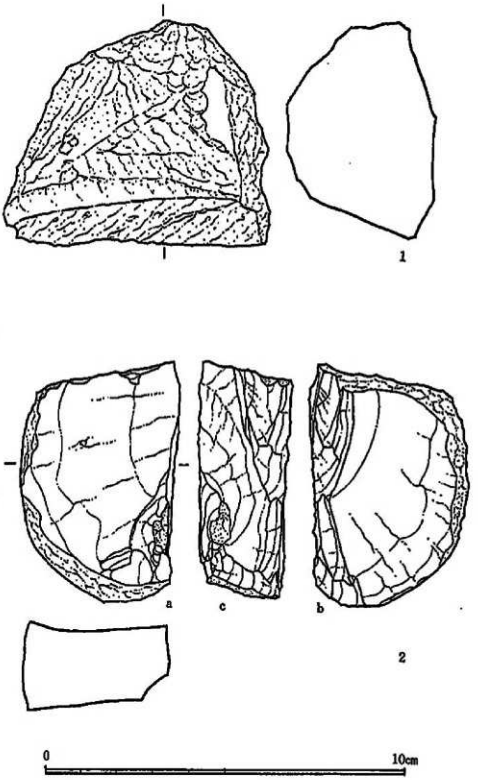
4. 横長状の剥片を剥離した横長剥片石核である。a面は、打面として用いている礫面と、背後より加撃している剥離面よりなる。b面には、素材の主要剥離面と、複数の小さな剥離面が、認められる。

5. 礫面上を打面として用い、円盤状の形態をとる石核である。a面は、約半分が新しい剥離により欠損しているが作業面である。打点は礫面の縁辺部を移動している。

剥片（第49～50図6～13）

剥片として分類できるものは計27点出土している。内訳は、翼状剥片・横長剥片・縦長剥片・剥片等である。

6. 小さな翼状剥片である。背面はポジティブな底面及び2面の剥離面により形成されていて、腹面は主要剥離面である。打面は一部欠損しているが、大きな剥離面と、打点部付近に認められる複数の小さな剥離面よりなっている。

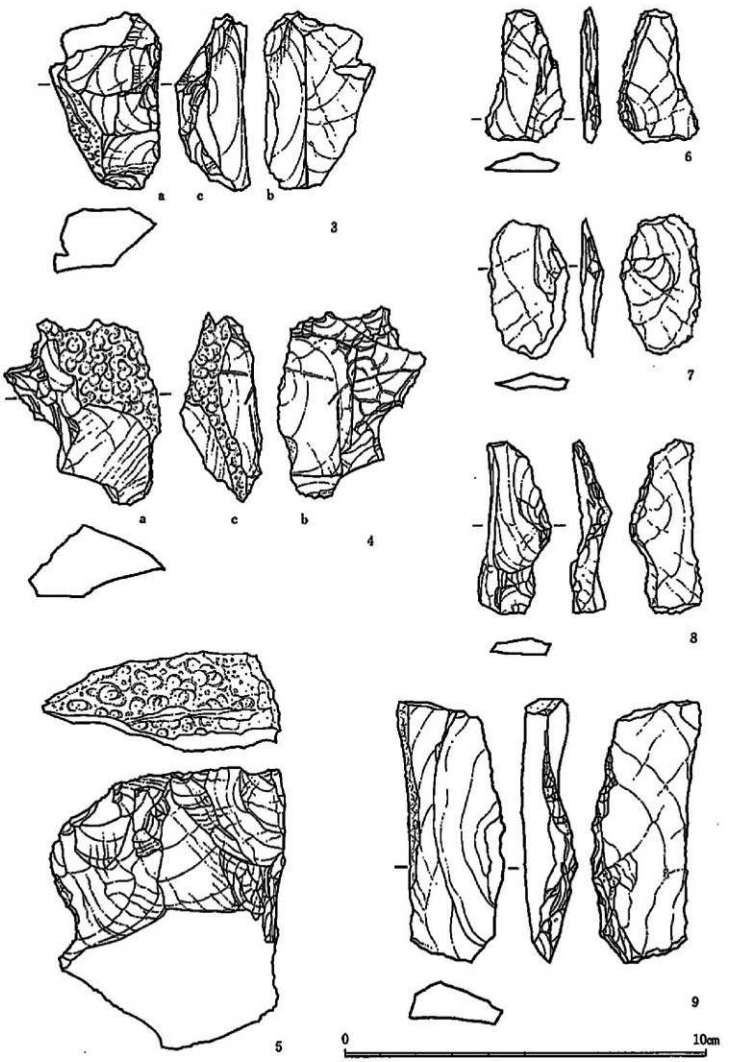


第48図　大堀遺跡出土石器(1)　(3/4)

7. 6同様小さな翼状剥片である。背面は、底面及びネガティブな剥離面よりなっていて、腹面は、主要剥離面であり、バルバスカーが認められる。打面は調査時の欠損により全体像はつかめないが、打面調整が認められる。

8. 典型的な翼状剥片である。背面は底面及び複数の剥離面よりなり、打面部付近には、打面縁調整痕[註-3]が認められる。腹面は主要剥離面である。打面は大きな一枚の剥離面と、複数の小さな剥離面よりなっている。

9. 8と比べ、比較的大きな翼状剥片である。背面は端部に残る礫面と、ポジティブな底面及び



第49図　大堀遺跡出土石器(2)　(3/5)

一面の大きな剥離痕と、それに先行する小さな剥離痕よりなる。腹面は主要剥離面であり、バルバスカーが認められる。打面は複数の小さな剥離痕が顕著に認められる。先端部には背面方向からの剥離面があり、石核調整の剥離と思われる。

10．不定形な形態を呈する翼状剥片である。背面は底面及び2面の大きな剥離面よりなり、腹面は主要剥離面である。打面は欠損箇所が認められるが、3面の打面調整痕が認められる。

11．背面が多方向の剥離面よりなる横長剥片である。腹面は主要剥離面である。打面は部分的に欠損箇所が認められるが、複数の打面調整痕が認められる。先端及び末端部には、石核調整によるものと考えられる剥離面が認められる。

12．背面に礫面を多量に残した小さな縦長剥片である。背面には礫面と、主要剥離面より先行する縦長状の剥離面が認められ、打点部付近には小さな複数の頭部調整が認められる。腹面は主要剥離面と、加撃点には小さな剥離が認められるが、主要剥離面を剥ぎ取った際に同時に剥落したものであろう。打面は点状打面[註—4]を呈する。

13．両設打面を呈する石核より剥ぎ取られた縦長剥片である。背面には打面転位により、上・下両方向からの剥片剥離痕が認められる。剥離面の切り合いより新旧関係を観察すれば、上からの剥離痕が新しいようである。腹面は主要剥離面であり、バルバスカーが顕著に認められる。

二次加工・使用痕のある剥片（第50図14～15）

少量であるが5点出土している。

14．側縁に二次加工及び使用痕が認められる縦長剥片である。背面は礫面及び複数の剥離痕よりなる。腹面は主要剥離面である。打面は点状を呈する。

15．二次加工ある縦長剥片である。背面は礫面と複数の剥離面及び頭部調整痕よりなる。腹面は主要剥離面であり、バルバスカーが顕著に認められる。打面は点状を呈する。側縁には小刻みな二次加工痕が認められる。

ナイフ形石器（第51図16～17）

ナイフ形石器として分類できる石器は、少量であるが2点出土している。

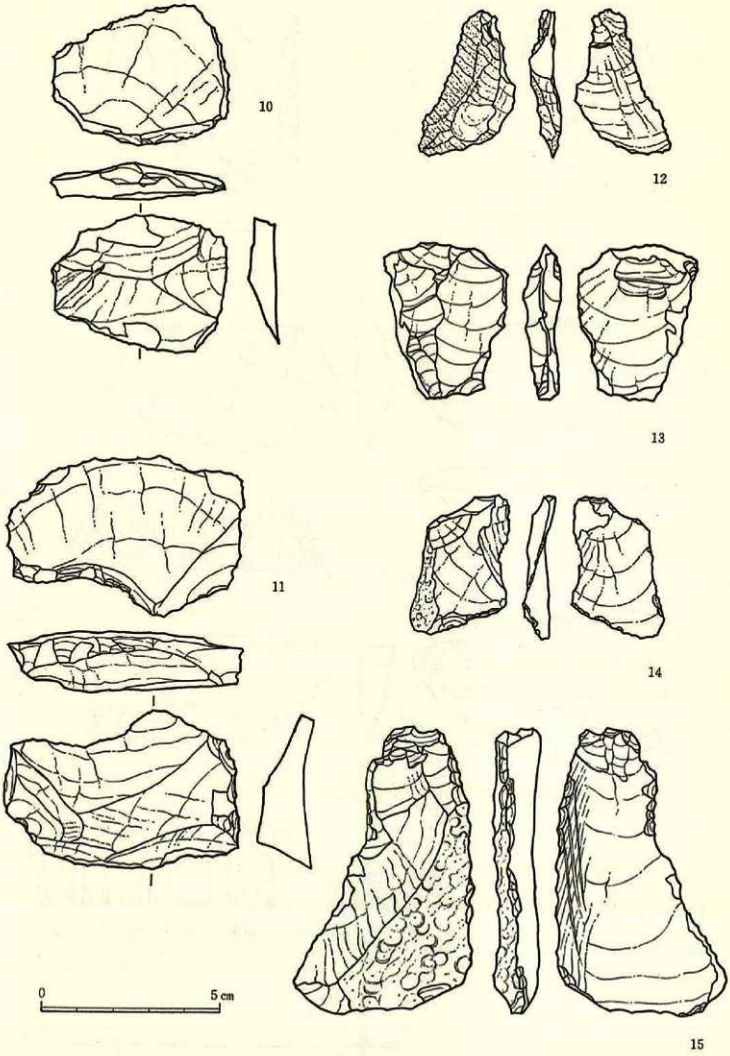
16．翼状剥片のファースト・フレイク[註—5]を用いた国府型ナイフである。背面には、底面及び主要剥離面に対して先行する剥離痕が認められる。腹面は主要剥離面である。刃潰し加工は腹面より施されている。末端部には折れ面が認められる。

17．c、d両側面に刃潰し加工を施したナイフ形石器である。背面の先端部に位置する剥離面は平坦であり、素材の剥離面である可能性を有する。d側面に残る刃潰し加工は、基部においてのみ認められる。素材は腹面に残る主要剥離面を観察する限り、縦長状のものか、横長状のものか不明瞭である。

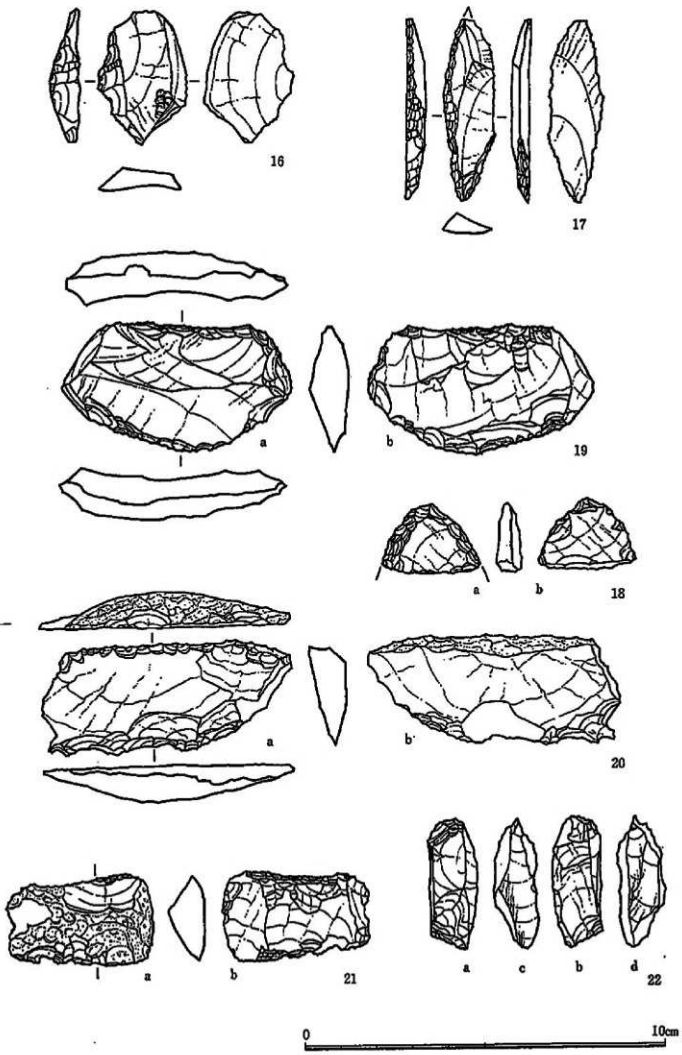
尖頭器（第51図18）

尖頭器として分類できる石器は、1点のみ出土している。

18．尖頭器の先端部である。b面はポジティブな主要剥離面であり、素材が剥片であることが知



第50図　大堀遺跡出土石器(3)　(2/3)



第51図　大垣遺跡出土石器(4)　(3/4)

れる。側縁部に認められる調整は、a面及びb面より施しているが、主にb面からの調整が顕著に認められる。

削器（第51図19～20）

削器として分類される石器は　合計5点出土している。

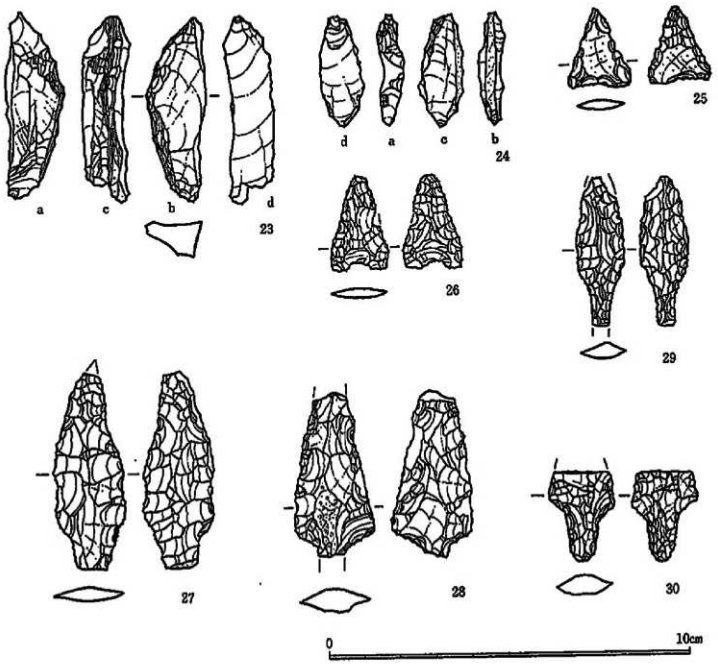
19．横長状の剥片を素材とした削器である。刃部をほぼ全周に設け、刃部の調整はa・b両面より加えている。

20．19同様に、横長状の剥片を素材とした削器である。刃部の調整はa・b両面より加えられている。

楔形石器（第51図21～22）

楔形石器として分類した石器は、合計5点出土している。

21．横長状の形態を有する楔形石器である。上・下両端部には加工痕が認められ、特に上端部は、潰れ状を呈する。a面には礫面を顕著に残している。



第52図　大堀遺跡出土石器(5)　(3/4)

22．縦長状の形態を有する楔形石器である。上・下両端部には潰れ状の痕跡が認められる。c面には、上端部からの加撃により剥離した剥離面が認められる。

楔形石器の削片（第52図23～24）

楔形石器の削片として分類した石器は2点出土している。

23．c面にあたる稜線上全周にわたり、潰れ状の痕跡が認められる。b面は主要剥離面であり、打面は点状打面を呈している。

24．上・下両端部は点状を呈し、各々両端部からの加撃による剥離面が、a面及びb面に認められ、b面においては、主要剥離面を呈している。c面には部分的に、主要剥離面であるb面からの調整が認められる。

石鏃（第52図25～30）

石鏃として分類した石器は、6点認められた。

25．平基無茎式の石鏃である。a・b両面には各々ネガティブ及びポジティブな素材の剥離面を残し、素材が剥片であることがわかる。

26．凹基無茎式の石鏃である。a・b両面共に調整剥離が進んでいて素材の形状を留めていない。

27．先端部を僅かに欠く凸基有茎式の石鏃である。a・b両面共に調整剥離が進んでいて、素材の形状を留めていない。

28．先端部及び基部が僅かに欠損している、凸基有茎式の石鏃である。a・b両面共に調整剥離が進んでいて、素材の形状を留めていない。

29．先端部及び基部を僅かに欠く凸基有茎式の石鏃である。a・b両面共に調整剥離が進んでいるが、a面の一部には礫面を残している。

30．先端部が欠損した凸基有茎式[註—6]の石鏃である。a・b両面伴に調整剥離が進んでいて、素材面は残っていない。

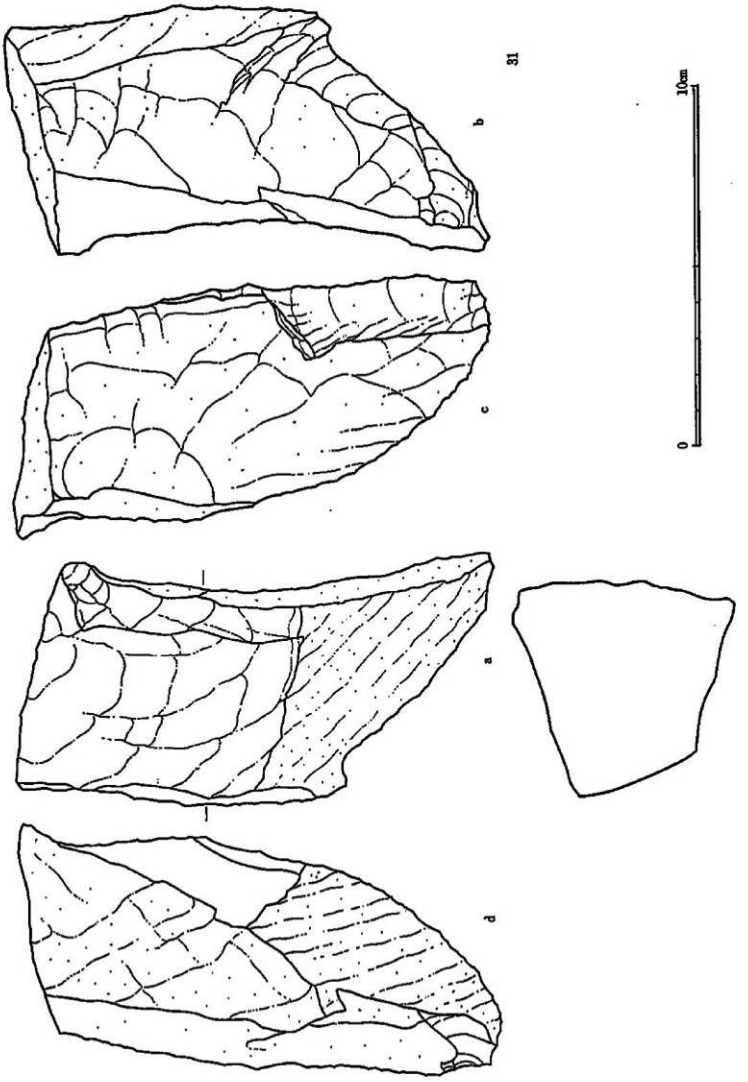
C）玄武岩及び安山岩製の石器

玄武岩及び安山岩製の石器は、21点出土していて、打製石器全体で25%を占めている。これらの石器は、風化が著しく進んでいて、その容姿より見れば一見旧石器時代の石器と感じるほどであるが、旧石器時代の所属とする根拠はいまのところ見い出すことはできない。

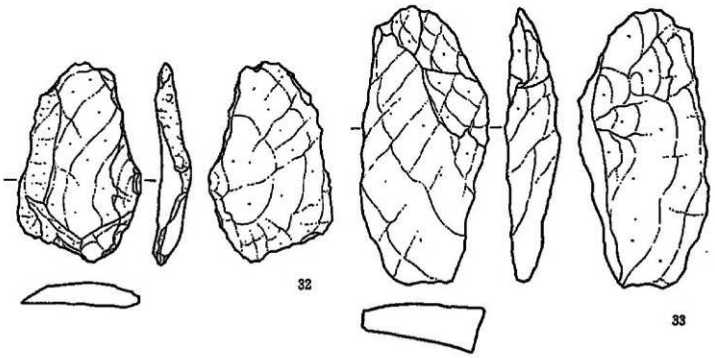
石核（第53図31）

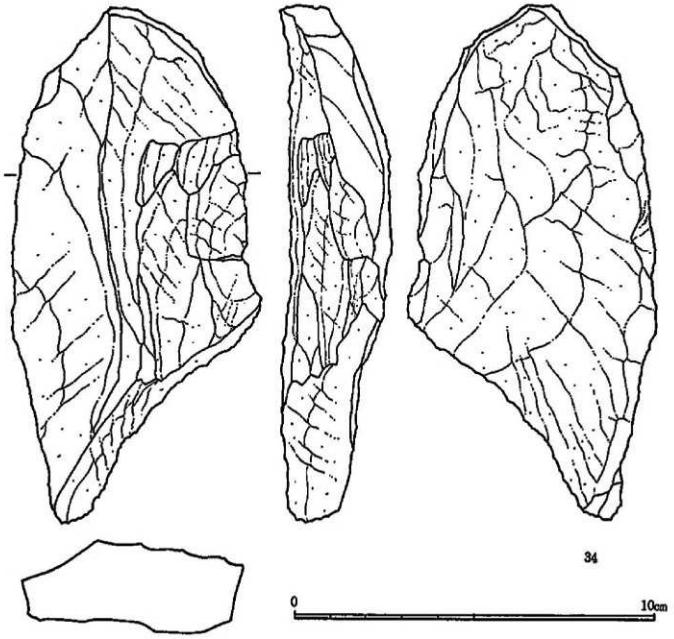
石核として分類できるものは計3点出土している。

31．ブロック状の分割礫を素材としている石核であり、b面にはポジティブな分割面を顕著に残している。作業面に相当する面はa面に当たり、2面の剥離痕を認めることができる。打面は平坦な礫面をそのまま用いている。c面には石核を分割するポジティブな剥離面を残していて、また下端部にはその剥離面を切り込む敲面の縦長状の剥離痕が認められる。石質は輝石橄欖石玄武



第53図　大堀遺跡出土石器(6)　(3/4)





第54図　大堀遺跡出土石器(7)　(3/4)

岩である。

剝片（第54～56図32～37）

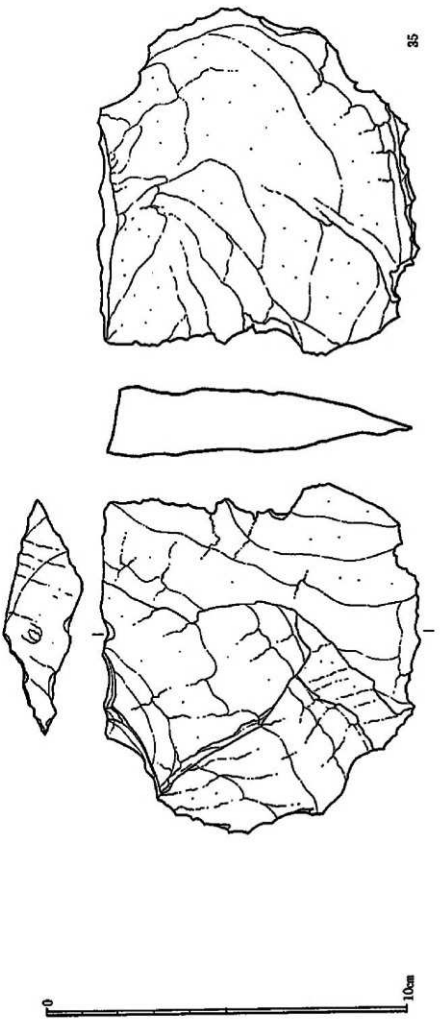
剝片として分類できるものは15点出土している。形態より分類すれば、横長状のもの、縦長状のもの、不定形なものの3種が認められる。

32．横長状の剝片である。背面は複数の剝離痕よりなり、打面は礫面をそのまま用いて、礫面の高まりを打点として腹面の主要剝離面を剝ぎ取っている。石質は輝石橄榄石玄武岩である。

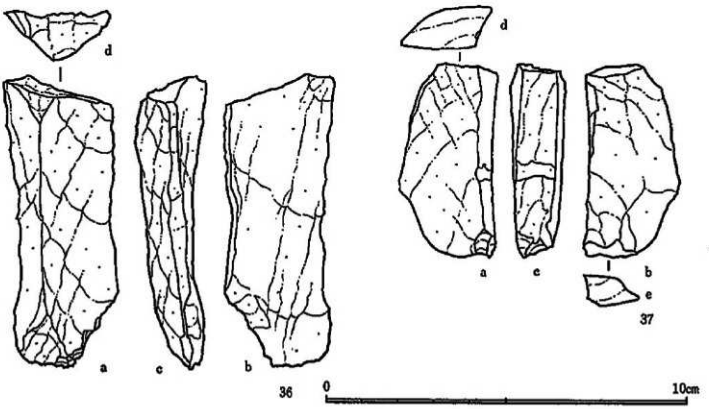
33．横長状の剝片である。背面は比較的平坦な剝離面を、複数の剝離痕が切り込んでいる。腹面にはポジティブなバルブが2つ存在し、上端部のバルブにはバルバスカーを伴っている。剝離の端部は折れ面状に終っている。打面は大きな一枚の平坦面と小さな剝離痕よりなる。石質は輝石橄榄石玄武岩である。

34．32、33等と比べ比較的大きな横長剝片である。背面は3面の大きな剝離痕と、複数の小さな剝離痕よりなる。打面は礫面上を打面として直に加撃している。腹面は主要剝離面であり、剝離面の端部は蝶番剝離状に終っている。石質は輝石橄榄石玄武岩である。

35．他の剝片に比べ大きな剝片である。背面は素材面を僅かに残し、多方向より剝離面が切り込んでい



第55図　大堀遺跡出土石器(8)　(3/8)



第56図　大堀遺跡出土石器(9)　(3/4)

る。打面は平坦な剥離面一面からなり、腹面は並列して２つの打点が認められ、剥離の末端は、蝶番及び階段状剥離を呈している。石質は輝石橄欖石玄武岩である。

36. 断面三角形を呈する縦長状の剥片である。ａ・ｃ面には、素材面を残し、素材面より推測すれば、板状の素材の角より剥ぎ取られた剥片と考えられる。打面は２面の剥離面よりなる調整打面である。ｂ面は主要剥離面であり、打点はそのコーナーに位置している。石質は輝石橄欖石玄武岩である。

37. 主要剥離面であるｂ面の上・下両端に打点を持つ縦長状の剥片である。ａ・ｂ両面には、素材面を残し、形状より推測して、板状の素材のコーナーを両極打法により剥ぎ取った剥片である。上・下両打面は、ともに剥離平坦打面を呈している。石質は輝石橄欖石玄武岩である。

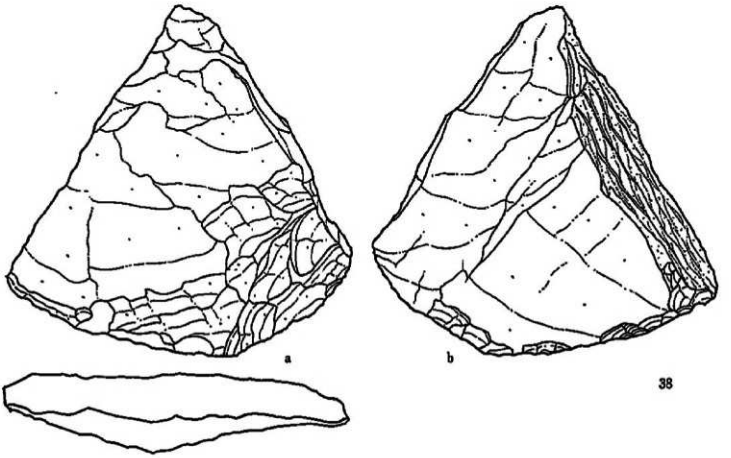
削器（第57～58図38～40）

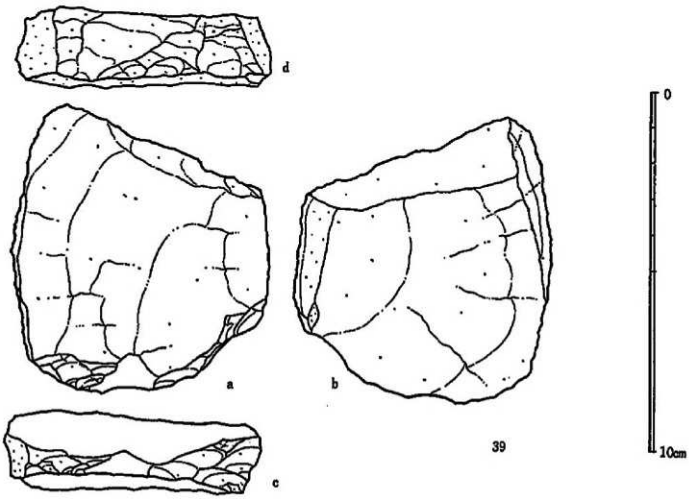
削器として分類できる石器は、計３点確かめることができた。

38. 節理面をうまく利用して素材を剥取っていることは、ａ・ｂ両面の剥離面を観察すればわかる。刃部の調整剥離は主にａ面に認められるが、部分的にはｂ面にも残る。調整剥離の末端は節理に規制され階段状剥離を呈している。石質は無斑晶質輝石安山岩である。

39. 肉厚な剥片を素材とした削器である。ａ面はポジティブな素材の主要剥離面を残している。素材の打面は剥離平坦打面である。刃部の調整剥離はａ面に認められ、その調整はｂ面からの加撃である。ｄ面は折れ面を呈しているが、部分的に二次加工痕が認められる。石質は輝石橄欖石玄武岩である。

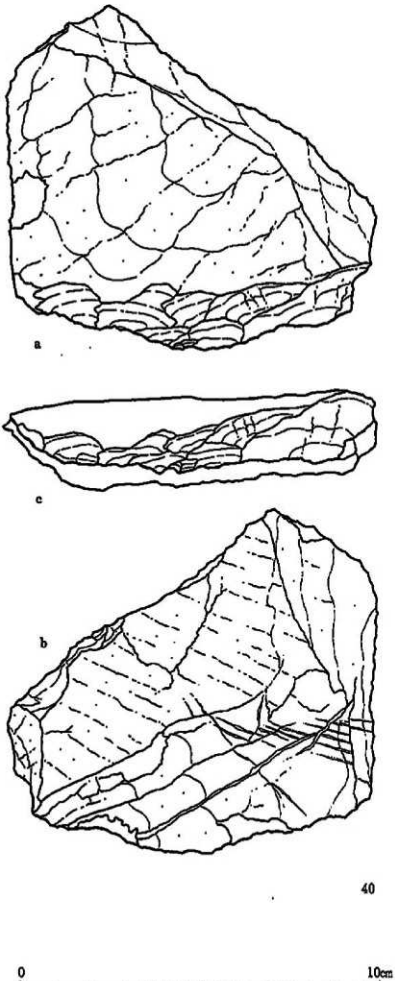
40. 肉厚な剥片を素材とした削器である。ａ・ｂ両面共に素材の剥離面を大きく残し、ａ面に残





第57図　大堀遺跡出土石器(3)　(3/4)

る素材面は、主要剥離面である。刃部の調整剥離はa面に認められ、その調整は比較的鋭角でありb面からの加撃である。上端部は折れ面が顕著である。石質は斑状輝石安山岩である。

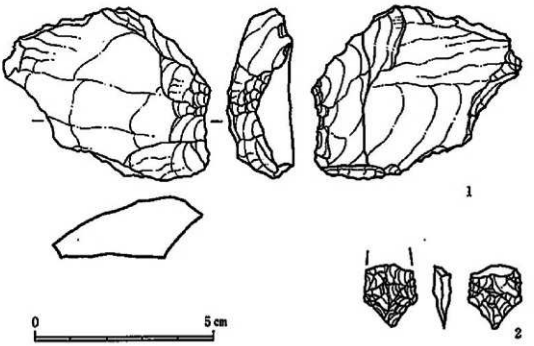


第58図　大畑遺跡出土石器(11)　(3/8)

D）まとめ

大畑城跡出土の打製石器を石材により大別すれば、サヌカイト製及び玄武岩・安山岩製のもの二者が存在することは、前記したとおりである。サヌカイト製石器や、石器以外のものも含めた組成を列記すれば、原石、分割礫、翼状剥片石核、横長剥片石核、石核、翼状剥片、横長剥片、縦長剥片、剥片、二次加工・使用痕ある剥片、ナイフ形石器、尖頭器、削器、楔形石器、楔形石器の削片、石鏃等があげられる。またそれらの石器を従来の知見に従って、時代により分れば、旧石器時代後期に属するもの及び縄文時代以降に属するものとに大別することができる。たとえば、縄文時代以降に属する石器としてあげられるものの中には、石鏃、第49図5のような石核があげられ、同種の石核は亀井遺跡、林遺跡、滝ケ谷遺跡、桜ケ丘遺跡等の諸遺跡[註—7]より出土している石核に類似していて、亀井遺跡の分類に従えば石核Ⅰ[註—8]にあたる。また楔形石器、同削片、尖頭器、二次加工・使用痕ある剥片・剥片等の中には、縄文時代以降にも認められる事例[註—9]もあり、出土状況の悪い当遺跡では時代におい

て大別することには無理がある。またそれは、原石及び第48図2のような瀬戸内技法に伴う盤状剥片の可能性がある、分割礫においても同様であるが、考え方としては、二つの時期に大別することができるだろう。



第59図　亀井遺跡出土旧石器　(3/4)

大堀遺跡周辺には、最近の発掘調査に伴い旧石器の出土を報じる遺跡が増加している。例えば、亀井遺跡、長原遺跡、長吉川辺遺跡、長吉野山遺跡、瓜破遺跡、八尾南遺跡等の諸遺跡より原位置を保った状態、あるいは遊離した状態で旧石器が確認されている。上記の諸遺跡は埋没した羽曳野丘陵の前面に広がる低位段丘あるいは瓜破台地の縁辺部に位置している。特に長原遺跡などは、洪積段丘被覆層中より接合資料を含む良好な遺物包含層を確認することに成功している。[註—10] そのため同じ羽曳野丘陵の位置する当調査区の周辺のいずれかの場所に旧石器時代の遺物包含層の存在を推定することは十分可能である。今回報告した石器類は、その可能性を十分裏付けることのできる資料といえ、今後とも詳細なる検討が必要といえる。

打製石器の中でサヌカイト製の石器に次いで出土点数が多いのが玄武岩及び安山岩製の石器である。同石器群は前記したように、風化が著しく進んでいて、剥離面などは不鮮明を極める。またその容姿より旧石器時代の石器と想定できるほどであるが、石材のもつ特性、埋没状況等を考慮しなければ風化の強弱により時代性を即断することはできない。また、石器の組成より見れば、明らかにトゥールとして認定できるものは旧石器時代より弥生時代まで継続してみられる削器のみであり、石器の組成より時代性をくみ取ることは不可能である。上述した二点から、同石器群より時代性を見い出すことは現時点では無理といえる。また玄武岩及び安山岩の石器を石質により細分すれば、3種に分けることができるが、二上山山系及び信貴山の周辺より産出される岩石類という範疇では一括される。

第1表　玄武岩及び安山岩の石質一覧表

項目 ＼ 石質	原産地	石器組成
橄欖石輝石玄武岩	信貴山	石核・剥片・削器
無斑晶質輝石安山岩	春日山　石まくり	削器
斑状輝石安山岩	香芝町（畑・寺山～穴虫付近）	削器

従来サヌカイトを石材とする打製石器については、既に良く知られていることだが、同種の石材を用いた

石器については、筆者の知見の浅さによるものか報告事例を見い出すことはできなかった。以上のような状況であるため、同石器群の性格は、今後の資料増加をまたなければ詳細な点は解明できないだろう。一種特異なこの石器群の一部が報告できたことを一つの成果とし、次報告にむけ整理作業を進めていくことにする。

〔註〕

(註－1) 玄武岩及び安山岩の石器の石質鑑定及び原産地同定は、八尾東高等学校教諭佐藤隆春氏の肉眼鑑定及び顕微鏡観察による。

(註－2) 松藤和人氏により提唱されている瀬戸内技法第Ⅰ工程に現われる肉厚な剥片である。
松藤和人　1974　「瀬戸内技法の再検討」（『ふたがみ－二上山北麓石器時代遺跡群分布調査報告』）同志社大学旧石器文化談話会
松藤和人　1979　「再び“瀬戸内技法”について」（『二上山・桜ケ丘遺跡－奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十八冊』）奈良県立橿原考古学研究所

(註－3) 松藤和人氏により提唱されている用語である。
松藤和人　1979　「再び“瀬戸内技法”について」（『二上山・桜ケ丘遺跡－奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十八冊』）奈良県立橿原考古学研究所

(註－4) 山中一郎氏により提唱されている用語に準ずる。すなわち剥片に残された折面が然状に見えるものである。
山中一郎　1978　「Ⅵ森の宮遺跡出土の石器について」（『森の宮遺跡』）難波宮顕彰会

(註－5) （註－3）と同じ

(註－6) 石鏃の分類は佐原　真氏の分類に準ずる。
佐原　真　1964　「第四章－石器・土製品・骨角器製品・鉄製品」（『柴垣出』）能登町文化財保護委員会

(註－7) 中西靖人、宮崎泰史、西村尋文ほか　1982　（『亀井遺跡－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』）大阪文化財センター
増田一裕　1978　「Ⅱ遺構と遺物－5大福遺跡の石器」（『大福遺跡－奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十六冊』）奈良県立橿原考古学研究所
一瀬和夫、大薬康宏、中村仁紀、水野仁紀　1982　（『林遺跡発掘調査概要・Ⅳ』）大阪府教育委員会
塚田良道　1983　「滝ケ谷遺跡」（『旧石器考古学25』）旧石器文化談話会
麻柄一志、古森政次　1979　「第4章出土遺物、第2節土坑1出土遺物」（『二上山・桜ケ丘遺跡－奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第三十八冊』）奈良県立橿原考古学研究所

(註－8) 西村尋文　1982　「亀井遺跡における剥片生産技術」（『亀井遺跡－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』）大阪文化財センター

(註－9) 楔形石器などは、縄文時代及び弥生時代の遺跡より出土する事例は、最近増えている。

(註－10) 亀井遺跡を除く大堀遺跡周辺より出土している旧石器については『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』で触れられている。
森　毅　1982　「第Ⅴ章出土遺物　第1節旧石器時代」（『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅱ－大阪市高速電気軌道第2号線延長工事に伴う発掘調査報告書－』）大阪市文化財協会
宮崎泰史　1982　「第2節歴史的環境」（『亀井遺跡－寝屋川南部流域下水道事業長吉ポンプ場築造工事関連埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』）大阪文化財センター

第2表　サヌカイト石器一覧表　（単位 mm）

項目 / 器種	図版掲図番号	資料番号	出土地点	現長	現幅	厚さ	備考
原石		A-028	A調査区 C—9区 表採	44.8	30.2	6.7	
		B-010	B調査区 B、C—24、25区 Ⅲ層	49.8	41.5	17.8	
	第48図1	E-006	E調査区 E—36区 Ⅲ層	72.3	61.9	40.4	
分割礫		A-018	A調査区 B-10区 Ⅲ・Ⅳ層	32.7	28.0	16.4	
		A-030	A調査区 C—11、12区	62.5	24.3	16.0	
		A-031	A調査区 B—14区 埋積谷堆積層 Ⅰ・Ⅱ層	72.2	45.1	21.5	二次加工ある分割礫
	第48図2	B-013	B調査区 溝 BW—7	44.0	67.0	27.0	
石核		A-032	A調査区 B—13区 埋積谷堆積層 Ⅳ層	48.5	53.0	22.0	
	第49図3	A-033	A調査区 試掘 B-9、10区 現代の掘り込み	49.5	33.9	20.6	翼状剥片石核
	第49図5	B-007	B調査区 溝 BW-6 B—25区 Ⅰ層	79.0	65.2	29.0	
	第49図4	E-008	E調査区 A—26区 Ⅲ層	56.9	38.9	22.0	横長剥片石核
剥片		A-016	A調査区 B-14区 Ⅲ・Ⅳ層	17.0	25.0	9.9	折面あり（打面）
	第49図7	A-017	A調査区 B—10区 Ⅲ・Ⅳ層	13.8	23.7	4.6	横長剥片、折面あり（打面）
		A-019	A調査区 C—18区 Ⅱ層	33.5	33.4	5.6	折面あり（打面）
		A-020	A調査区 B—13区 溝状遺構、遺構内上面	24.4	33.0	6.4	
		A-025	A調査区 C—5、6区 Ⅲ・Ⅳ層	46.5	39.1	9.0	横長剥片
	第49図6	A-026	A調査区 C—5、6区 Ⅲ・Ⅳ層	22.7	36.5	5.0	翼状剥片
	第50図12	A-029	A調査区 C—12区 埋積谷堆積層 Ⅱ・Ⅲ層	40.0	26.0	7.0	縦長剥片
		A-044	A調査区 埋積谷堆積層 Ⅰ・Ⅱ層	21.8	19.0	3.2	折面あり（打面、側面）
		A-046	A調査区 C—34区 埋積谷堆積層 Ⅰ・Ⅱ層	22.4	23.9	4.4	横長剥片、折面あり（打面）
		B-009	B調査区 C-25、26区 Ⅲ層	32.4	28.9	9.8	
		B-014	B調査区 C—23区 Ⅲ層	14.0	17.2	4.9	
		B-017	B調査区 試掘 灰黄色粘質土	38.9	21.2	5.0	
		B-023	B調査区 試掘 灰黄色粘質土⑤—1	26.4	23.5	6.0	折面あり（先端）
	第50図10	B-024	B調査区 試掘 灰黄色粘質土⑤—1(2)	48.0	38.3	8.2	翼状剥片
	第49図8	B-026	B調査区 溝BW—6 Ⅱ層	16.8	47.5	5.2	翼状剥片
		B-027	B調査区 C—22区 Ⅱ層	46.4	22.1	8.0	
		C-014	C調査区 B-35、36区 Ⅳ層	32.6	51.4	9.4	
		C-043	C調査区 土坑 C—14	16.8	22.5	3.2	
		C-057	C調査区 溝 C—6	32.2	34.8	5.5	横長剥片、打面あり（打面、側面）
		C-060	C調査区 C—33、34区 筋掘り攪乱土	33.0	30.0	10.7	
		C-061	C調査区 C—29区 Ⅲ層	38.0	39.0	7.3	折面あり（打面、先端、側面）
		C-062	C調査区 溝 C—6	26.0	21.5	7.1	折面あり（打面）

項目 / 器種	図版挿図番号	資料番号	出土地点	現長	現幅	厚さ	備考
剝片		C-063	C調査区 溝 C—6	38.7	38.1	12.3	横長剝片、折面あり（打面）
		C-064	C調査区 井戸 C—2	79.4	25.2	12.2	折面あり（打面）
	第49図9	C-070	C調査区 C—29区 Ⅲ層	29.0	72.0	10.0	
	第50図13	E-002	E調査区 B—26区 Ⅲ層	43.0	33.0	9.0	縦長剝片
	第50図11	E-004	E調査区 Ⅲ層	44.1	64.4	15.0	横長剝片
		E-005	E調査区 Ⅲ層	57.7	49.0	11.4	横長剝片
使用痕ある剝片（二次加工）		A-015	A調査区 B—17区 Ⅲ・Ⅳ層	24.4	20.3	6.8	使用痕のある剝片 折面あり（先端）
	第50図15	A-027	A調査区 C-5、6区 Ⅲ・Ⅳ層	82.1	48.1	11.2	二次加工ある縦長剝片
		A-036①	A調査区 試掘	32.0	43.5	5.9	使用痕ある剝片
		A-047	A調査区 溝 A—7 試掘坑	23.6	31.8	5.9	二次加工ある剝片 折面あり（打面）
		B-015	B調査区 試掘	34.8	20.5	10.2	使用痕ある剝片
	第50図14	B-028	B調査区 B—25区 溝BW—6 Ⅱ層	39.7	24.3	5.1	二次加工及び使用痕ある縦長剝片
ナイフ	第51図17	B-008	B調査区 C-22区 溝B-2	50.6	14.1	4.4	ナイフ形石器
	第51図16	B-019	B調査区 試掘 B-33、34区 灰色粘土	37.0	24.0	9.0	国府型ナイフ
尖頭器	第51図18	A-042	A調査区 C-14区 溝A-17	19.1	27.1	6.2	槍先形尖頭器
削器		A-022	A調査区 C-9区 現代の溝	56.9	47.1	14.3	
		A-036②	A調査区 試掘	34.7	18.8	14.4	
		A-051①	A調査区 B-9区 試掘 埋積谷堆積層中	14.4	16.2	8.8	
		A-051②	A調査区 B-9区 試掘 埋積谷堆積層中	23.9	17.0	7.9	
	第51図20	B-016	B調査区 試掘 灰黄色粘質土	70.0	29.5	10.4	
		B-021	B調査区 溝BW—6 Ⅱ層	32.5	16.2	6.5	
	第51図19	B-022	B調査区 試掘 灰黄色粘土	63.0	35.0	12.0	
楔形石器		A-023	A調査区 溝 A—5	36.4	47.4	10.4	
		A-048①	A調査区 溝 A—7 上層 試掘坑	23.9	21.0	9.0	
		A-048②	A調査区 溝 A—7 上層 試掘坑	52.1	50.0	18.4	
		B-020	B調査区 試掘 側溝掘削時	51.9	29.0	26.5	
	第51図21	C-002	C調査区 C-32、33区 Ⅲ層	41.2	25.4	10.6	
		C-065	C調査区 B—36区 Ⅳ層	54.8	34.2	14.6	
	第51図22	C-073	C調査区 B—30区 包含層掘削時	36.5	16.3	10.6	
楔形石器削片	第52図23	A-021	A調査区 B—13区 遺構面上面 溝状遺構上面	50.8	13.8	15.1	
	第52図24	A-043	A調査区 B-13区 Ⅲ・Ⅳ層	30.1	11.5	6.7	
石鏃	第52図27	B-012	B調査区 Ⅲ層	54.0	19.0	4.0	
	第52図28	B-025	B調査区 試掘 側溝掘削時	46.0	22.0	6.0	
		C-066	C調査区 C-31、32区	28.1	12.0	3.5	
	第52図29	C-067	C調査区 B-34区 Ⅲ層	41.2	13.0	6.0	
	第52図30	C-068	C調査区B-29区 Ⅲ層	25.3	18.0	6.2	
	第52図25	C-069	C調査区 B-29区 Ⅲ層	21.4	17.4	3.9	
	第52図26	E-007	E調査区 土坑 E—9	26.2	16.1	3.0	

第3表　玄武岩及び安山岩の石器一覧表　　(単位 mm)

項目 / 器種	図版棒図番号	資料番号	出土地点	石質	現長	現幅	厚さ	備考
石核	第53図31	C-004	C調査区 C-32、33区 Ⅲ層	A	134.0	69.0	21.0	
		W-005	W調査区 溝BW-6 Ⅰ層	A	96.4	70.0	34.2	
		W-006	W調査区 溝BW-6 Ⅰ層	A	76.1	95.6	33.1	
剥片	第54図34	B-002	B調査区 側溝掘削中	A	144.0	69.0	26.0	
		C-006	C調査区 C—32区 第Ⅲ層	A	27.0	53.0	8.0	
		C-015	C調査区 B-35、36区 Ⅳ層	A	45.0	45.9	17.2	
		C-021	C調査区 C—36区 Ⅳ層	A	22.8	25.9	7.8	
		C-022	C調査区 C—36区Ⅳ層	A	20.4	32.8	7.1	
		C-024	C調査区 C—36区 Ⅳ層	A	29.0	46.4	16.6	
		C-027	C調査区 B—36区 Ⅳ層	A	6.4	34.0	5.2	
		C-029	C調査区 B—34区 Ⅲ層	A	35.7	50.4	11.8	
	第56図36	C-032	C調査区 土坑C—14	A	82.0	32.0	13.0	
		C-033	C調査区 土坑C—14	A	35.4	55.2	10.4	
	第56図37	C-037	C調査区 土坑C—14	A	54.0	27.0	15.0	
		C-040	C調査区 土坑C—14	A	26.6	17.9	6.7	
	第54図33	C-052	C調査区 B—35区 Ⅲ層	A	36.0	78.0	14.0	
	第54図32	C-056	C調査区 溝C—4	A	33.0	50.0	6.0	
	第55図35	E-009	E調査区 Ⅲ層	A	90.0	98.0	19.5	
削器	第58図40	A-010	A調査区 B—14区 埋積谷堆積層 Ⅰ・Ⅱ層	C	102.0	97.0	24.0	
	第57図38	C-003	C調査区 C-32、33区 Ⅲ層	B	96.0	97.0	24.0	
	第57図39	C-007	C調査区 C—32区 Ⅲ層	A	71.0	80.0	22.0	
礫		A-008	A調査区 C—12、13区 埋積谷堆積層 Ⅰ層	A	205.0	85.9	35.7	
		A-011	A調査区 B—14区 埋積谷堆積層 Ⅰ層Ⅱ層	B	177.0	100.2	23.0	
		A-012	A調査区 B—14区 埋積谷堆穂層 Ⅰ層	C	80.7	67.2	23.0	
		B-003	B調査区 C-25、26区 Ⅲ層	B	68.8	64.5	22.1	
		B-005	B調査区 溝BW-6 Ⅱ・Ⅲ層	C	61.8	54.4	9.8	
		B-006	B調査区 C—25区 Ⅱ層	B	83.1	60.2	14.2	
		C-008	C調査区 C—34区 Ⅲ層	A				鑑定用(破)
		C-009	C調査区 C—14区 Ⅲ層	A	83.1	45.2	37.0	
		C-010	C調査区 B—36区 Ⅲ層	A	150.9	96.1	37.2	
		C-011	C調査区 B—36区 Ⅲ層	A	73.9	53.8	41.7	
		C-012	C調査区 C—34区 筋掘撹乱土	A	38.6	22.8	17.4	
		C-013	C調査区 C—34区 筋掘撹乱土	A	140.2	66.7	48.2	
		C-016	C調査区 C—34区 Ⅳ層		72.9	28.1	22.9	
		C-019	C調査区 C—34区 Ⅳ層		79.6	53.9	25.4	
		C-020	C調査区 C—34区 Ⅳ層	A	85.3	69.8	38.5	
		C-025	C調査区 C—36区 Ⅳ層	A	47.4	21.2	15.5	
		C-028	C調査区 B—25区 Ⅲ層	A	74.0	44.6	14.5	

項目 / 器種	図版挿図番号	資料番号	出土地点	石質	現長	現幅	厚さ	備考
礫		C-035	C調査区 土坑C—14	A	56.6	46.0	30.9	
		C-036	C調査区 土坑C—14	A				鑑定用(破)
		C-037	C調査区 土坑C—14	A				鑑定用(破)
		C-038	C調査区 土坑C—14	A	65.8	37.9	19.5	
		C-041	C調査区 土坑C—14	A	28.0	16.7	8.4	
		C-042	C調査区 土坑C—14	A	23.5	16.5	6.9	
		C-046	C調査区 溝C—3	A	88.0	62.4	14.5	
		C-048	C調査区 表採	B	81.9	47.7	14.7	
		C-049	C調査区 表採	A	126.9	94.2	30.8	
		C-050	C調査区 表採	A	83.3	71.4	37.2	
		C-054	C調査区 溝C—4	A				
		C-059	C調査区 C-33、34区 筋掘り撹乱土	A	86.9	38.8	21.4	
		C-071	C調査区 溝C—4	A	74.4	54.8	19.6	
		E-003	E調査区 Ⅲ層					
		W-001	W調査区 溝BW-6 Ⅰ層	B				鑑定用(破)
		W-002	W調査区 溝BW-6 Ⅰ層	B				鑑定用(破)
		W-003	W調査区 溝BW-6 Ⅰ層	C	56.0	50.0	13.6	

石質　A：橄欖石輝石玄武岩　B：無斑晶質輝石安山岩　C：斑状輝石安山岩

第2節　製　塩　土　器

製塩土器は、土坑、井戸、溝、柱穴、埋積谷堆積層等から出土した。これらの内、大半の製塩土器を出土したのは、溝状遺構及び井戸A－2の掘方内からである。次頁に重量比と百分率を示している。これらの土器を形態・調整その他によって4種に分類した。この中でさらに細分化する事は可能であるが、今回はこの分類にとどめる。当遺跡での出土の特徴は、完形では全く出土しなかったところにある。大半は大きくても一辺が3.5～2.5cmの細片として出土したのである。この為遺物の復原は不可能であり、他の遺跡での資料を参考に形態等を判断した。以下、各類について述べてゆきたい。個々のタイプ別実測図及び図版は、第60図、図版39を参照されたい。

A類　内外面ナデ調整を施すものである。灰白色を呈し、口縁端部が丸みを持ち、内外に大きく肥厚するもの、口縁端部が外側だけに肥厚するもの、口縁部先端を少し内側につまみ出すものなどがある。

B類　外面ナデ調整を施し、内面には布目痕がつくものである。なお内面には模骨と思われる痕跡も認められた。瓦と同様の製作手法を採用しているらしい。底部付近については、形態、成形等はわからない。布目痕も粗・密の差があるが、時期差、技法差を示してはいないと思われる。これは同一破片に目の粗い布と細かい布をつなぎあわせて使用している例が認められるからである。形状では、口縁部外側があまり肥厚しないもの、口縁部付近は内外に肥厚しても先端で斜めに削り取っているもの、口縁部先端を内側へつまみ出すもの等がある。

C類　外面ナデ、内面ハケ調整を施すものである。白色を呈し、大きな砂粒を含むもの、黄灰色を示し、長石の大きな砂粒を含むものがある。口縁部が短く外反するものがある。

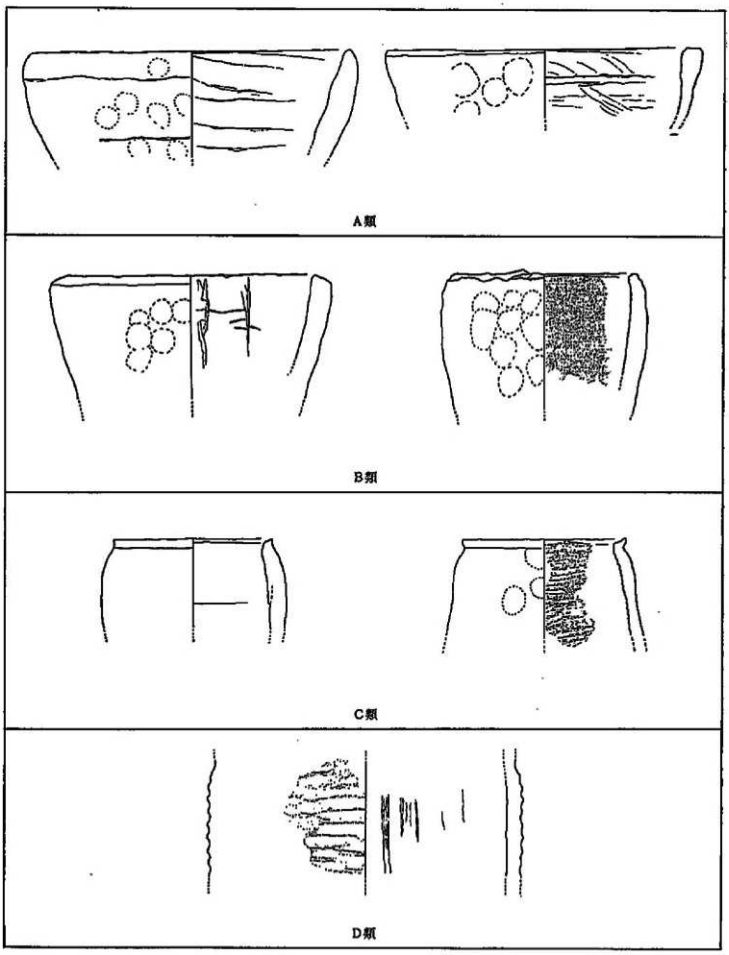
D類　外面にはタタキ痕がつき、内面はハケかナデ調整を施すものである。胎土は茶色、黄灰色を呈し、砂粒を多く含む。この種類では口縁部の形状は明らかではない。

次に製塩土器検出重量について述べる。これは各破片が小破片の為、何個体存在するか判断できないので、おおよその目やすとして、各タイプごとの重量を計測した。この中で注目すべき事は、井戸A－2から全重量の82%、約10Kgを検出した事である。このうちA類は58%、B類は32%、C類は3%、D類は6%である。他の遺構ではほとんど1%未満の出土量であり、重さで100g未満である。埋積谷の埋土中からも少し出土しているが、各層共それぞれ100g前後である。

次に時代であるが、今回の報告では、8世紀～9世紀前半のものと考えてよい。ただ、さまざまな種類のものを出土しているが、それが、地域差なのか、時間差なのか等については、今後の検討に委ねたい。

〔参考文献〕

山中　章　1980　「製塩土器」（『向日市埋蔵文化財調査報告書第6集』）向日市教育委員会
岩本正二　1982　「7～9世紀の土器製塩」（『文化財論叢』）奈良国立文化財研究所



第60図　製塩土器類型別実測図　(1/3)

第4表　製塩土器類型別出土重量表

タイプ別 / 遺構名	A類 (g)	(%)	B類 (g)	(%)	C類 (g)	(%)	D類 (g)	(%)	器種不明 (g)	(%)	遺構別総重量 (g)	(%)
井戸 A－2	4140.1	56.4	2674.3	74.1	279.3	91.9	347.5	47.1	—		7441.2	61.6
土坑 A－4	4.0	0.05	15.8	0.4	—		—		—		19.8	0.2
土坑 A－5	35.7	0.5	—		—		—		—		35.7	0.3
溝 A－5	8.2	0.1	—		—		—		—		8.2	0.07
溝 A－6	14.3	0.2	—		—		—		—		14.3	0.1
溝状遺構	1973.6	26.9	608.3	16.9	8.4	2.8	232.5	31.6	—		2822.8	23.4
ピット出土	44.8	0.6	3.6	0.1	—		—		—		48.4	0.4
Ⅱ、Ⅲ層出土	19.4	0.3	—		—		148.0	20.0	—		167.4	1.4
埋積谷出土	1015.0	13.8	284.1	7.9	16.3	5.4	7.0	0.9	—		1322.4	11.0
出土地点不明	88.5	1.2	21.6	0.6	—		1.9	0.2	77.9	100	189.9	1.6
器種別総重量 (百分率)	7343.6 (60.8)	(100.05)	3607.7 (29.9)	(100)	304.0 (2.5)	(100.1)	736.9 (6.1)	(99.8)	77.9 (0.7)	(100)	12070.1	

第３節　　瓦

大堀遺跡では、軒丸瓦、平瓦、丸瓦がコンテナ５箱分出土した。軒丸瓦は２点であり、他はすべて、平瓦、丸瓦であった。これらのうち、軒丸瓦については出土調査区にて説明をした。ここでは平瓦、丸瓦の分類、検討を加えたい。平瓦は４類に分類しえた。丸瓦は数量的に少なく、分類できなかった。

Ⅰ類　凸面には回転ナデを施し、凹面には枠板圧痕が認められるものである。これらのうち、側面の調整法により、ａ、ｂ、ｃに細分した。ａは側面未調整のもの、ｂ、ｃはヘラケズリ調整を施しているものである。なおｂは凹面の布目痕がそのまま残るもの、ｃはナデを加えたものである。以下各部分の調整についても記述してゆく。

Ⅰ－ａ類、側面の分割敲面は未調整のままである。3/5～1/2が切断痕で、残りは破面となっている。凹面には枠板圧痕と重複して一条の細い窪みが認められる。この窪みは何による圧痕かよくわからない。この窪みと重複して布目痕が認められる。布目は２cm四方で縦糸18～16本、横糸は15～13本認められる。側縁は未調整で、端面は雑なヘラ削りを施す。端縁は面取りを施さない。胎土は砂粒をほとんど含まず精良である。色調は表面灰白色、灰黄色、灰色を示し、断面は灰白色、暗灰色、灰色を示す。焼成は軟質と硬質がある。

Ⅰ－ｂ類、側面はヘラケズリを施し、この面に分割敲面の割れた時の窪みが残っているか、あるいは全く削り切って窪みが全くないかのどちらかである。凹面には糸切り痕が認められ、さらに重複して布目痕も認められる。布目は２cm四方に、縦糸14本、横糸14～13本認められる。側縁は未調整である。端面、端縁は不明である。胎土は砂粒を少し含む。色調は表面が灰白褐色、灰白色、淡灰色を示す。焼成は軟質である。埋積谷堆積層から出土した。

Ⅰ－ｃ類　側面はヘラケズリを施している。凹面は指掌痕が残り、この窪みには布目が認められる。しかし他の部分には布目は認められず、ナデているのかどうかはっきりわからない。Ⅰ－ｂとⅠ－ｃは凹面に布目痕が認められるか否かで分類している。側面、凹側縁を少し削るものが１点ある。他は調整せず。端面、端縁は不明である。胎土は少し砂粒を含むものと、ほとんど含まないものとがある。色調は表面が白灰色、灰白黄色、灰褐色であり、断面が白灰色、灰黄色、褐色を示す。焼成は軟質である。出土地点は埋積谷堆積層から出土している。

Ⅱ類　凸面は回転ナデ、凹面はナデて枠板圧痕は認められない。側面はヘラケズリ調整を加えるものをⅡ類とする。このⅡ類の場合は小分類は行なわなかった。凹面にはナデの他に指掌圧痕が認められるものもある。側縁は未調整であり、端面、端縁は不明である。胎土は少し砂粒を含み、色調は表面が灰色、断面が灰白色を示す。焼成は軟質である。２点出土しているが、いずれも、Ⅲ・Ⅳ層出土である。

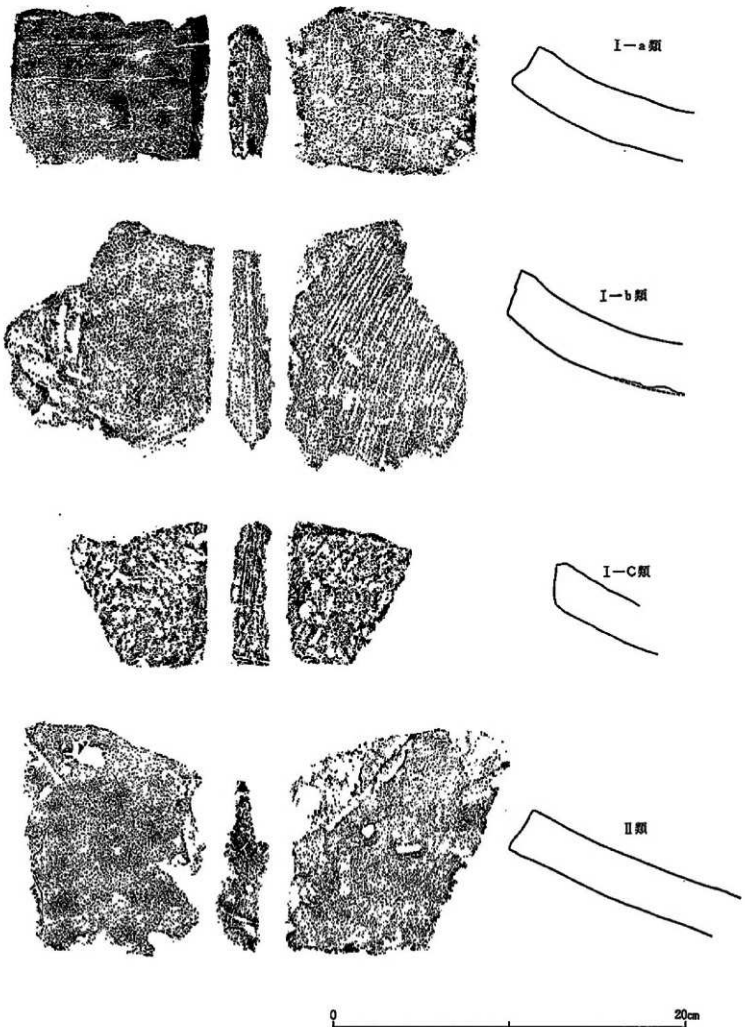
Ⅲ類　凸面は縄叩きが認められ、凹面は枠板圧痕が認められるものである。しかし類例は少なく、今回は細分化はしなかった。凸面の縄目叩きは側縁に平行に施される。凹面では枠板圧痕が

2～3㎝の間隔で認められ、この上面に布目痕が認められる。2㎝四方に残る布目は、縦糸15～13本、横糸13～12本である。側面にはヘラケズリ調整を丁寧に施す。一点のみ凹側縁を削るが、他は未調整である。端面はヘラケズリ調整を施すものを1点検出している。（端面、端縁を残すものは1点のみ出土）　端縁は未調整である。胎土は砂粒を少し含む。色調は表面灰色、灰黄色、断面は灰白色、灰黄色を示す。焼成は欽質である。出土地点は井戸A－2、埋積谷堆積層から出土している。

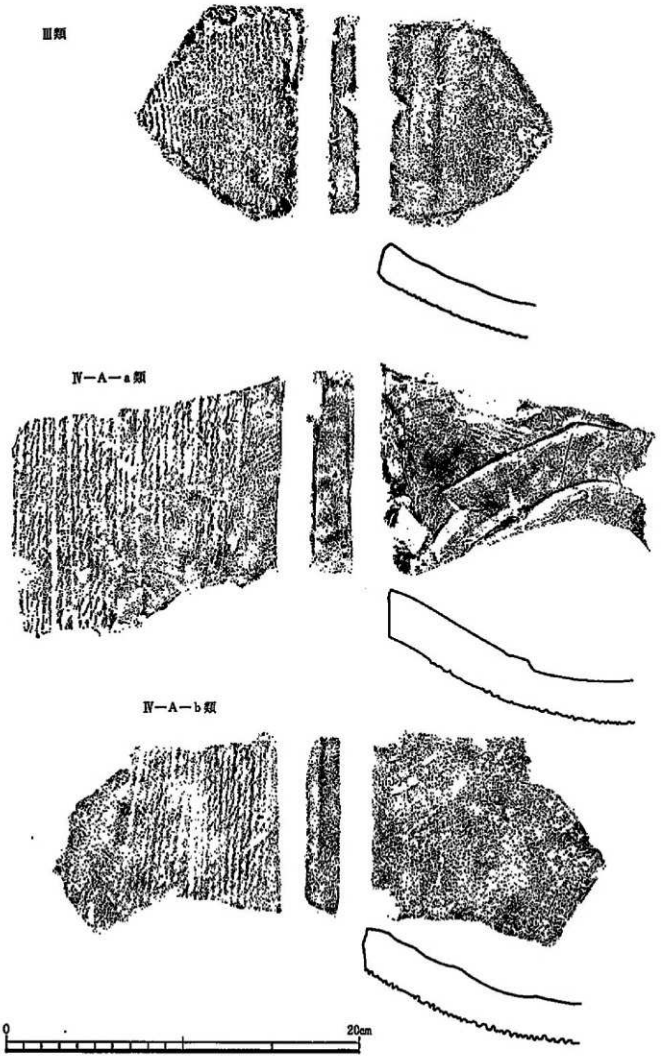
Ⅳ類　凸面は縄叩きを施し、凹面には枠板圧痕が認められないものをⅣ類とした。さらに凹面の調整で2種類に分類した。凹面はヘラナデを施すものをA、凹面に布目痕がそのまま残るものをBとした。また凹面の調整とは別に側縁の調整によって3種類に分類した。両側縁未調整のものa、凹側縁を削るものb、両側縁を削るものcとして区分した。この記号をⅣ類の後に付けた。

次に丸瓦について述べると、丸瓦の出土量は少なく、コンテナ一箱であった。またこれらの遺物は小破片ばかりで、行基丸瓦、玉縁丸瓦とを分類すらできないものが大半である。この為、今回の調査では平瓦で行なったような型式分類は行なわなかった。そこで以下に、丸瓦の各特徴を述べて、次回の報告への糧としたい。

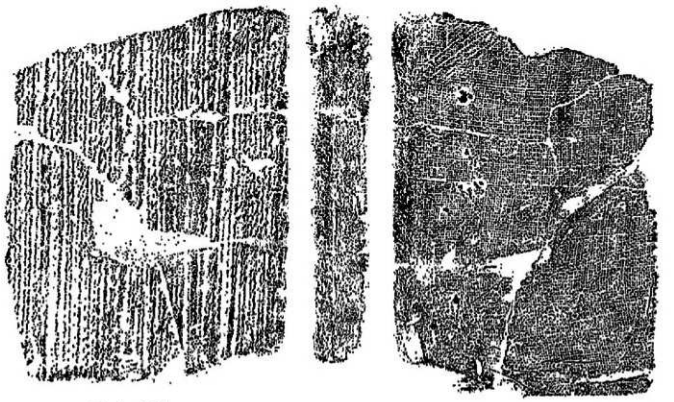
凸面では、回転ナデを施したものや、縄叩きを施し、その後ナデを施すが完全にスリ消しきれていないものも認められた。凹面では大半が布目痕であるが、ごく少量だけナデを施した瓦も出土した。凹面の布目には粗密の差が認められ、2㎝四方での縦糸、横糸が10×13本～18×10本まで認められた。次に側面の調整では、分割敲面が未調整のものと、ヘラケズリを施すものとがあり、凹側縁、凹端縁では、それぞれを削るものも認められた。



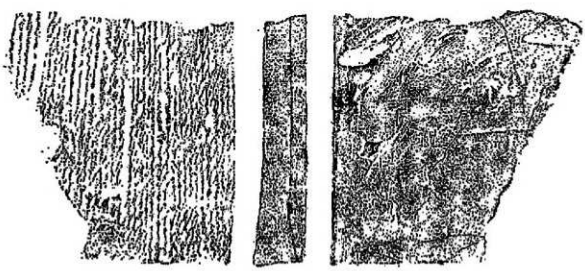
第61図　平瓦断面図及び拓本(1)　(1/3)



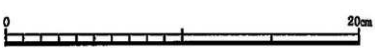
第62図　平瓦断面図及び拓本(2)　(1/3)



Ⅳ—B—b類



Ⅳ—B—c類



第63図　平瓦断面図及び拓本(3)　(1/3)

第 4 節　奈良・平安時代初頭における土器の器種構成

当遺跡にて出土した土器の各器種が、各遺構から完形品が何点出土したかを調査する為に、近似値として、破片数であらわしたものである。計数基準については次の通りである。

- どの様な小さな口縁部破片でも、どの器種の破片かわかれば、すべて計数した。
- 土師器　杯と皿の器種分類は、おおよそ器高が2㎝を越えるものについては杯、越えないものについては皿として分類した。
- また土師器　杯と皿の器種分類できない破片は、杯・皿の項に入れた。
- 土師器　杯A・皿A・杯蓋・椀・鉢・壺・甕・堝については、口縁部を計数した。
- 土師器　高杯は口縁部、脚部の両部分を計数した。
- 土師器　杯B・皿B・盤は口縁部と高台部分を計数した。
- 甑は底部および口縁部を計数した。
- かまどはたき口か上方の口を計数した。
- 羽釜は鍔と口縁部を計数した。
- たこ壺は紐孔を計数した。
- 須恵器　杯A・皿Aは、高台を付けないもの、杯B・皿Bは有高台のもの、杯Cは古墳時代の立ち上りを有する杯と分類した。
- 須恵器　杯A、C・皿A・鉢・高杯・甕は口縁部で計数した。
- 須恵器　杯の口縁部破片のうち、杯A・杯Bのどちらに分類されるかわからないものについては、杯A・Bの項に入れた。
- 杯B・皿Bは高台を計数した。
- 杯B蓋は宝珠つまみも計数に入れた。
- 壺は口縁部、底部を計数した。
- 横瓶・提瓶・平瓶は、それぞれの個体を表わす部位を計数した。
- 盤は口縁部と高台を計数した。
- 黒色土器　杯は口縁部と高台部を計数した。
- 灰釉陶器　杯は口縁部から高台部、壺は口縁部・体部・底部を計数した。
- なお上記のうちで、2ヶ所以上の部分で計数するものについては、同一と思われる破片は一個体として計数した。
- 今回の調査において、完掘し、今後計数が変動しないものは、遺構名の横に※を付けた。
- 表（5）「重複する器種を除く数」の項は次の基準で行なった。例えば杯Bと杯B蓋とがセットになる器種の場合、杯Bの計数は双方を加算したものより、双方のうちで数量の多い計数をとる方がより正確な近似値が得られると考えられるため、計数の多い方をとった。また同一器種の異なる部位についても同様の取り扱いをして数量の多い計数をとった。

第5表　奈良・平安時代初頭における土器の器種構成表

器種	遺構名 ＼ トレンチ	A		A		A		A		A		A		A		A		A		A		
		竪穴住居 A-1	(%)	竪穴住居 A-2	(%)	溝 A-1	(%)	溝 A-2	(%)	井戸 A-1	(%)	井戸 A-2 掘方上部	※ (%)	井戸 A-2 掘方下部	※ (%)	井戸 A-2 井戸枠内	※ (%)	土坑 A-1	(%)	小計
土師器	杯A									12	29.3	16	12.7	8	25.8	10	16.9	10	32.3	56
	杯B									5	12.2					2	3.4			7
	皿A									2	4.9	8	6.3	1	3.2	1	1.7	4	12.9	16
	皿B											1	0.8							1
	杯皿(口縁部)											30	23.8							30
	杯蓋																			
	椀							1	4.8			9	7.1	2	6.4	8	13.6	1	3.2	21
	鉢											5	4.0	1	3.2	5	8.5	2	6.5	13
	高杯　口縁部			2	25			2	9.5	1	2.4	1	0.8							6
	高杯　脚　部					1	100			1	2.4					2	3.4			4
	盤																			
	壺							1	4.8									1	3.2	2
	甕	1	100	2	25			3	14.3	1	2.4	15	11.9	9	29.0	15	25.4	7	22.6	53
	甑																			
	鍋																			
	かまど			1	12.5							1	0.8							2
	羽釜									2	4.9	7	5.5	1	3.2	3	5.1			13
	たこ壺																			
	ミニチュアの高杯									1	2.4									1
須恵器	杯A			2	25			4	19.0	1	2.4	1	0.8					1	3.2	9
	杯B									4	9.8	6	4.8	1	3.2	1	1.7			12
	杯B蓋							3	14.3	6	14.6	6	4.8	1	3.2	1	1.7	4	12.9	21
	杯C																			
	杯C蓋																			
	かえり付き杯蓋																			
	杯A・B (口縁部)											9	7.1	1	3.2	1	1.7			11
	皿A																			
	皿B																			
	鉢(擂鉢)									1	2.4									1
	高杯			1	12.5			3	14.3											4
	壺(大)　口縁部									2	4.9	6	4.8	1	3.2					9
	壺(大)・底　部							2	9.5			1	0.8	1	3.2	2	3.4			6
	壺(小)　口縁部											4	3.2			1	1.7	1	3.2	6
	壺(小)　底　部							2	9.5							1	1.7			3
	甕									2	4.9			3	9.6	5	8.5			10
	横瓶																			
	平瓶													1	3.2					1
黒色土器	杯															1	1.7			1
灰釉	杯																			
	壺																			
	総　数	1	(100)	8	(100)	1	(100)	21	(100)	41	(99.9)	126	(100)	31	(99.6)	59	(100.1)	31	(100)	319

器種	トレンチ	A		A		A		A		A		A		A		A		A		A		
	遺構名	土坑	※	土坑	※	土坑	※	土坑	※	溝	※	溝	※	溝		溝		溝		小計
		A-2	(%)	A-3	(%)	A-4	(%)	A-5	(%)	A-3	(%)	A-4	(%)	A-5	(%)	A-6	(%)	A-7	(%)	
土師器	杯A			1	33.3	23	48.9	3	12.0			2	22.2	2	22.2	4	10.3	3	30	38
	杯B																			
	皿A																			
	皿B					1	2.1													1
	杯皿(口縁部)					8	17.0									18	46.2			26
	杯蓋					1	2.1	2	8.0											3
	椀					1	2.1	1	4.0											2
	鉢															2	5.1	1	10	3
	高杯　口縁部															1	2.6			1
	高杯　脚　部					3	6.4													3
	盤																			
	壺					5	10.6									1	2.6			6
	甕	3	42.9					4	16.0	1	20	3	33.3	4	44.4	1	2.6	1	10	17
	甑																			
	鍋																			
	かまど	2	28.6											1	11.1					3
	羽釜							1	4.0							4	10.3			5
	たこ壺																			
	ミニチュアの高杯																			
須恵器	杯A					1	2.1			1	20	1	11.1	1	11.1	1	2.6			5
	杯B	1	14.3									2	22.2			1	2.6			4
	杯B蓋					1	2.1	2	8.0	1	20					2	5.1	1	10	7
	杯C													1	11.1					1
	杯C蓋																			
	かえり付き杯蓋			1	33.3															1
	杯A・B(口縁部)			1	33.3	1	2.1			2	40					2	5.1	2	20	8
	皿A																			
	皿B					1	2.1													1
	鉢(擂鉢)							2	8.0			1	11.1			1	2.6			4
	高杯																			
	壺(大)　口縁部					1	2.1											2	20	3
	壺(大)　底　部							1	4.0							1	2.6			2
	壺(小)　口縁部							1	4.0											1
	壺(小)　底　部							2	8.0											2
	甕							6	24.0											6
	横瓶																			
	平瓶																			
黒色土器	杯	1	14.3																	1
灰釉	壺																			
	総　数	7	(100.1)	3	(99.9)	47	(99.7)	25	(100)	5	(100)	9	(99.9)	9	(99.9)	39	(100.3)	10	(100)	154

器種	トレンチ	A		A		A		A		A		A		A		A		A		
	遺構名	溝 A-8	(%)	溝 A-11	(%)	溝状遺構	(%)	埋積谷堆積層 1層	(%)	埋積谷堆積層 2層	(%)	埋積谷堆積層 3層	(%)	埋積谷堆積層 4層	(%)	埋積谷堆積層 1・2・3・4層	(%)	Ⅱ・Ⅲ層出土	(%)	小計
土師器	杯A	2	22.2			28	12.4	7	8.9	2	3.8	5	5.7	1	12.5	25	6.6	23	13.6	93
	杯B					1	0.4	12	15.2	7	13.5	10	11.7			48	12.6			78
	皿A					7	3.1			3	5.8	6	6.8			19	5.0	5	3.0	40
	皿B							1	1.3							3	0.8			4
	杯皿(口縁部)					35	15.5									4	1.0			39
	杯蓋															1	0.3	1	0.6	2
	椀											2	2.3			5	1.3	2	1.2	9
	鉢					10	4.4					3	3.4			7	1.8	3	1.8	23
	高杯 口縁部					4	1.8			1	1.9					5	1.3			10
	高杯 脚部					1	0.4					1	1.1	1	12.5	11	2.9	4	2.4	18
	盤					2	0.9			1	1.9	2	2.3			3	0.8			8
	壺					1	0.4													1
	甕	2	22.2			34	15.0	8	10.1	13	25.0	18	20.5			92	24.1	21	12.4	188
	甑																	2	1.2	2
	鍋					2	0.9													2
	かまど															1	0.3			1
	羽釜					22	9.7	5	6.3	2	3.8	3	3.4	1	12.5	42	11.0	9	5.3	84
	たこ壺																			
	ミニチュアの高杯															2	0.5			2
須恵器	杯A	2	22.2	1	50	7	3.1	5	6.3			3	3.4	1	12.5	2	0.5	2	1.2	23
	杯B					10	4.4	5	6.3			3	3.4			4	1.0	13	7.7	35
	杯B蓋			1	50	13	5.8	10	12.7	5	9.6	7	8.0	2	25	17	4.5	14	8.3	69
	杯C					2	0.9	2	2.5			2	2.3			3	0.8	7	4.1	16
	杯C蓋																	1	0.6	1
	かえり付き杯蓋					1	0.4									2	0.5	2	1.2	5
	杯A・B(口縁部)	2	22.2			20	8.8	13	16.5	8	15.4	10	11.4			18	4.7	34	20.1	105
	皿A					2	0.9					1	1.1			4	1.0			7
	皿B															1	0.3	1	0.6	2
	鉢(擂鉢)					1	0.4					2	2.3			7	1.8	4	2.4	14
	高杯											1	1.1			1	0.3	1	0.6	3
	壺(大) 口縁部					12	5.3	5	6.3	1	1.9	1	1.1			10	2.6	10	5.9	39
	壺(大) 底部					1	0.4	3	3.8	3	5.8	4	4.5	2	25	17	4.4	3	1.8	33
	壺(小) 口縁部					1	0.4	1	1.3	1	1.9							2	1.2	5
	壺(小) 底部					1	0.4	1	1.3	2	3.8					2	0.5	2	1.2	8
	甕					5	2.2	1	1.3	1	1.9	4	4.5			15	3.9	3	1.8	29
	横瓶																			
	平瓶					1	0.4									1	0.3			2
黒色土器	杯	1	11.1			2	0.9									6	1.6			9
灰釉	杯																			
	壺									2	3.8					3	0.8			5
	総数	9	(99.9)	2	(100)	226	(99.6)	79	(100.1)	52	(99.8)	88	(100.3)	8	(100)	381	(99.8)	169	(100.2)	1,014

器種	遺構名 ＼ トレンチ	A		B		B		特殊マンホール		BC				
		試掘時出土	(%)	溝 B-6	(%)	溝 B-7	(%)	落ち込みCW-1		Ⅲ・Ⅳ層		小計	総計	(%)
土師器	杯A	16	8.0									16	203	11.6
	杯B	4	2.0	1	3.2			1	16.7			6	91	5.2
	皿A	10	5.0	1	3.2							11	67	3.8
	皿B												6	0.3
	杯皿(口縁部)												95	5.4
	杯蓋												5	0.3
	椀	1	0.5									1	33	1.9
	鉢	5	2.5	1	3.2							6	45	2.6
	高杯　口縁部	2	1.0									2	19	1.0
	高杯　脚　部	4	2.0	1	3.2							5	30	1.7
	盤												8	0.5
	壺							1	16.7			1	10	0.6
	甕	15	7.5	3	9.7			1	16.7	1	4.2	20	278	15.9
	甑												2	0.1
	鍋												2	0.1
	かまど												6	0.3
	羽釜	7	3.5	1	3.2	1	20					9	111	6.3
	たこ壺	1	0.5									1	1	0.06
	ミニチュアの高杯			1	3.2					1	4.2	2	5	0.3
須恵器	杯A	13	6.5	6	19.4	1	20					20	57	3.6
	杯B	28	14.0	1	3.2			1	16.7	10	41.7	40	91	5.2
	杯B蓋	19	9.5	5	16.1					2	8.3	26	123	7.0
	杯C	6	3.0	1	3.2							7	24	1.4
	杯C蓋	1	0.5	1	3.2							2	3	0.2
	かえり付き杯蓋	6	3.0	1	3.2							7	13	0.7
	杯A・B(口縁部)	20	10.0							2	8.3	22	146	8.3
	皿A	1	0.5									1	8	0.5
	皿B			1	3.2							1	4	0.2
	鉢(擂鉢)	3	1.5							1	4.2	4	23	1.3
	高杯	2	1.0	1	3.2	1	20					4	11	0.6
	壺(大)　口縁部	8	4.0	1	3.2	1	20			4	16.7	14	65	3.7
	壺(大)　底　部	3	1.5	1	3.2					1	4.2	5	46	2.6
	壺(小)　口縁部	8	4.0	1	3.2					1	4.2	10	22	1.3
	壺(小)　底　部			1	3.2	1	20					2	15	0.9
	甕	1	0.5					2	33.3			3	48	2.7
	横瓶												1	0.05
	平瓶			1	3.2					1	4.2	2	5	0.3
黒色土器	杯	14	7.0									14	24	1.4
灰釉	杯	1	0.5									1	1	0.05
	壺												5	0.2
	総　数	199	(100)	31	(99.6)	5	(100)	6	(100.1)	24	(100.2)	265	1,752	(100.16)

器種	遺構名 ＼ トレンチ	器種ごとの総数	重複する数を除いた数	総数比(%)	器種ごとの百分率(%)	奈良平安頃時代初頭のもの	総数比(%)	器種ごとの百分率(%)
土師器	杯A	203	203	12.9	20.4	578 (供膳形態)	36.7	58.2
	杯B	91	91	5.8	9.2			
	皿A	67	67	4.3	6.7			
	皿B	6	6	0.4	0.6			
	杯皿(口縁部)	95	95	6.0	9.6			
	杯蓋	5	(註－1)					
	椀	33	33	2.1	3.3			
	鉢	45	45	2.9	4.5			
	高杯 口縁部	19	(註－2)					
	高杯 脚部	30	30	1.9	3.0			
	盤	8	8	0.5	0.8			
	壺	10	10	0.6	1.0	10 (貯蔵形態)	0.6	1.0
	甕	278	278	17.7	27.9	399 (煮沸形態)	25.4	40.2
	甑	2	2	0.1	0.2			
	鍋	2	2	0.1	0.2			
	かまど	6	6	0.4	0.6			
	羽釜	111	111	7.0	11.2			
	たこ壺	1	1	0.06	0.1	6 (その他)	0.4	0.6
	ミニチュアの高杯	5	5	0.3	0.5			
	小計および百分率合計		993	(63.06)	(99.8)			(100)
須恵器	杯A	57	57	3.6	10.4	409 (供膳形態)	26.0	74.4
	杯B	91	(註－3)					
	杯B蓋	123	123	7.8	22.4			
	杯C	24	24	1.5	4.4			
	杯C蓋	3	(註－4)					
	かえり付き杯蓋	13	13	0.8	2.4			
	杯A・B(口縁部)	146	146	9.3	26.5			
	皿A	8	8	0.5	1.5			
	皿B	4	4	0.3	0.7			
	鉢(椀鉢)	23	23	1.5	4.2			
	高杯	11	11	0.7	2.0			
	壺(大) 口縁部	65	65	4.1	11.8	141 (貯蔵形態)	9.0	25.6
	壺(大) 底部	46	(註－5)					
	壺(小) 口縁部	22	22	1.4	4.0			
	壺(小) 底部	15	(註－6)					
	甕	48	48	3.1	8.7			
	横瓶	1	1	0.06	0.2			
	平瓶	5	5	0.3	0.9			
	小計および百分率合計		550	(34.96)	(100.1)			(100)
黒色土器	杯	24	24	1.5		24	1.5	
灰釉	杯	1	1	0.06		6	0.4	
	壺	5	5	0.3				
	総数および百分率合計	1,752	1,573	(99.88)		1,573		

註－1　杯Bとセットになる為、杯B、杯蓋の多い方の数を採った。

註－2　口縁部と脚部は一体である為、多い方の数を採った。

註－3　杯Bと杯B蓋では、セットになる事が考えられる為、数の多い方を採った。

註－4　杯Cと杯C蓋では、セットになる事が考えられる為、数の多い方を採った。

註－5　註－6　数の多い方を採った。

第Ⅵ章　調査により得られた知見と今後の課題

第１節　大堀遺跡の歴史的変遷

調査成果および出土遺物の検討、付論とりまとめて、以下大堀遺跡の歴史的変遷を述べてゆきたい。これを述べる前に、一言『大堀城跡』について触れておく。

「大堀氏」が文献上に見られる資料からすれば、中世～近世初頭に存在している。今回の調査ではこの時代に相当する遺物、遺構は、ごくわずかしか検出できなかった。C調査区の溝C－１、C－２、土坑C－１等がそうである。しかしこれらの遺構は、現在判断するかぎりいずれも大堀城跡にともなう遺構とは考え難い。また現在まで判明した調査でも他の時代の堀、土塁、石垣等も全く検出していない。これらの調査から判断すれば、本調査の目的である大堀城跡は全く調査範囲内に入っていなかったのではないかと考えられる。また本来の大堀城跡の所在地は、中央環状線の大堀交差点より、東側 100m付近の東除川に面したあたりではないかと小字名等からも考えられる。

以下、大堀遺跡の歴史的変遷を時代順にとりまとめてゆく。なお下記に示す所見は、現在までに判明した事実を基に述べており、今後の調査の進展によってさらに補足されるべきものである。

旧石器時代　大堀遺跡の位置する地域は、最近の発掘調査に伴い旧石器の出土を報ずる遺跡が増加している。主な遺跡をあげると、亀井遺跡、長原遺跡、長吉川辺遺跡、長吉野山遺跡、瓜破遺跡、八尾南遺跡等の諸遺跡があげられる。これらの遺跡の所在する地点は、羽曳野丘陵及び瓜破台地の縁辺部にあたる。特に長原遺跡などは、低位段丘被覆層中より接合資料を含む良好な遺物包含層を確認することに成功している。この為同じ段丘上に位置する当大堀遺跡も、調査開始当初より旧石器時代に伴う遺物包含層の有無が問題にされ、地山面の部分的掘削、段丘面の確認の検討がなされてきたのであるが、現在までに、旧石器時代の遺物包含層を確認することはできなかった。しかし後期旧石器時代の遺物と考えられる石核及び剥片類、ナイフ形石器等の遺物が、原位置より遊離していながらも出土しているため、当調査区に隣接するいずれかの場所に遺物包含層を推定することができる。

縄文～弥生時代　縄文～弥生時代に属する確かな資料として、石鏃が６点及び石核が出土しているのみである。そのため当調査区の周辺に同時代の遺構の存在を推定できるのであるが、それ以上の手懸りは現在までつかめていない。そのため今後とも詳細な検討が必要である。

古墳時代前期・中期　この時代の遺構、遺物は、わずかに検出したにとどまる。溝A－１の時期決定および溝の性格等、解明しなければならない課題は多い。このほかには、この時代の手懸りは全くない。

古墳時代後期・奈良時代・平安時代　A調査区北端には、６世紀後半から末にかけての竪穴住居や溝がある。そのあとに奈良時代中ごろかと思われる溝、および柱穴を検出した。A調査区南

端付近には8世紀ごろから9世紀初頭までの掘立柱建物群が存在する。B調査区北端にて検出した掘立柱建物群とは同時併存し、同一の集落をなすと考えられる。これらの竪穴住居、掘立柱建物群は、それぞれの時代ごとにいくつかの単位を形成しているようである。しかしそれぞれの変遷については、今後の検討にゆだねたい。

A調査区南側とB調査区北側の形成する集落の範囲は、東側は浅い開析谷まで、南側は21区あたりまで、西側では大きな開析谷を利用した現代の溜池付近までと考えられる。北側については現在検討中である。なおこの時期の開積谷は一部埋積しているが窪んでいる。

次に掘立柱建物群の切り合いは、溝状遺構を入れて最大6期である。また建物の主軸方位の振れは、N－5°－EからN－10°－Eまである。全体的には、順次角度が一定方向に振っている様子はみられない。掘立柱建物の規模は、判明するものでは最大30.3㎡、最小 5.8㎡であるが、より大きな規模になる可能性も確実に存在している。

集落の存続時期は、遺構内から検出する遺物では奈良時代前半ごろから平安時代初頭までである。しかし埋積谷堆積層中や遺構中の混入遺物と思われる遺物には、6世紀末ごろを示す遺物も出土した。これらについても今後の検討課題である。集落周辺部より出土した遺物では、軒丸瓦、丸瓦、平瓦の出土がある。平瓦から検討すれば、その時代は少なくとも7世紀末ごろから8世紀末葉の範囲内におさまるようである。また埴、帯金具、墨書土器、土馬、製塩土器、灰釉陶器等の出土がある。これらから考えると、この集落の性格についてさまざまに考える事が可能である。これらの詳細な検討は今後の課題としたい。また、この集落の郷名考証、氏族の名称等、解明しなければならない問題点もある。

鎌倉・室町時代　13・14世紀ごろ当調査区では、再び開発の手が伸びる。A調査区では開析谷が徐々に埋積し、最終的には平坦地となる。B・C・E・W調査区では整地層らしいもの(Ⅳ層)も認められる。このほか、溝、土坑、井戸、小溝、畦畔状遺構を検出している。特に、C調査区西側の開析谷へ落ち込む傾斜地に、溝C－1、C－2が掘られている。これらは段丘上の開発に伴うものとして機能したであろう。また小溝も東西方向、南北方向が認められる。しかしそれぞれの小溝が群をなしている形ではない。井戸C－1も非常に深い井戸であり、段丘上の開発に伴って使用されたと考えられる。畦畔状遺構は、この地がすでに畑地化していた事を示す資料であるが、遺存状況が悪い為その詳細な点については明らかではない。

安土桃山・江戸時代　この時代では、畝溝、小溝が認められる。これらはどの様な性格のものか、また何に使用されたものか、今後の検討課題である。C・W調査区では深さ2m以上の素掘りの井戸が掘られる。これらの井戸と溜池の関係も今後の検討課題である。

第２節　奈良時代集落についての二、三の問題

大堀遺跡の変遷は、前節で詳しくまとめられているが、そのうち、今回の調査で遺構・遺物がもっとも顕著に検出された奈良時代から平安時代初頭にかけての集落における二、三の問題について以下簡単に触れておきたい。

１．８、９世紀代の集落は掘立柱建物、柵、井戸などから構成されるが、調査区域の制約もあって、集落の一端を垣間見たに過ぎず、それら相互の関係は必ずしも明瞭でない。

それでは、いったい集落の範囲はどの程度の拡がりをもっているのであろうか。集落が立地している地形は洪積段丘中位面に属し、東側の段丘崖下を東除川が北流し、西側には開析谷が刻まれており、調査区付近での段丘崖と開析谷にはさまれた東西の長さは、約 250mを測る。すなわち奈良時代の集落は、東西に限って言えばこれ以上の規模にはならないであろう。ちなみに今回の調査では、西側の開析谷の上端から東へ70～80mの地点以西は掘立柱建物は検出されていない。しかし、南と北の拡がりについてのデータは全くない。

２．集落の構造となると、今回のように幅10mの細長いトレンチ調査では獲得しうる知見はあまりないと言わざるを得ない。しかしながら、掘立柱建物によって構成される集落に関して言えば、Ａトレンチで検出された小開析谷より西側に建物が集中しているが、東側にも、建物になる可能性を有した柱掘方が一部存在しており、もし、これが建物になるとすれば、集落は小開析谷をはさんで二単位に区分される。そうすると、両者の建物規模、出土遺物の検討などが今後の課題となるし、また小開析谷がどのような機能をしていたのかも考えていかねばならない。

３．一定期間継続している集落の生産基盤を何に、あるいはどこに求めるか。ごく普通に考えられるのは水稲耕作だが、集落の近接地で水田の存在が予想されるところとしては、西側の開析谷と東除川以東の沖積平野がある。無論、水田位置の確定は早急に決められるものではないが、いずれにせよそれぞれに対応する灌漑系統をどうみるのか。それと関連して、調査で検出された各級の溝をどのように理解していくべきか、が今後の課題となる。それとともに段丘上における畠作の可能性も考慮のうちに入れておきたい。

その場合、水田遺構などが検出されるような直接的証明とは別に、近辺の開析谷の埋積状況も参考になるであろう。開析谷の埋積物質、埋積時期、そのスピードなどは、開析谷そのものの利用と、周辺の段丘の開発もしくはその内容、あるいは谷口部近辺の沖積地の埋積過程などと密接に関連する。開析谷の発掘調査の積み重ねも、上記の問題解決の強力な傍証となしうるわけである。

４．奈良時代集落を構成する掘立柱建物は、今回の調査では、さほど大規模なものは検出されなかったが、出土した遺物にはみるべきものがある。銙帯金具（巡方）、かなりの数の灰釉陶器（瓶、椀など）、墨書土器など一般集落でも優位な部分に位置する。銙帯の出土は官人の存在を

推測させるし、この時期、さほど一般的な流通の認められない灰釉陶器、ことに壺の出土などは注目されてよい事実といえよう。こうした遺物の存在は、この集落が在地においては上層に所属づけられる一つの根拠となりうる。

5．いま一つ注目すべき遺物に軒瓦、平瓦、丸瓦、塼の出土を指摘しておきたい。勿論、屋瓦類の出土は付近に寺院の存在を推測させるのであるが、今回の調査区域から北へ約1Kmの長原遺跡でも屋瓦が出土し、ことに単弁16弁蓮華文は、外区と内区の境の圏線が一重か二重かの相違はあるが、それ以外は酷似している。南北1Kmに及ぶ屋瓦類の出土の範囲が同一寺院に起因するかどうかは不明と言わざるを得ないが、いずれにせよ、今回の調査で検出された奈良時代集落の北方に大堀廃寺とでも呼ぶべき寺院が建立されていたことは、十分に想定される。

6．屋瓦のうち、軒丸瓦は1点だけで奈良時代後期に所属するものである。平瓦については次の時期のものがみられる。①桶巻作りで白鳳期所産になるもの。②一枚作りで奈良時代後期のもの。③両者の中間的な時期になりそうなもの。以上であるが、数点の中近世のものを除くと平安時代以降の屋瓦は明確でない。今回の出土瓦で判断する限り、おそらく存在したであろう寺院は、白鳳期に創建され、中世までは存続しない古代寺院としての、一つの典型に含まれるような様相が見受けられる。

畿内の古代寺院は、奈良前期（白鳳期）に建立されたのち、平安時代の屋瓦を出土することが少ない。そのまま廃絶したもの、平安後期頃に一部堂塔が再建されるもの、鎌倉室町時代頃に再び興隆を極めるものなどがあるが、いずれにせよ、寺院の性格は変質しているようであり、その一つの転機が平安時代に求められるのではなかろうか。勿論そうした動向は檀越氏族そのものの変質をも表出しているであろう。この大堀遺跡はそうした視点からの分析を可能にするようにも思われる。

7．上記してきたように、集落に近接して古代寺院が所在した可能性と、銙帯などの出土といった事実からすれば、大堀遺跡における奈良時代集落を営んだ集団は、古代寺院を建立した有力氏族、もしくはその関連氏族の確率が高くなってくる。

さて古代寺院は和泉国に17ケ寺、河内国に約50数ケ寺所在し、1～2郷単位に1ケ寺建立されている。また寺院造営には高度な技術の結集が要請されるが、在地レベルの建築技術では到底不可能であり、中央の援助、指導を必要とする。このように寺院建立の技術的側面だけをとってみても、建立氏族と中央との密接な関係は否定できず、銙帯の存在はその傍証となりうる。換言すれば、寺院建立氏族は在地では1～2郷程度の領域を支配しながら、中央へいくと官僚としての政治的位置を占める存在ではなかろうか。上記のように規定したとしても、そういった関係が長期間存続するかどうかはわからない。古代氏族がどのように変貌を遂げていくのか、そういった問題を考古学的に究明していくためにも集落の分析は不可欠となる。

8．調査区内を見る限り、集落は9世紀前半頃に廃絶している。ここに一つの画期がある。集落の廃絶、それはとりもなおさず集団の移住を意味するが、そこに集団関係の再編をともなう場合

もありうるし、またそういった現象の背後にある社会的要因をも射程のうちにいれておく必要がある。その一つの要素として生産関係の変革が指摘されるが、考古学的には、北約1Kmに所在する長原遺跡で検出されている水田の変遷などが参考になる。この長原遺跡からは、大堀遺跡の銙帯に対して石帯が出土している。今後、両遺跡を同一視野にたって考えていく必要がある。

9．いっぽう集落の開始期については、竪穴住居と掘立柱建物の関係が問題となる。調査の進渉によってより確実なデータが得られるであろうが、ここでは次の三つの可能性を挙げておきたい。第一に、竪穴住居に居住している集団と掘立柱建物に居住している集団が連続する場合。第二に、両者が連続しない場合。第三に、両者が同時併存する場合などがある。第一の場合は、建築様式が変化するわけであるが、その時期、契機などが問題になるであろう。ちなみに、大阪府下においては、7世紀初頭が変化の画期である。第二の場合は、一方による他方の駆逐なのか、この周辺の耕地開発の問題とも密接なかかわりをもってくる。第三の場合は、他遺跡における現象を参考にすると、両者は階層関係を表わす可能性が強い。ひとり大堀遺跡だけではなく、周辺の類例遺跡との比較考察がおこなわれねばならないが、大阪府下においてはこの関係は成立する可能性は極めて少ないように思われる。そうすると、前二者に絞られてくるが、いずれに帰属するか、十分なデータの蓄積を待って考えていかねばならない。

10．出土遺物について二、三触れておきたい。一つは土師器の甕、いま一つは同じく土師器の鉢である。前者は体部外面にハケ調整を施さないもので、このタイプの甕は南河内地域では8世紀前葉頃から顕著になるが、和泉地域では9世紀中葉にならないと一般化しない。いっぽう後者の鉢は、初期の形態をみるとおそらく須恵器の鉄鉢形の鉢を模倣したもので、8世紀初頭頃から普及してくるが、和泉地域にはほとんど分布しない。この両者は8世紀代における土師器と須恵器の生産と流通のあり方を集約的に表現していると考えられる。つまり、供給不十分な須恵器鉢の代替物としての土師器鉢と、土師器生産の過多による煮沸容器の外面調整の省略がその中心だが、ここでそれを展開する紙幅の余裕はないため、問題の所在を指摘するにとどめておきたい。

11．いま一つ、製塩土器についても少し指摘しておきたい。大堀遺跡のような内陸地における製塩土器の出土は、5世紀末葉～6世紀初頭と8世紀後葉～9世紀前葉にそのピークが認められるが、後者の場合、南河内と和泉の両地域においては若干ことなる現象を呈するようである。すなわち、和泉地域で出土する製塩土器はほとんどが紀州もしくはその周辺の産であるのに対して、南河内ではそれに加うるに、内面に布目痕を有し、外面にタタキを施し、黒雲母などを含む胎土の製品、おそらく「筑前産」のものと、外面に粘土紐の接合痕を残す産地不明のものなどがみられる。両地域におけるこの相違はいったい何に起因するのか、といった問題とともに、内陸地における製塩土器の出土の意味も問われる必要がある。ちなみに、この時期には、和泉、南河内両地域とも、製塩土器はほとんど総ての集落遺跡から出土するようである。

以上興味のおもむくまま簡単にまとめてみたが、今後の調査の進展により検証される問題もあるかもしれないし、そうでないものも多くある。我々の調査が個々の担当者の問題意識や力量といったものの埒外で開始されるだけに、それぞれの調査で得られた問題を自らに課して、次の調査へ向っていく必要がある。そういった観点から二、三の問題の所在を記してみた次第である。

付　　章

Ⅰ　大堀遺跡出土の石器を構成する岩石種と推定産地……佐藤隆春

Ⅱ　大堀遺跡出土植物遺体について……山口猷治

I　大堀遺跡出土の石器を構成する岩石種と推定産地

佐藤隆春

採取された石器類は、中礫～大礫大の角礫～亜角礫が多い。ほとんどは二上層群の火山岩であるが、一部には和泉層群の砕屑岩が使われている。これらの表面は灰白色または灰褐色の風化面となっており、含有鉱物の識別は困難である。岩石組織および流理構造などをてがかりに肉眼で3種類に区別をし、それぞれ岩石薄片を作成し、鏡下で確認をした。

A　輝石・かんらん石玄武岩

肉眼での特徴：灰色の風化面上に褐色の斑晶鉱物が浮きでている。この岩石種の石器が最も多い。風化面の特徴で、さらに3種類に細分できる。

A_1：褐色の斑晶の粒径0.5mm～1mm大で、石基は細粒である。

A_2：A_1と類似するが、斑晶の粒径が0.5mm大とやや小さい。

A_3：斑晶の粒径は1mm大で、石基がA_1、A_2に比べて、やや粗粒となり、針状石基鉱物がみられる。

これらの岩石の新鮮な面は暗黒色のち密な塊状の岩石である。

鏡下での特徴：斑晶は1～2mm大の自形のかんらん石と、0.5mmの半自形の単斜輝石からなる。かんらん石の周縁部などはしばしば変質をうけている。斜長石斑晶は存在しない。石基は間粒状組織を呈する。0.1～0.2mm大の短柵状斜長石・粒状の単斜輝石・不透明鉱物などからなる。A_2の石基は全体にA_1・A_3よりやや細粒である。

産地：類似の輝石・かんらん石玄武岩は、奈良県三郷町の信貴山山頂およびその東方に小規模な岩脈として産するほか二上山北麓の石切場東方の烏岳にも岩脈として存在する。信貴山山頂の岩脈はやや粗粒でA_1・A_3に、山頂東方の岩脈はやや細粒でA_2に対応する可能性がある。（烏岳の岩脈はA_2に類似するが斑晶量がやや多い。）一方、柏原市芝山にもかんらん石玄武岩が産するが、斜長石斑晶を含むなどの点で異なる。柏原市留所山北西にもかんらん石輝石玄武岩が産するが、斜方輝石斑晶を含むので本岩石とは異なる。

B　無斑晶質輝石安山岩

肉眼での特徴：風化面は灰白色で斑晶鉱物の確認できない無斑晶質のち密な岩石である。流理構造は顕著で流理面に沿って板状に割れる。新鮮な面は黒褐色を呈する。

鏡下での特徴：0.2～0.5mm大の長柱状自形斜方輝石の微斑晶をまばらに含む。石基はハイアロオフィティック組織を呈する。細粒の斜長石・単斜輝石・斜方輝石などからなる。

＊石器の多くは「サヌカイト」であるが、今回は「サヌカイト」以外の岩石種について重点的に記載をした。

産地：類似の無斑晶質安山岩は二上山北麓の春日山・石まくり・柏峰・明神山などに溶岩流として産する。これらの溶岩流は一般に急冷部は黒色ガラス質となり、中心部は流理構造の明瞭な無斑晶質安山岩となる。Bには角閃石斑晶が含まれない点で柏峰、明神山の溶岩流とは異なる。

C　斑状輝石安山岩

肉眼での特徴：灰白色の風化面上に長径1㎜大の斜方輝石や柱状の斜長石斑晶が認められる。平板状の角礫が多いが、板状節理によるものと思われる。

鏡下での特徴：1～2㎜大の自形～半自形の斜長石斑晶と 0.2㎜大の斜方輝石斑晶を含む。まれに、斑晶の核としてシソ輝石が存在する（Z′：淡黄褐色、X′：淡黄色）。斜長石には、アルバイト集片双晶を示すものや、融食形を示すものなどがしばしば見受けられ、一部はゼノクリストと判断できる。完全にオパサイト化して確認できないが、柱状の外形から角閃石または黒雲母の斑晶も含まれていると判断される。石基は横間状組織を呈し、 0.1㎜大の微細な長柱状斜方輝石と斜長石などからなる。

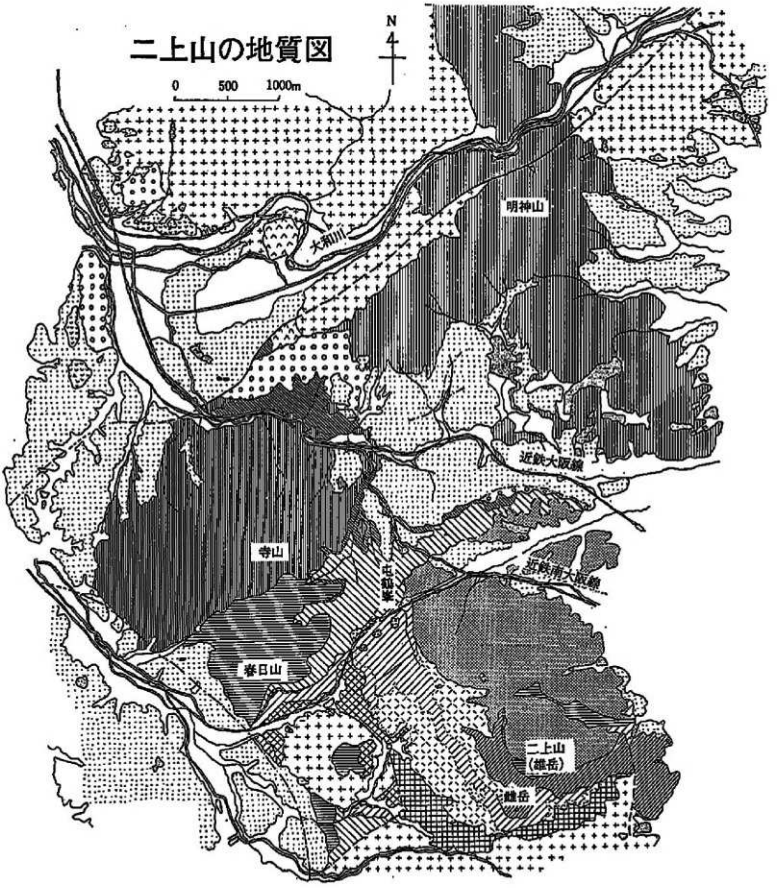
産地：輝石と斜長石の斑晶を含む安山岩は二上山北東斜面と北方の寺山付近に溶岩流として産し、それぞれ、畑火山岩・寺山火山岩と名づけられている。畑火山岩に比べてCは輝石斑晶の粒径が小さく、量も少ないなどの点で、また寺山火山岩に比べてCには融食形の石英が含まれないなどの点で異なり、産地を特定することはできない。

なお、石器以外の角礫に、量は少ないが柏原市芝山のかんらん石輝石玄武岩とよく類似した礫があった。この岩石は暗褐黒色のち密な岩石で、1～3㎜大の斜長石・かんらん石・単斜輝石斑晶を含む。石基は間粒状組織を呈し、単斜輝石・斜長石などからなる岩石である。

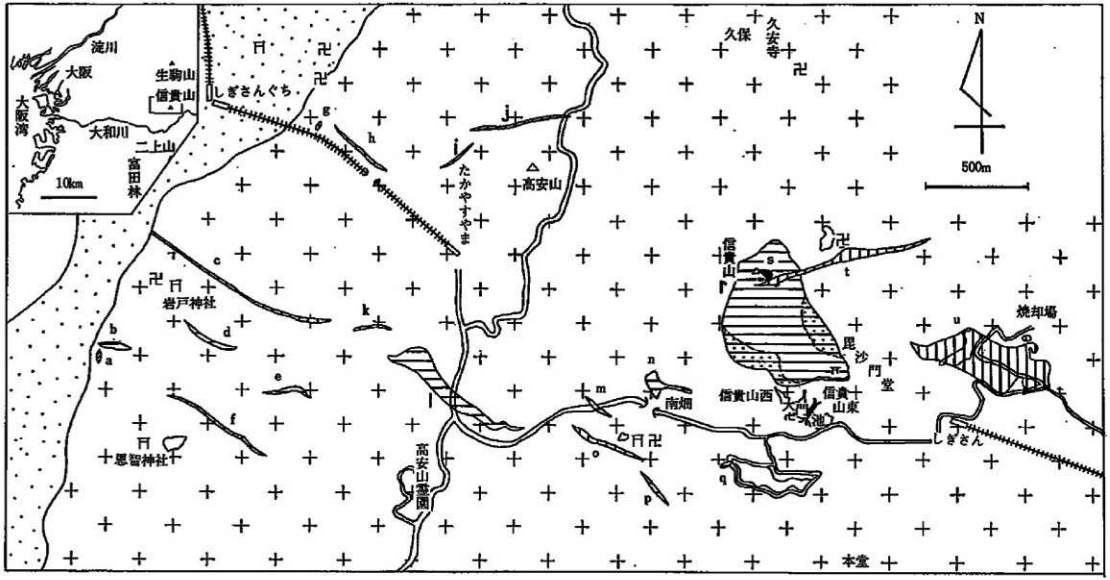
〔参考文献〕

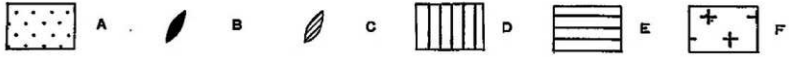
森本良平ほか（1953）「二上山の地質」。地球科学、11、1―12。

大阪府立八尾高校科学部（1980）「信貴山周辺の岩脈群」。Nature study、26、9―11。



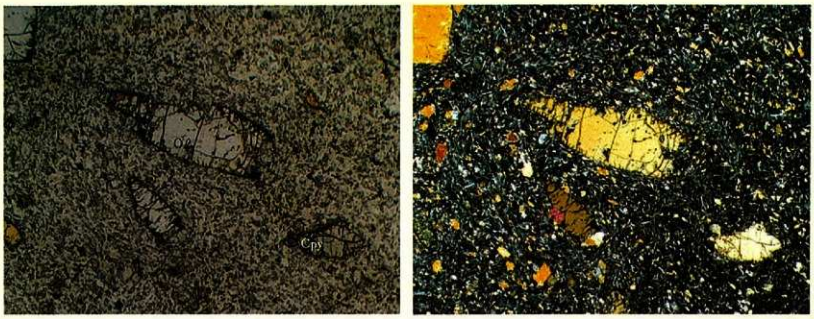
第1図　二上山の地質図　(森本良平ほか、1953)



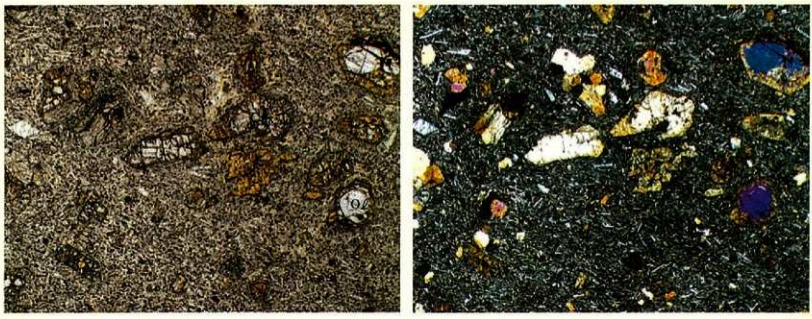


凡 例： A：崖すい性堆積物． B：輝石かんらん石玄武岩． C：角閃石安山岩． D：輝石安山岩．
E：含ざくろ石黒雲母安山岩，点をうってある部分は角礫岩． F：片麻岩類．

第2図 信貴山周辺の火山岩岩類（八尾式高科学図，1980）



A1



A2

A3

岩石の顕微鏡写真(1)

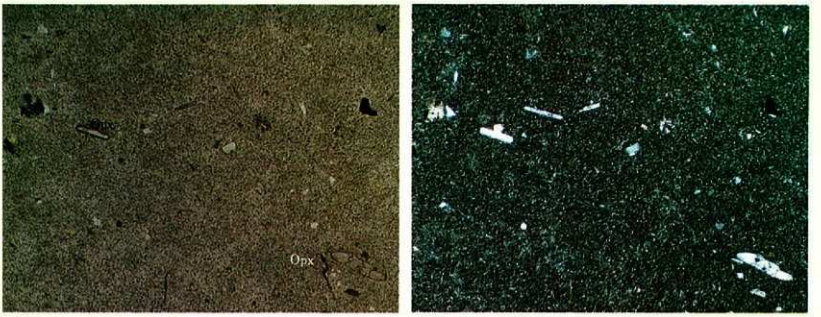
A1、A2、A3の開放ニコル写真(左)とクロスニコル写真(右)

スケールはすべて同じで右下端に示す。

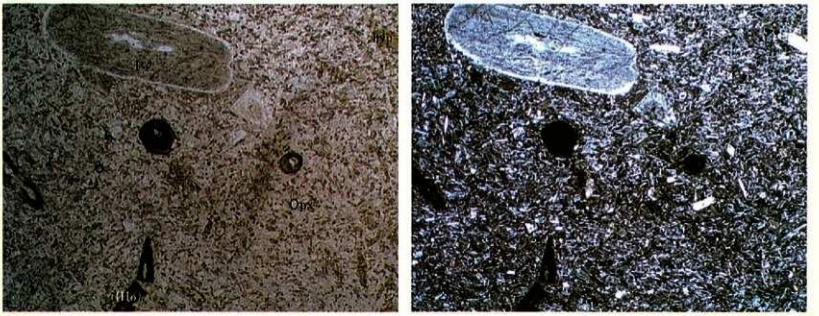
2mm

Ol：かんらん石　　Cpx：単斜輝石　　Opx：斜方輝石

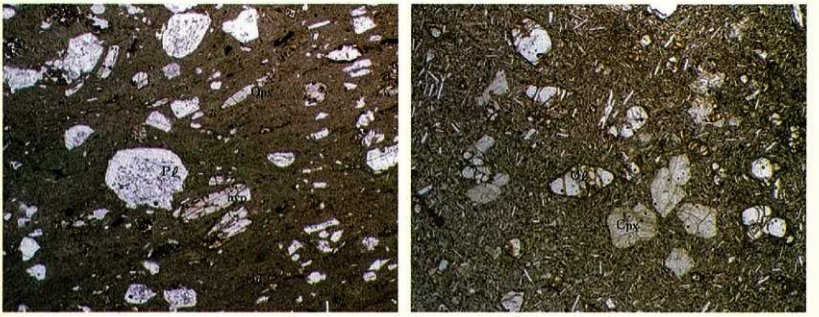
図版 2



B



C



畑火山岩　　信貴山頂上の岩脈

岩石の顕微鏡写真(2)
ＢＣの開放ニコル写真(左)とクロスニコル写真(右)
スケールはすべて同じで右下端に示す。

2 mm

Ol：かんらん石　　Cl：粘土鉱物　　Opx：斜方輝石　　Pl：斜長石　　Bi：黒雲母

Ⅱ　大堀遺跡出土植物遺体について

山　口　誠　治

1.　はじめに

今回の調査で出土した植物遺体（種子）について同定を試みたので、ここに報告する。

同定を試みた植物遺体は、溝A－2（古墳時代後期、6世紀後半）の中央部断面、東西側壁より各3ヶ所、井戸A－2（奈良時代後半）内土壌を採取し、水洗いして試料とした。出土した植物遺体は、遺跡の古環境を示すものであり、重要な試料と考えられる。溝A－2より各3ヶ所採取したのは、一部分のみの採取では全体を把握できるものではないからであり、3ヶ所の総合的な同定結果をもとにして評価した。井戸A－2については、発掘面積がせまく1ヶ所のみしか採取できなかった。

尚、同定に関しては、現在の植物の果実や種子の標本との比較により、分類形態的・生態的性質に一致することで慎重に判断した。

2.　同定結果

採取方法は、溝A－2・中央部断面の褐色（7.5YR⅓）細砂層、暗紫灰色（5P⅓）粘土層、暗青灰色（5PG⅓）粘土層、各層より8ℓの土壌を採取した。同様に溝A－2の東西側壁の褐色細砂層・暗紫灰色粘土層・暗青灰色粘土層、各層より8ℓ、合計72ℓの土壌を採取した。井戸A－2においては、暗灰色（N⅓）粘土層より1ℓの土壌を採取した。採取した土壌は、過酸化水素水に浸し土壌をほぐした後、水洗いして植物遺体を検出した。

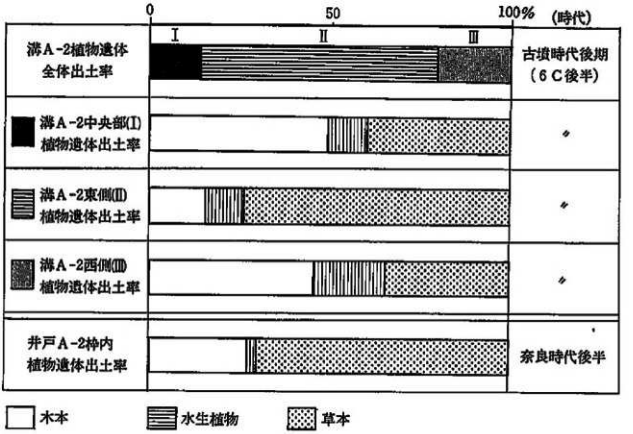
同定結果は、各地点各層位ごとにまとめて表1、表2に示した。同定した種子は31科21属27種である。

出土した種子で木本（Arbor）は、マツ、ヤマグワ、コナラ、ハンノキ、キイチゴ属、バラ属、サクラ属、スモモ、ウメ、モモ、フジ属、クスノキ、サンショウ、イヌザンショウ、カエデ属、トチノキ、クラノキ、ガマズミ属を同定した。溝に関連する水生植物（Hydrophyte）は、ミクリ、トリゲモ、オモダカ、ホタルイ、ウキヤガラ、ハリイ属を同定した。この水生植物のうち挺水生植物（Emerged plant・水深約1m以内）は、ミクリ・オモダカ・ホタルイ・ウキヤガラ・ハリイである。沈水植物（Submerged plant・水深約3m以内）は、トリゲモである。又、水を好む湿性植物（Hygrophyte）は、スゲ属、ミゾソバ、ハンノキ属、イボクサ、ゴキズル、イシミカワを同定した。

草本（Herb）としては、エノコログサ、ギシギシ属、アカザ属、アオツヅラフジ、カタバミ、エノキグサ、ヤブジラミ、コナスビ、シソ属、マクワウリの仲間、ヒョウタン、メナモミ、タカサブロウを同定した。同定した種子のうち食用植物は、イネ、ヤマグワ、キイチゴ属、サクラ属、スモモ、ウメ、モモ、サンショウ、トチノキ、ブドウ属、シソ属、ナス属、ガマズミ属、マクワ

ウリの仲間、ヒヨウタンが考えられる。

なお、出土した種子の比率を見るために、各地点別および溝A－2全体での各地点の出土率を図3に示した。各地点での出土率の区別として木本・水生植物・草本の出土率を示した。



第3図　溝A－2、井戸A－2植物遺体出土率

出土率は、各地点での総出土種子数を調べ、木本・水生植物・草本の出土種子数を総出土数でわって出た商を百分率で表わした。

図3より溝A－2全体での種子出土率は、東側壁断面が一番多く全体の66%、次に西側壁断面で20%、更に中央部断面が14%である。なお、各断面での植物分類上おおまかに分けた比率では、溝A－2中央部断面の木本が総種子出土数の50%をしめ、草本が36%、水生植物が11%である。東側壁断面では木本16%、草本73%、水生植物11%である。西側壁断面では木本46%、草本34%、水生植物20%である。井戸A－2枠内での植物分類上の比率は、木本が28%、草本が70%、水生植物が2%である。以上が同定結果である。

3. まとめ

同定結果から明らかなように溝A－2においては、水生植物の種子が出土したことにより、溝であったことをこの遺構は忠実に表わしている。また、栽培植物 (Cultivated plant) であるイネ・モモ・ウメ・マクワウリの仲間・ヒヨウタンが出土していること、および人里植物 (Ruderal) であるミゾソバ・サナエタデ・カタバミ・タカサブロウ等が出土していることにより、この溝A－2付近には住居があったと考えられると同時に、竪穴住居の遺構検出の実証に役立つもの

と考える。井戸A－2においては、水生植物は付近からの混入か、使用されなくなった後に水がたまったところへ植生したものか判明しない。しかし、奈良時代以降、この井戸が使用されなくなり、雑草がはびこりだしたものか、草木が多いようである。また、井戸が機能していた実証としては、炭化米が出土した点である。

さて、今回の同定結果のように植物遺体の価値は、古環境の小地域的特性の解釈にある。また、これら植物遺体は、嫌気性状況下にある溝・井戸などの植物遺体の良好な保存の好適な条件を作りあげている。この植物遺体によって遺跡の古環境変化を復元できるものであり、重要な遺体となりうる。また、解釈に際してはこれら植物遺体が、第1に遺構の上か、第2に堆積物の中かというような位置を明確にすること、その意味することによって、植物遺体が遺跡の植生に固有のものであるのか、人間によって持ち込まれたものであるのか、評価がちがってくるのである。ゆえに、植物遺体採取に関しては、発掘当初からの正確な記録が同定する場合にも重要な鍵をにぎるものと考える。

以上、種子の同定に関して終始ご教示下さった大阪市立大学　粉川昭平教授に感謝の意をあらわす次第である。

〔参考文献〕

1）大井次三郎著：「新日本植物誌　顕花編」　至文堂（1983）
2）牧野富太郎著：「牧野新日本植物図鑑」　北隆館（1982）
3）大滝末男・石戸忠共著：「日本水生植物図鑑」　北隆館（1980）

第1表　溝A－2、井戸A－2　同定植物遺体一覧

分類	科名	属・種名(学名)	出土部位	溝A－2(I) ① 水洗篩別 ℓ1.5mφ	溝A－2(I) ② 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(I) ③ 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(II) ① 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(II) ② 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(II) ③ 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(III) ① 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(III) ② 水洗篩別 ℓ1.0mφ	溝A－2(III) ③ 水洗篩別 ℓ1.0mφ	井戸A－2枠内 暗灰色(N3/)粘土層 水洗篩別(1ℓ 1.0mm中)
菌類				2									
裸子植物	マツ科 (Pinaceae)	マツ属 (*Pinus sp.*)	皮目のある樹皮										10
被子植物	ミクリ科 (Sparganiaceae)	ミクリ属 (*Sparganium sp.*)	種子						1				
	イバラモ科 (Najadaceae)	トリゲモ属 (*Najas sp.*)	種子					1					
	オモダカ科 (Alismataceae)	オモダカ属 (*Sagittaria sp.*)	桿炭化米						1		1		
	イネ科 (Gramineae)	イネ (*Oryza sativa*)	穎			1							3
		エノコログサ (*Setaria viridis*)	種子		1	1	1	2	1				7
	カヤツリグサ科 (Cyperaceae)	ホタルイ属 (*Scirpus spp.*)	種子	2			4	6	9				4
		ウキヤガラ? (*Scirpus fluviatilis*)	種子			1							
		スゲ属 (*Carex sp.*)	種子			4	2	2	2		10	1	
		ハリイ属? (*Eleocharis sp.*)	種子								1		
	ツユクサ科 (Commelinaceae)	イボクサ (*Aneilema keisak*)	雄花序の一部								1		
	カバノキ科 (Betulaceae)	ハンノキ属 (*Alnus sp.*)	果皮片						1				
	ブナ科 (Fagaceae)	コナラ属 (*Quercus sp.*)	葉片						1				
		コナラ (*Lepidobalanus serrata*)	種子			7							
	クワ科 (Moraceae)	ヤマグワ (*Morus bobycis*)	種子			1			4				11
	タデ科 (Polygonaceae)	ギシギシ属 (*Rumex sp.*)	種子			7	3	1	21				
		タデ属 (*Polygonum spp.*)	種子			10	5	5	38	1	6	3	48＋2 (花被片)
		ミゾソバ (*Polygonum thunbergii*)	種子					2					
		イシミカワ (*Polygonum perfoliatum*)	種子							3			
		サナエタデ (*Polygonum scabrum*)	種子				1		2				
	アカザ科 (Chenopodiaceae)	アカザ属 (*Chenopodium sp.*)	種子		5	4	4	1	25	1	2	1	11
	ナデシコ科 (Caryophyllaceae)		種子						6				10
	ツヅラフジ科 (Menispermaceae)	アオツヅラフジ (*Cocculus trilobus*)	種子		1								
	クスノキ科 (Lauraceae)	クスノキ (*Cinnamomum camphora*)	種子 落枝?								1		1
	バラ科 (Rosaceae)	キイチゴ属 (*Rubus sp.*)	種子			2			5		2		
		バラ属 (*Rosa sp.*)	刺茎針							2	1		4
		サクラ属 (*Prunus sp.*)	核片						1				
		スモモ (*Prunus salicina*)	核					1	3		1		
		ウメ (*Prunus mume*)	核			1							
		モモ (*Prunus persica*)	核片			4							

第2表　溝A－2、井戸A－2　同定植物遺体一覧

分類	科名	属・種名(学名)	出土部位	溝A－2(Ⅰ) ①	溝A－2(Ⅰ) ②	溝A－2(Ⅰ) ③	溝A－2(Ⅱ) ①	溝A－2(Ⅱ) ②	溝A－2(Ⅱ) ③	溝A－2(Ⅲ) ①	溝A－2(Ⅲ) ②	溝A－2(Ⅲ) ③	井戸A－2 神内 暗灰色(N3/)粘土層 水洗篩別(1ℓ 1.0mm中)
被子植物	マメ科 (Leguminosae)	フジ属 (*Wisteria sp.*)	越冬芽 葉柄の根元			13	6 種2	4	10		9		16 2
	カタバミ科 (Oxalidaceae)	カタバミ (*Oxalis corniculata*)	種子		1			1					
	ミカン科 (Rutaceae)	サンショウ (*Zanthoxylum piperitum*)	種子 刺						2 2				
		イヌザンショウ (*Zanthoxylum schinifolum*)	種子 刺	2	6	1	7	1		5	19 2		
	トウダイグサ科 (Euphorbiaceae)	エノキグサ (*Acalypha australis*)	種子				2	1					28
	カエデ科 (Aceraceae)	カエデ属？ (*Acer sp.*)	種子					1					
	トチノキ科 (Hippocastanaceae)	トチノキ (*Aesculus turbinata*)	幼果？					1					
	ブドウ科 (Vitidaceae)	ブドウ属 (*Vitis sp.*)	種子								2		
		ノブドウ (*Ampelopsis brevipedunculata*)	種子				1					1	
	ウコギ科 (Araliaceae)	タラノキ (*Aralia elata*)	刺										1
	セリ科 (Umbelliferae)	ヤブジラミ (*Torilis japonica*)	種子			1							1 (種名不明)
	サクラソウ科 (Primulaceae)	コナスビ (*Lysimachia japonica*)	種子					1					
	シソ科 (Labiatae)	シソ属 (*Perilla sp.*)	種子	1				1	2		1		2
	ナス科 (Solanaceae)	ナス属 (*Solanum sp.*)	種子			2	2		2		1	1	1
	スイカズラ科 (Caprifoliaceae)	ガマズミ属 (*Viburnum sp.*)	種子								2		
	ウリ科 (Cucurbitaceae)	ゴキヅル (*Actinostemma labatum*)	種子片						2				
		マクワウリの仲間 (*Cucumis melo*)	種子	1	2	16	2	1	72		1	6	
		ヒョウタン (*Lagenaria leucantha*)	種子			1							
	キク科 (Compositae)	メナモミ (*Siegesbeckia pubescens*)	種子			1							
		タカサブロウ (*Eclipta prostrata*)	種子								1		1
昆虫			翅									3	1

溝A－2(Ⅰ)：中央部断面　　① 褐色(7.5YR4/)細砂層

溝A－2(Ⅱ)：東側壁断面　　② 暗紫灰色(5P4/)粘土層

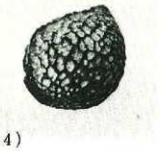
溝A－2(Ⅲ)：西側壁断面　　③ 暗青灰色(5BG4/)粘土層

土色に関しては、新版標準土色帖に従った。

図版 3

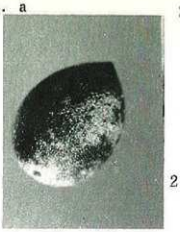
1．a

1．b



1．a，bイヌザンショウ(×4)

2．a



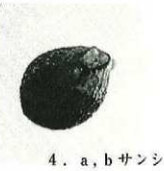
2．b

2．a，bエノキグサ(×12)

3．

3．マクワウリの仲間(×2)

4．a



4．b

4．a，bサンショウ(×4)

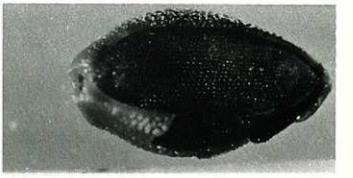
5．

5．コナラ属の果皮(×1)

6．

6．ヤマグワ(×12)

8．



8．エノコログサ(×12)

7．

7．モモの核(×1)
(かじられた痕跡)

9．a

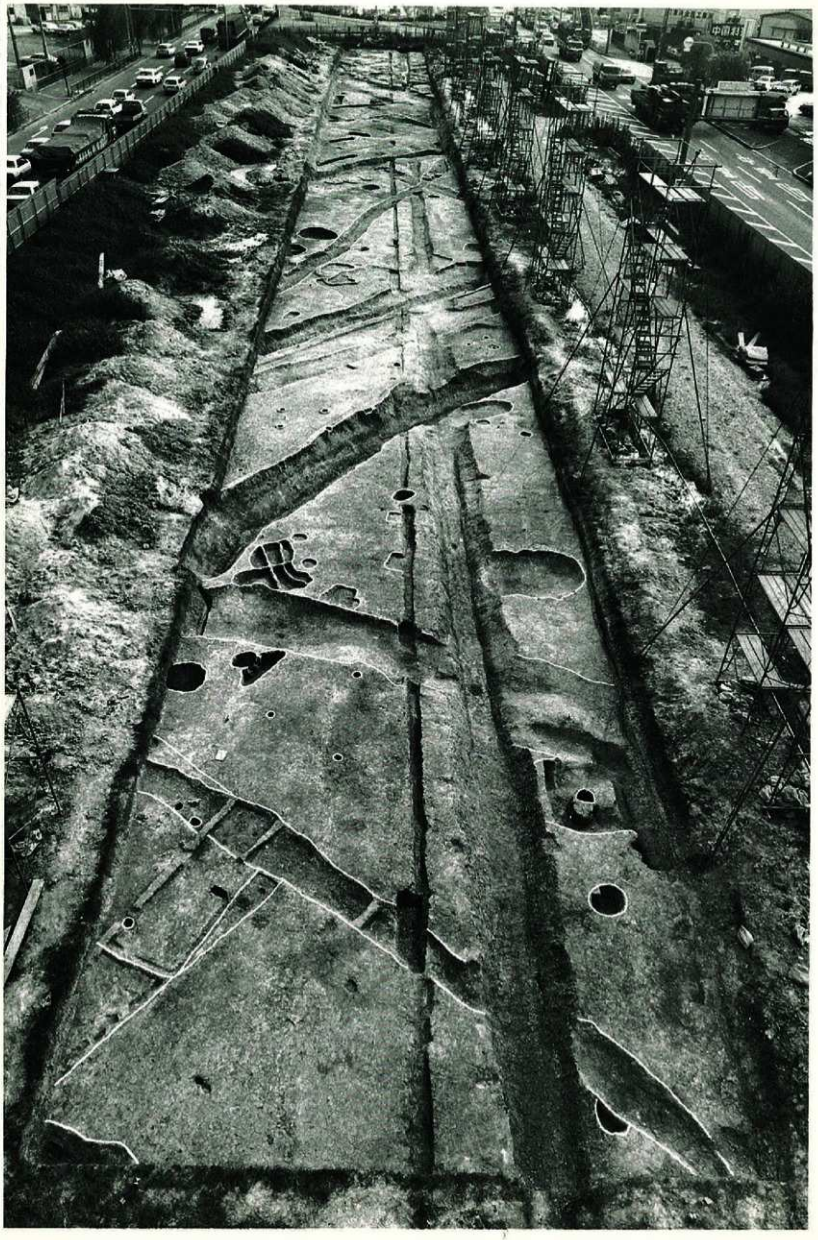
9．b

9．a，bスモモの核(×2)

溝A-2、井戸A-2出土植物遺体

PLATES

図版一　遺構、A調査区、全景

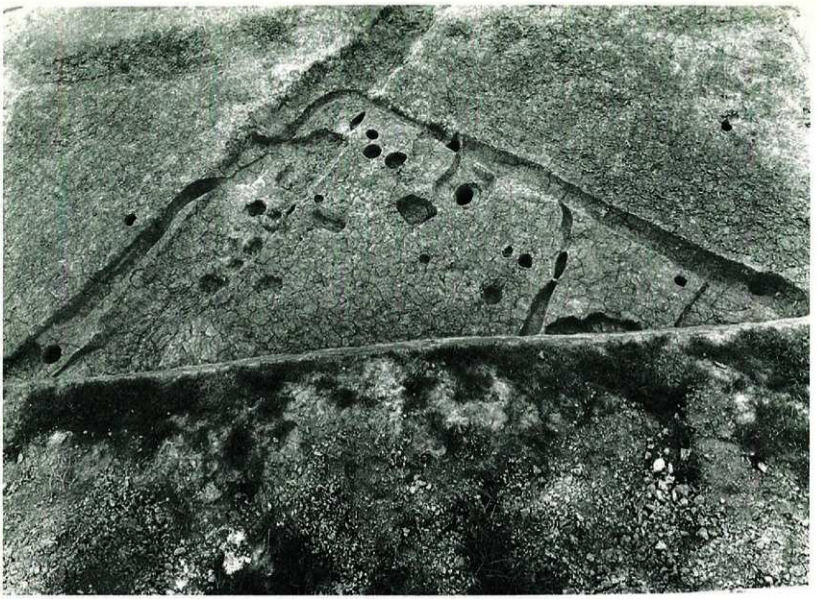


（北東から）

図版三　遺構、A調査区、掘立柱建物

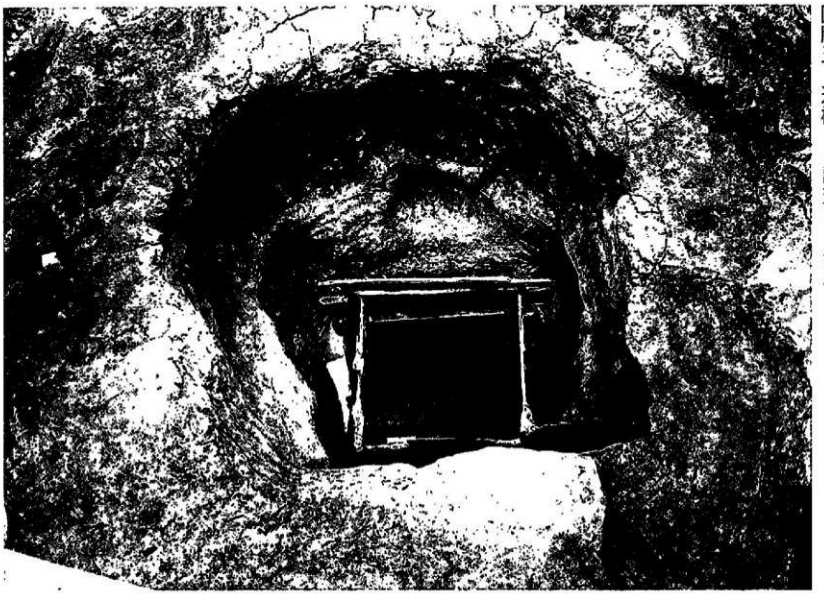
（北から）

図版四　遺構、A調査区、竪穴住居・井戸

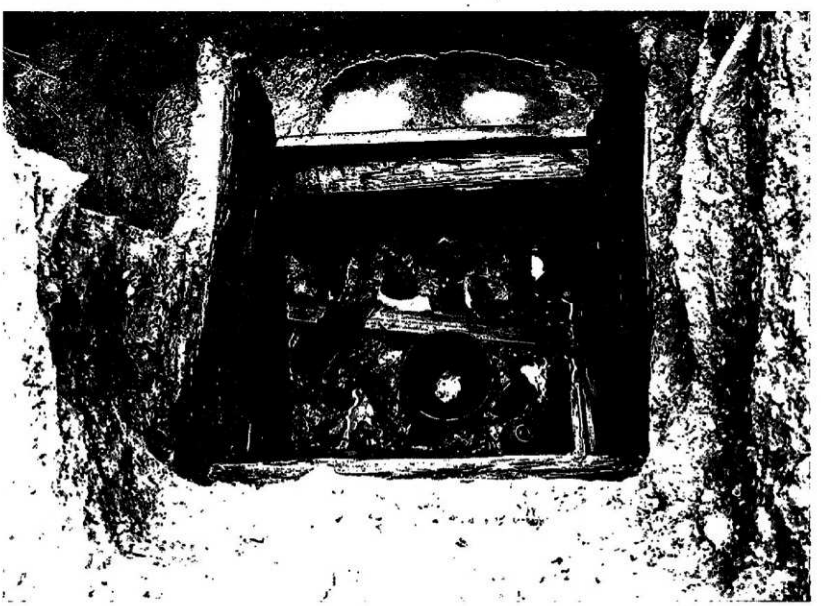


竪穴住居A－1～2（北東から）

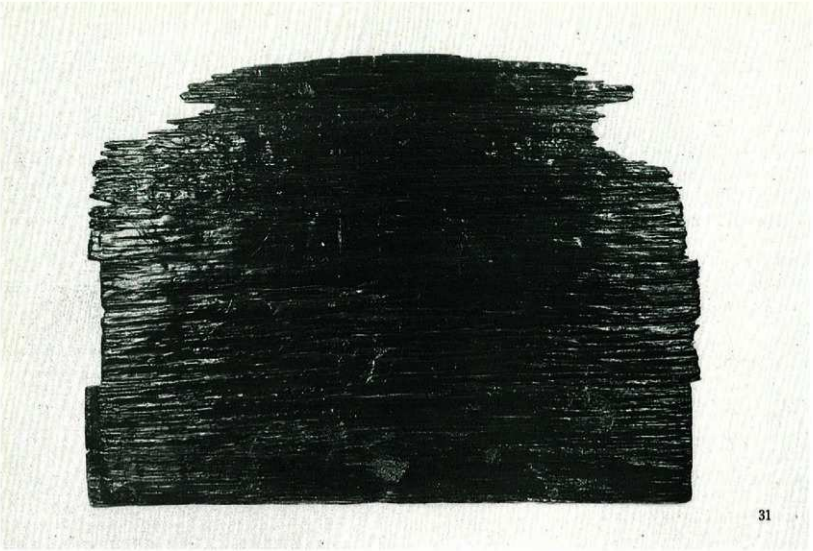
井戸A－1（南西から）



井戸A－2、井戸枠



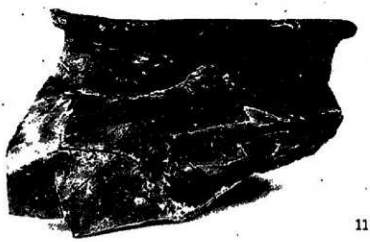
井戸A－2、井戸枠内下層遺物出土状況

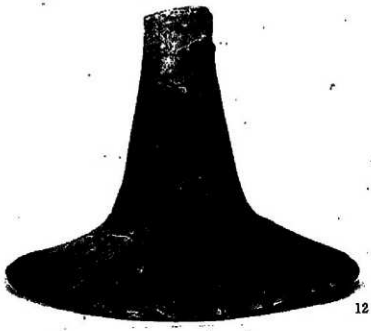


井戸A－2、井戸枠材

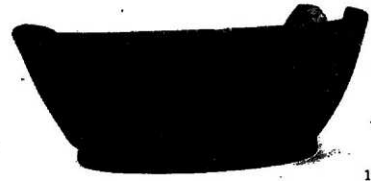
図版七　遺物、A調査区、溝・井戸出土土器


7


11

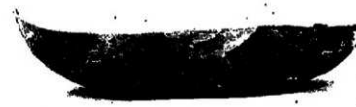

12


3

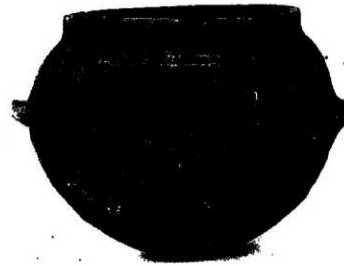

14


16


21

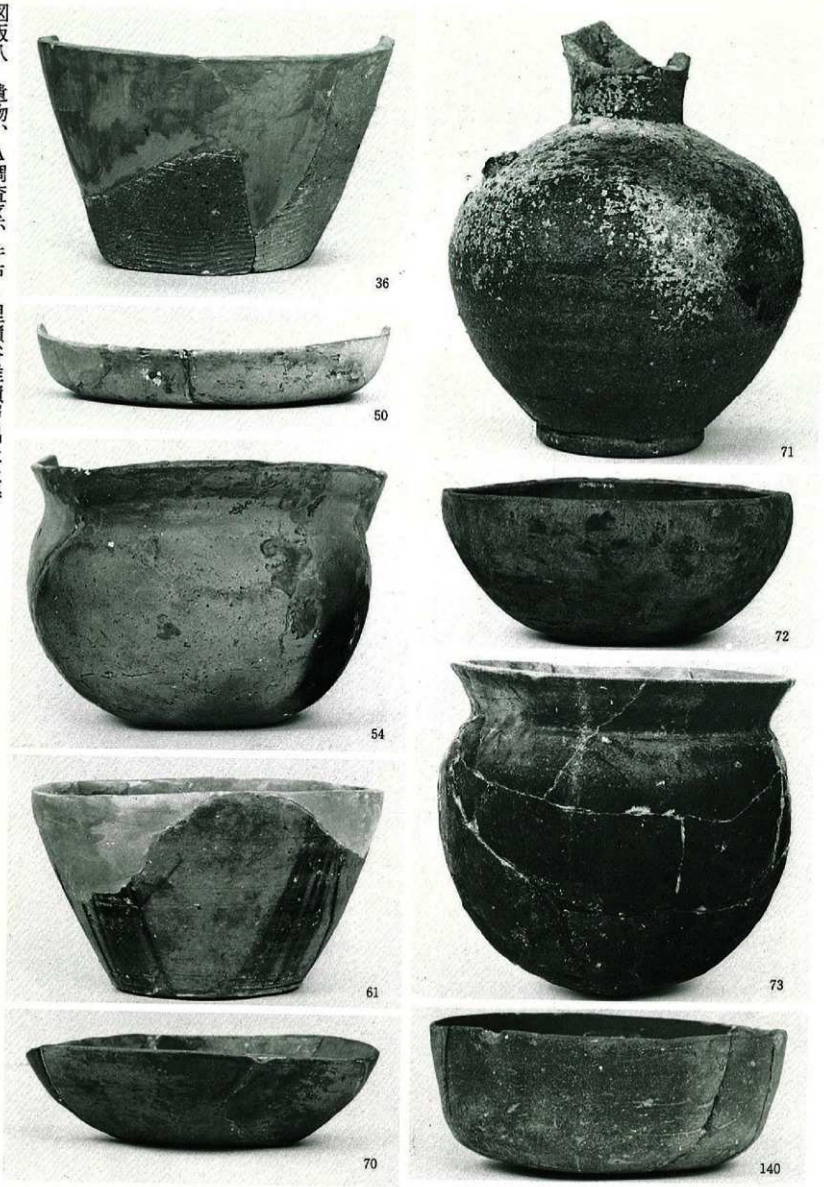

19


26


25

溝A－1（3）、溝A－2（7、11、12）、井戸A－1（14、16、19、21、25、26）

図版八　遺物、A調査区、井戸・埋積谷堆積層出土土器

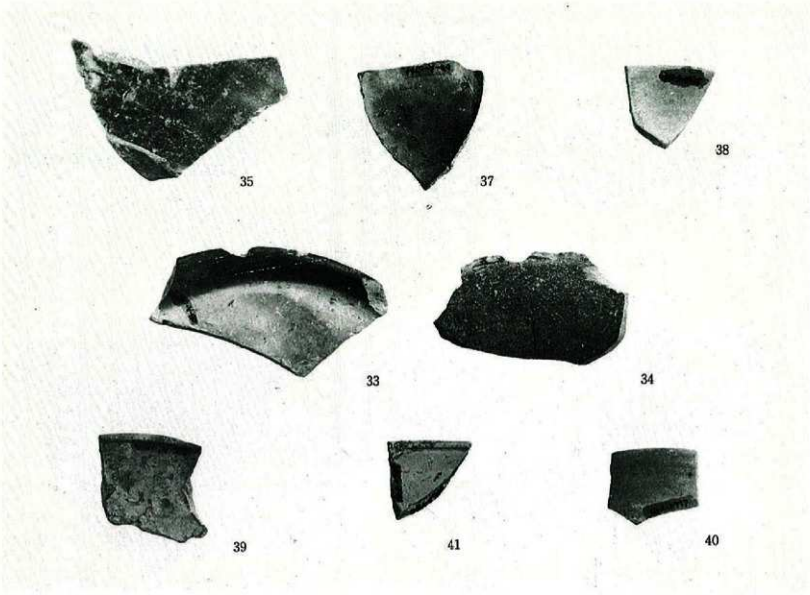


井戸A－2、井戸枠内（36、50、54、61、70～73）、埋積谷堆積層（140）

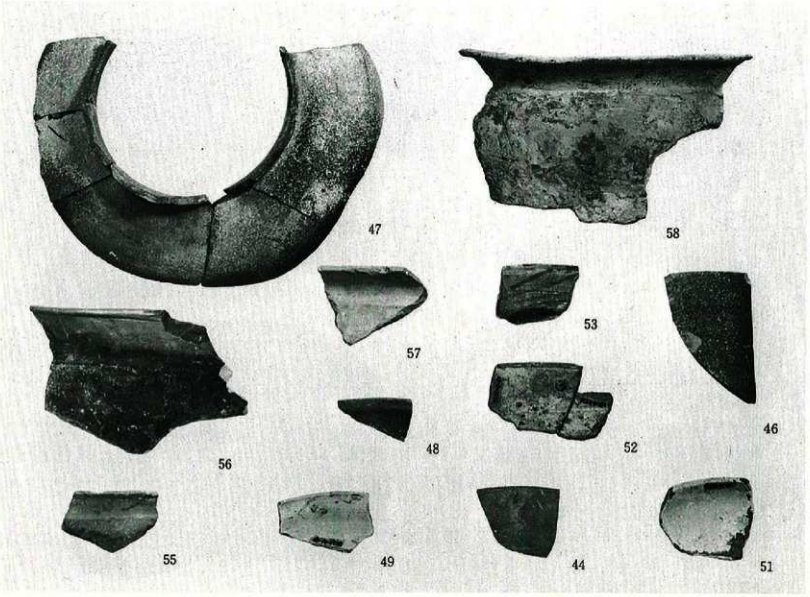
図版九　遺物、A調査区、土坑・埋積谷堆積層出土土器

土坑A－1（103）、土坑A－4（114、123）、埋積谷堆積層（141、142、146、160）

図版一二　遺物、A調査区、井戸出土土器

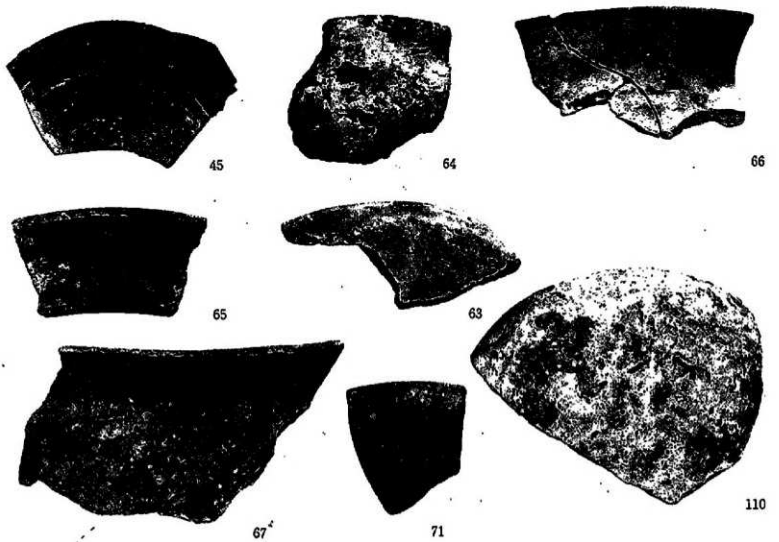


井戸A－2掘方

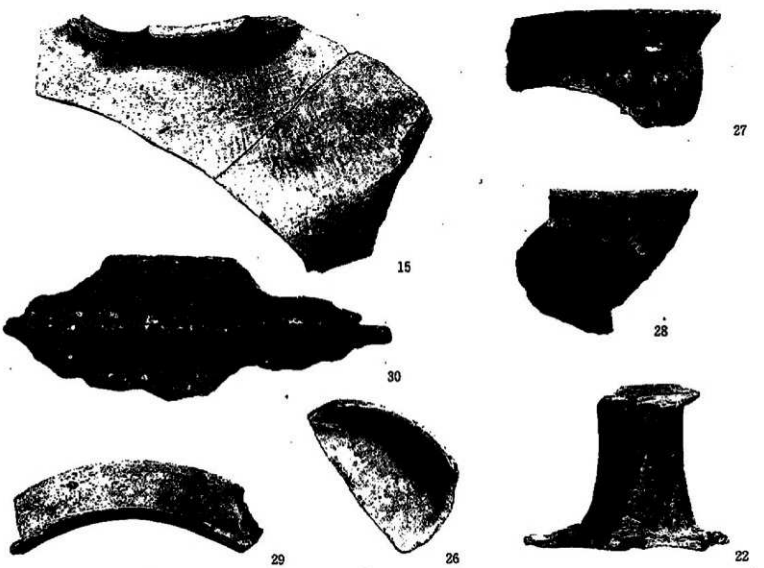


井戸A－2掘方

図版一三　遺物、A調査区、井戸・土坑出土土器

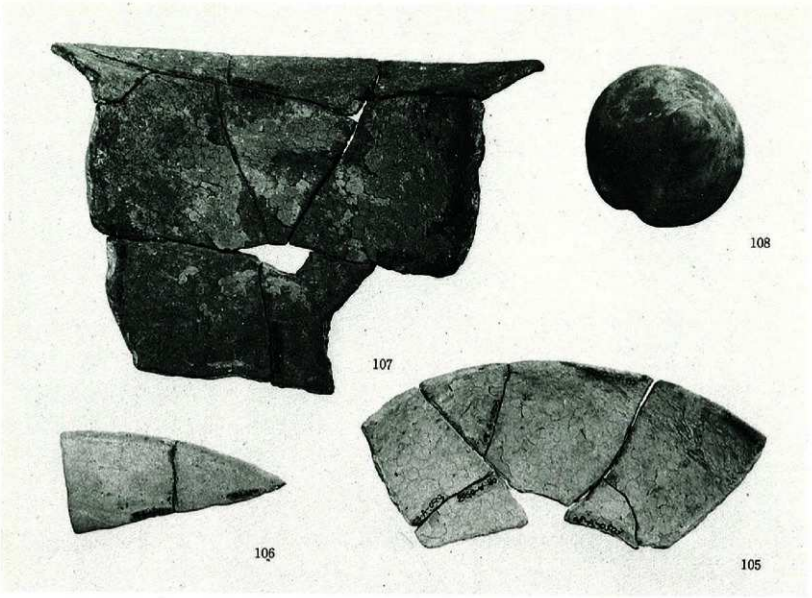


井戸A－2及び土坑A－3（110）

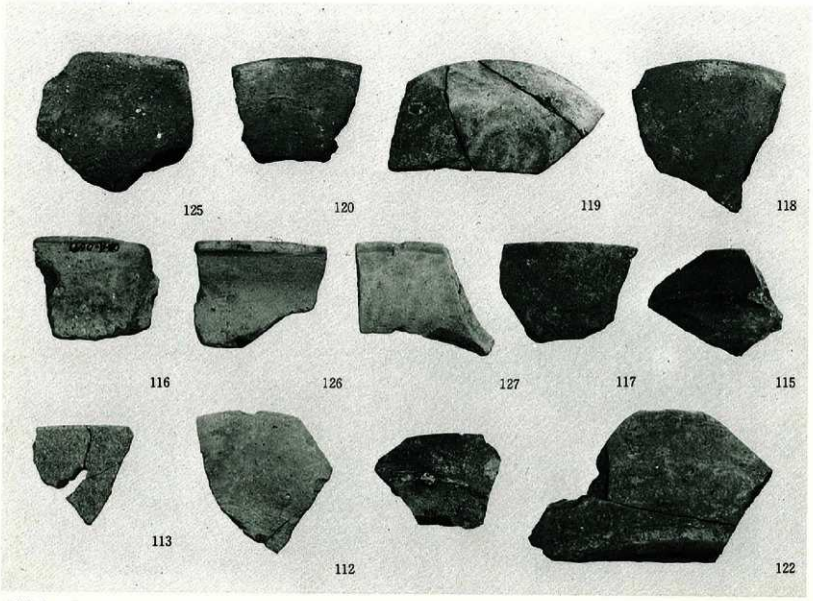


井戸A－1

図版一四　遺物、A調査区、土坑出土土器

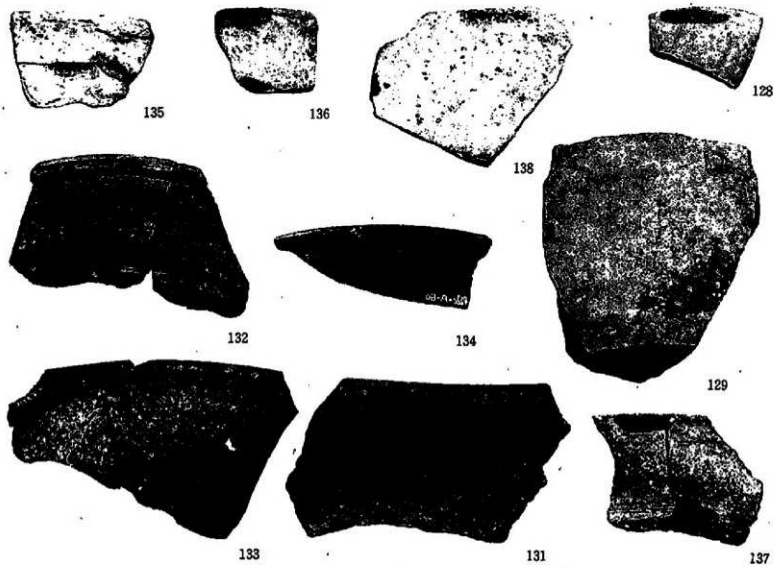


土坑A－1



土坑A－4

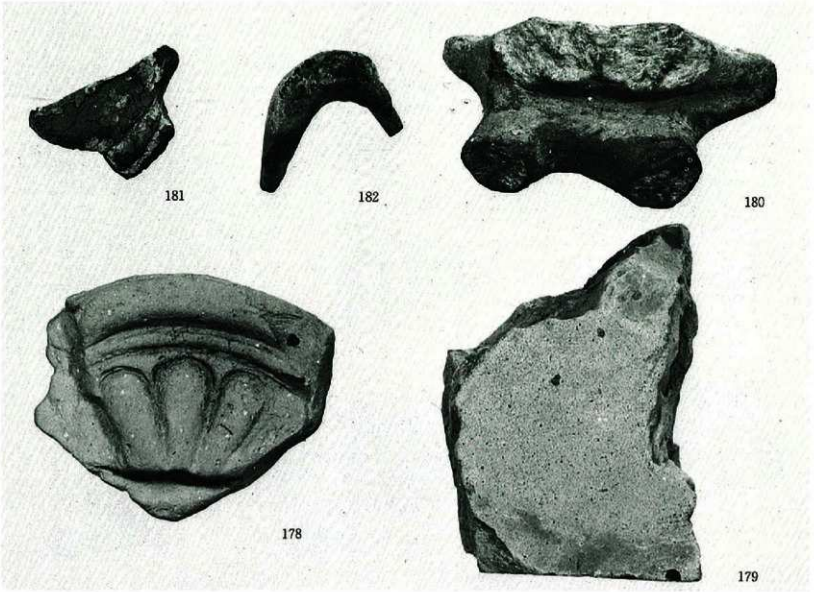
図版一五　遺物、A調査区、土坑・埋積谷堆積層出土土器



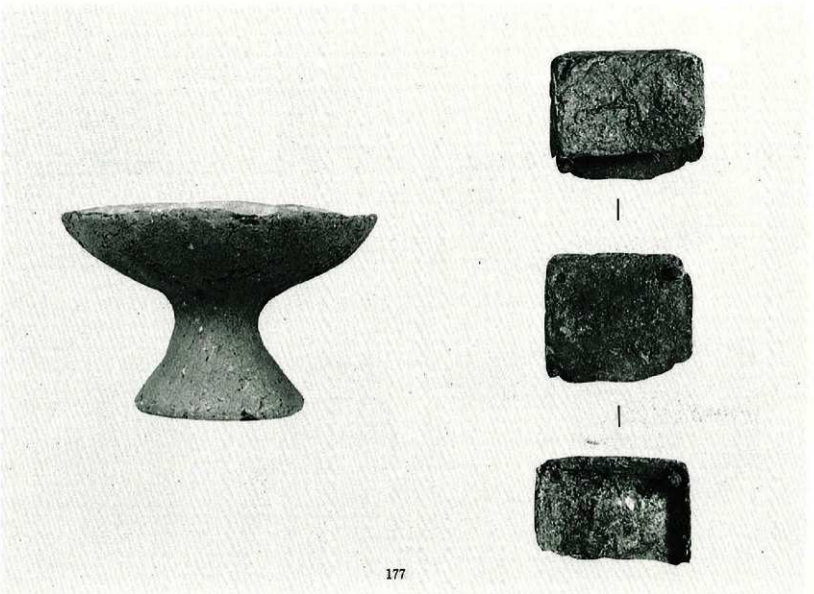
土坑A－5

埋積谷堆積層

図版一六　遺物、A調査区、埋積谷堆積層・Ⅲ・Ⅳ層出土遺物



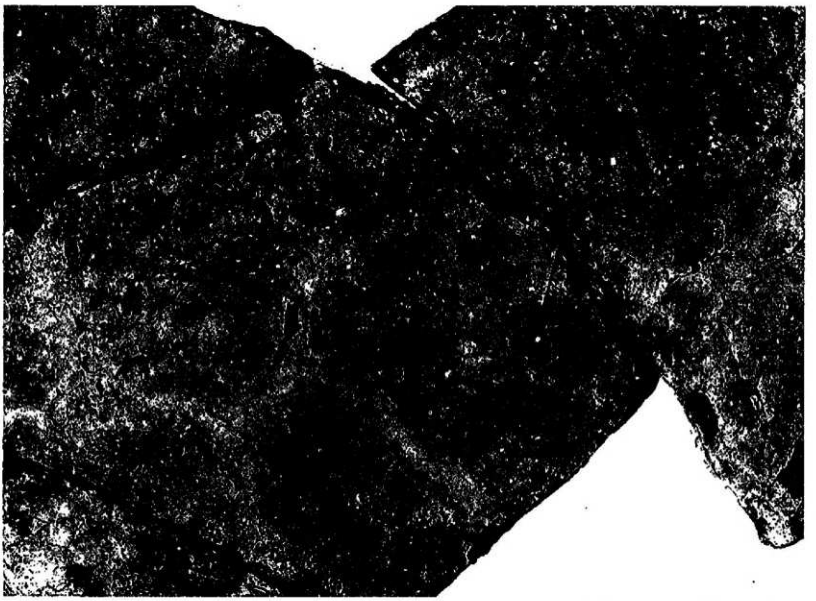
埋積谷堆積層



埋積谷　　Ⅲ・Ⅳ層　帯鍔具（巡方）

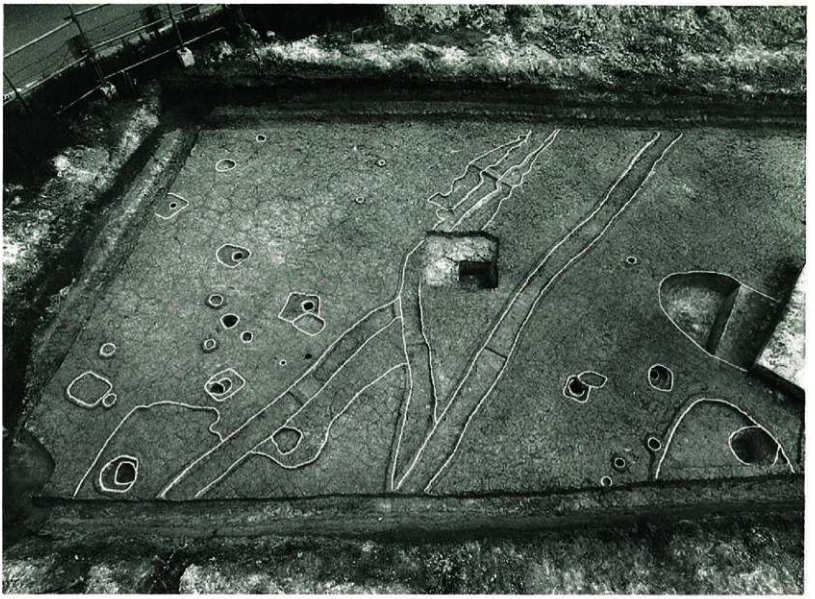
図版一七　遺物、A調査区、井戸・埋積谷堆積層出土土器

埋積谷堆積層



井戸A－1、墨書土器（×2）

図版一八　遺構、B調査区、第二遺構面全景



北半部（西方より）

（南方より）

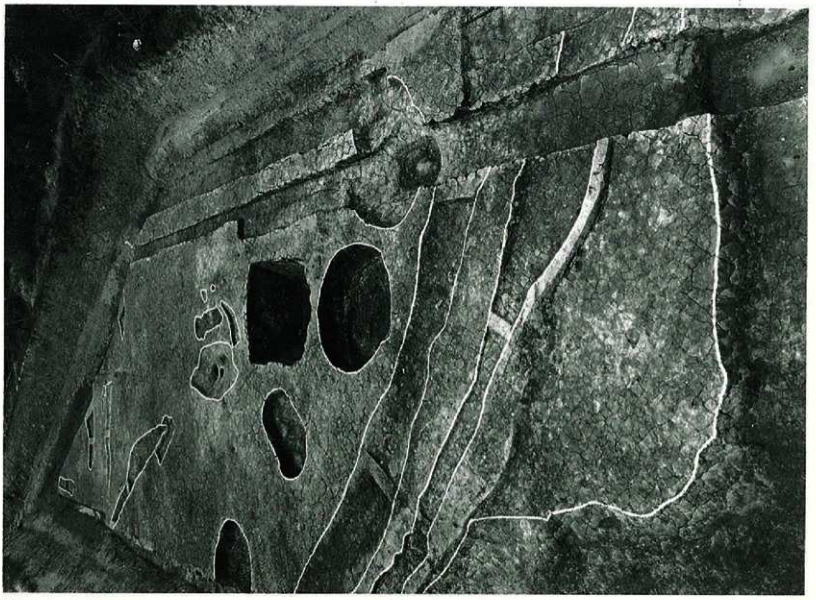
図版一九　遺構、B調査区、各遺構

落ち込みB－7、台付壺出土状況

畦畔状遺構

図版二〇　遺構、C調査区南半部　第二遺構面全景

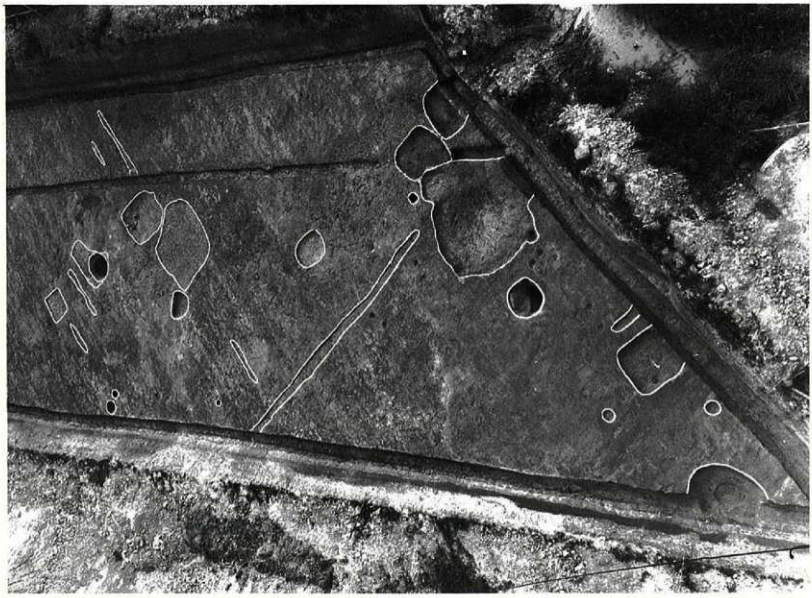
（南方より）



（北方より）

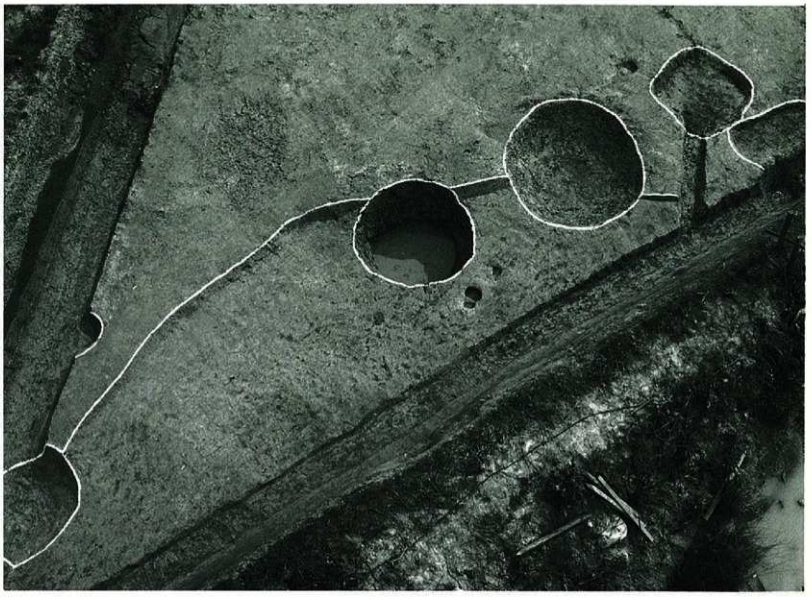
図版二一　遺構、C調査区、各遺構・北半部　第一遺構面全景

溝C－1～2・4～5、井戸C－2、土坑C－13～15

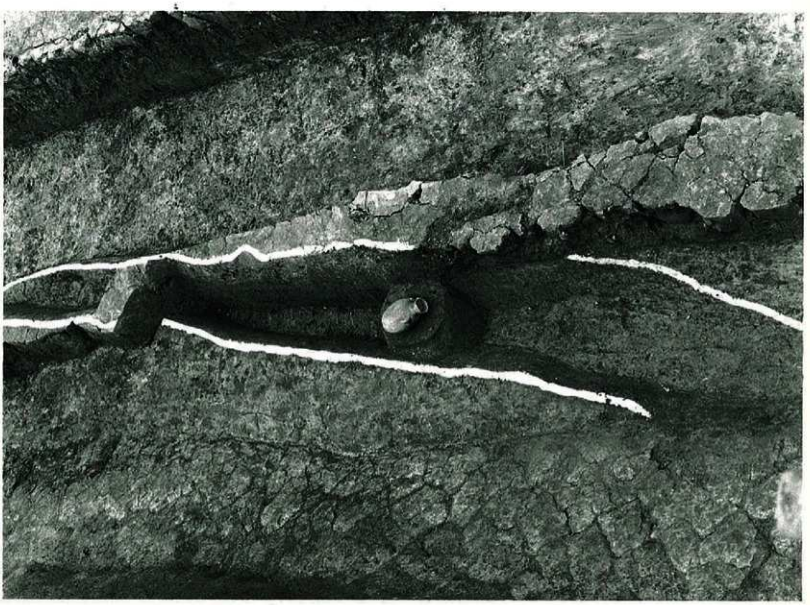


北半部（北方より）

図版一三一　遺構、C調査区、各遺構

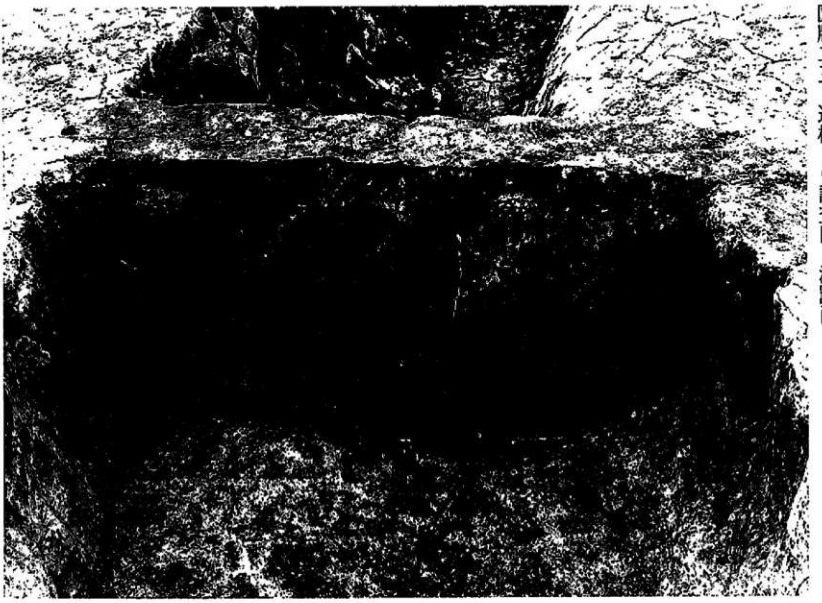


落ち込みCW－1

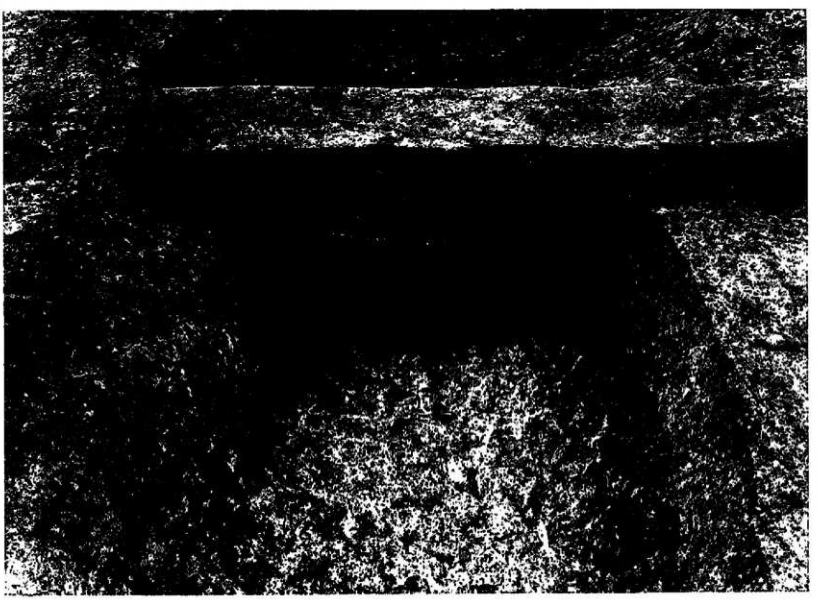


溝C－3、提瓶出土状況

図版二三　遺構、C調査区、溝断面



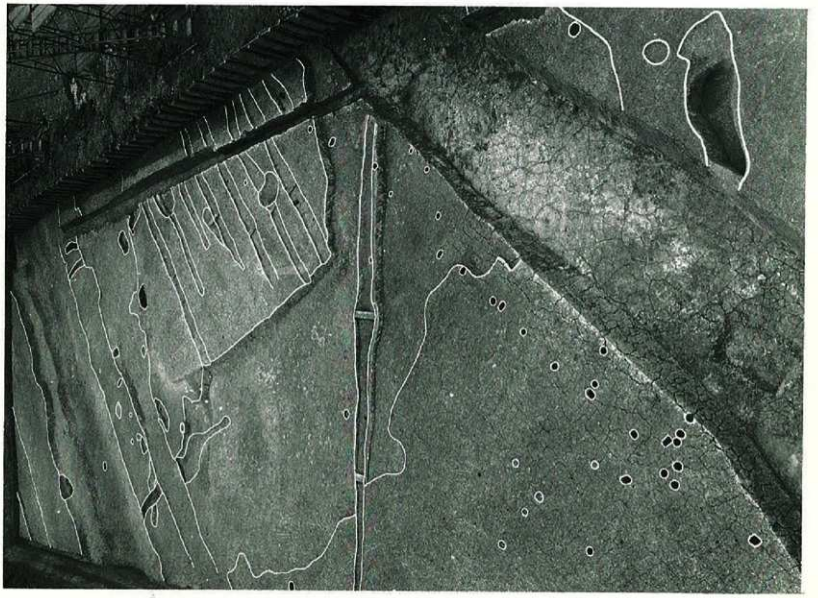
溝C－1、土層断面



溝C－2、土層断面

図版二四　遺構、W調査区、全景

（北方より）



（南方より）

図版二五　遺構、W調査区、各遺構

溝BW－5～7

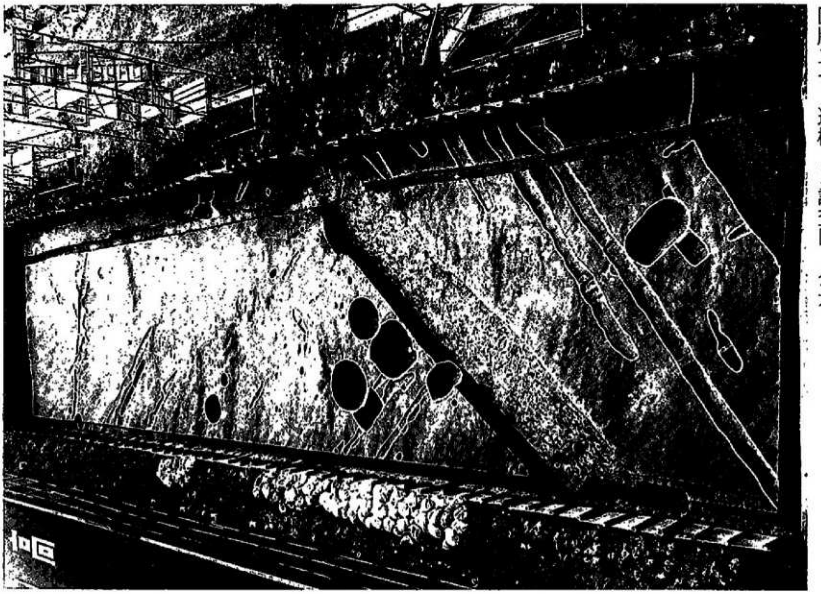
落ち込みCW－1

図版二六　遺構、W調査区、各遺構断面

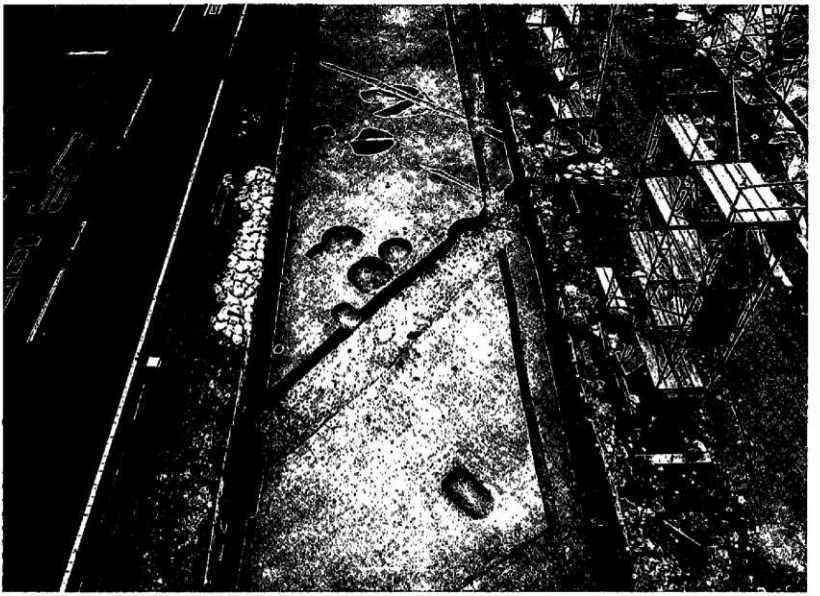
溝BW－6、土層断面

落ち込みCW－1、土層断面

図版二七　遺構、E調査区、全景



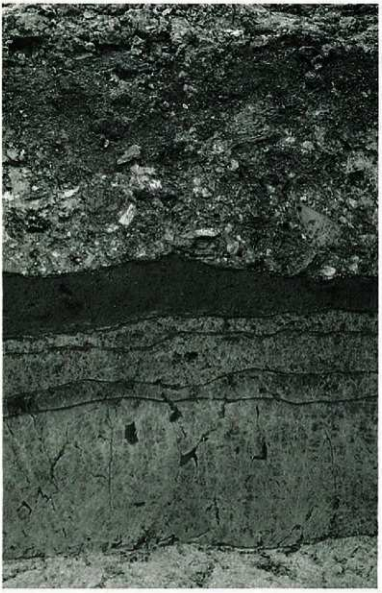
第一遺構面（北より）



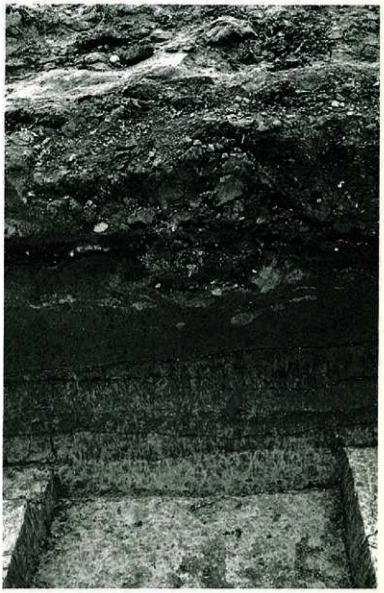
第二遺構面（北より）

図版二八　遺構、E調査区、各遺構・土層断面

土坑E－8、軒丸瓦出土状況



W区南壁土層断面

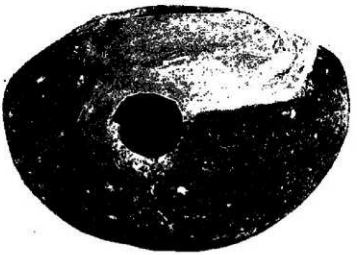


E区南壁土層断面

図版二九　遺物、B・C・W調査区、古墳～平安時代遺構出土土器

7

6



46

22

30

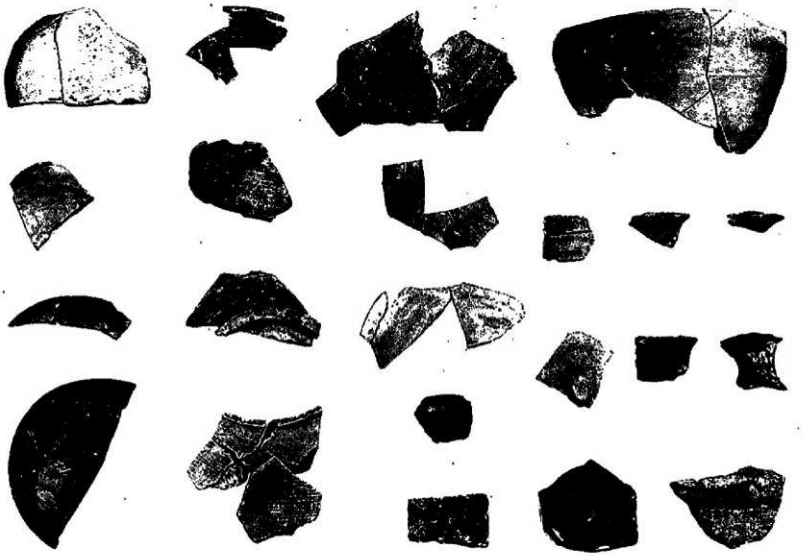
溝C－3（6）、落ち込みB－7（7）、溝BW－6（22・30）、溝C－2（46）

図版三〇　遺物、E調査区、鎌倉～室町時代遺構出土瓦

土坑E－8、梵字文軒丸瓦　約½

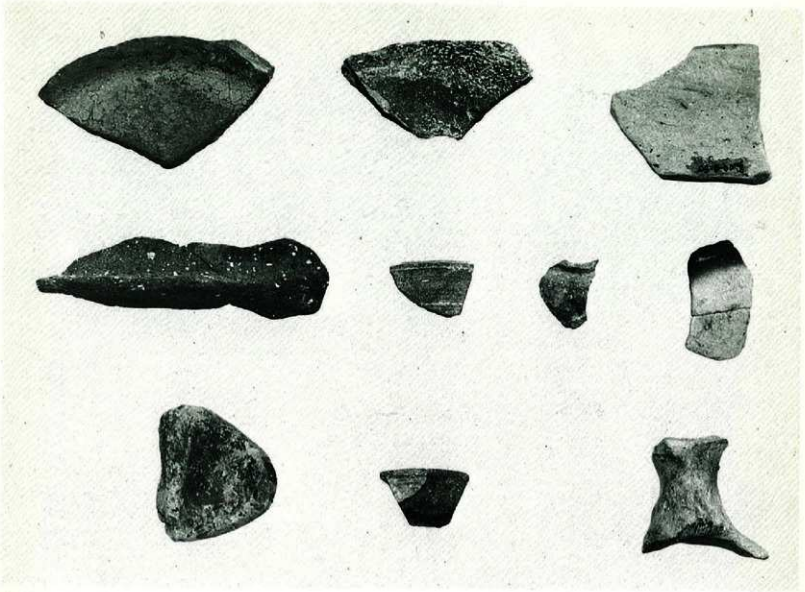
図版三一　遺物、B・W調査区、古墳～奈良時代遺構出土土器

溝BW－7

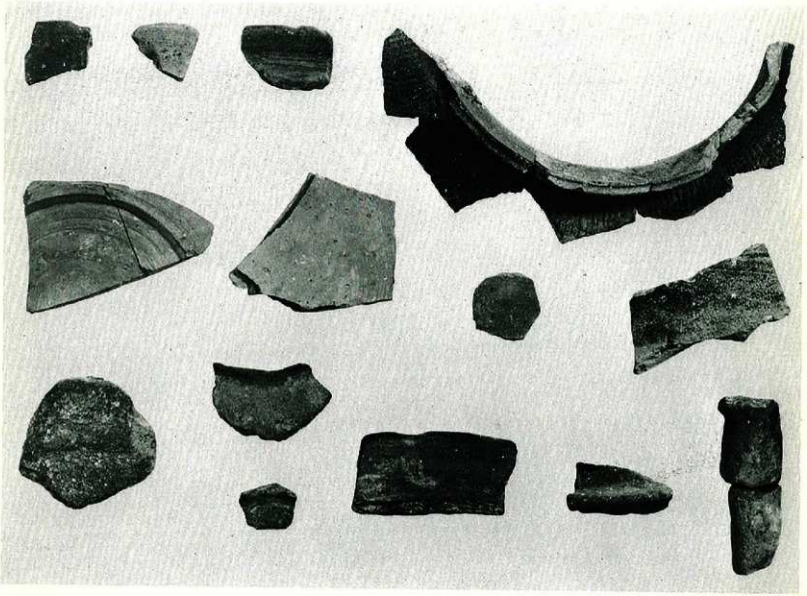


溝BW－6

図版三一　遺物、B・C・W調査区、奈良時代遺構出土土器・土製品



建物B－1、溝B－1～2、落ち込みB－1～2



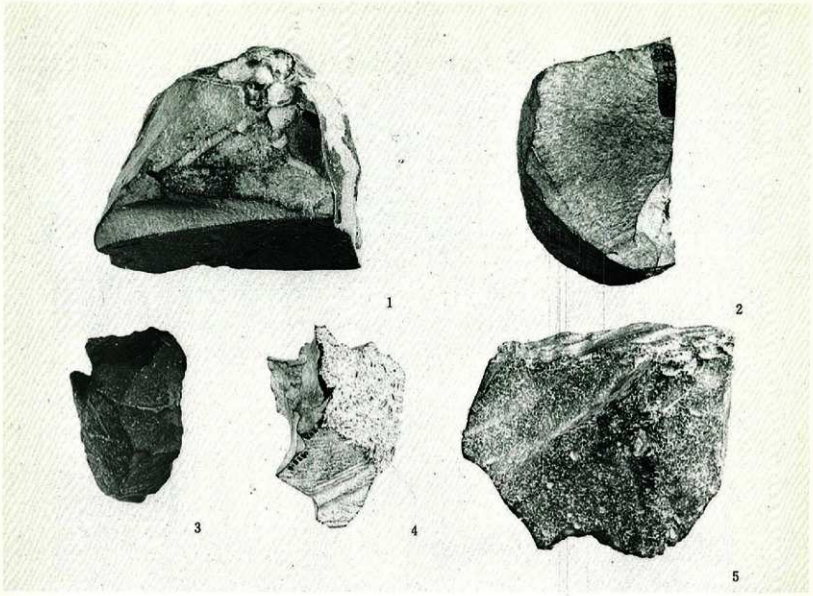
落ち込みCW－1

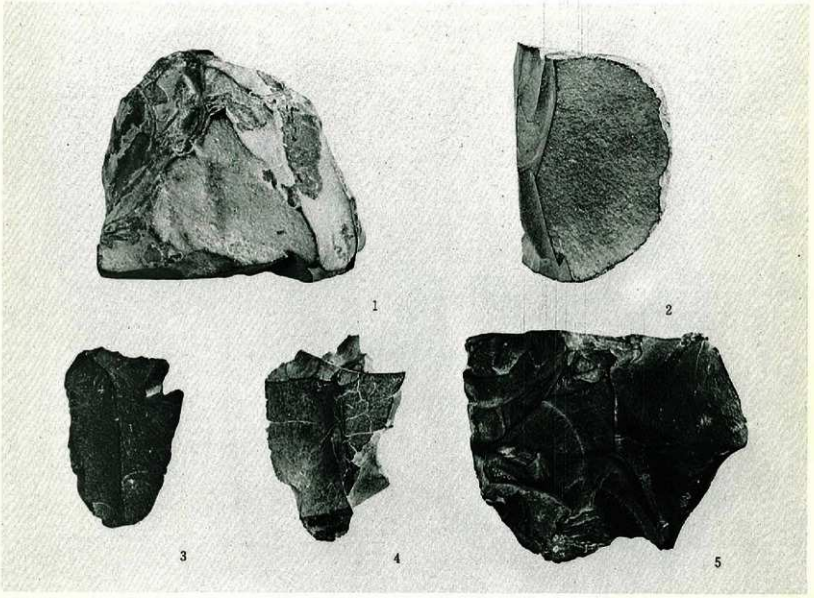
図版三三　遺物、B・C・W調査区、鎌倉～室町時代・江戸時代以降遺構出土土器・瓦

溝C－1～2

土坑C－1、溝BW－5、土坑C－13・15

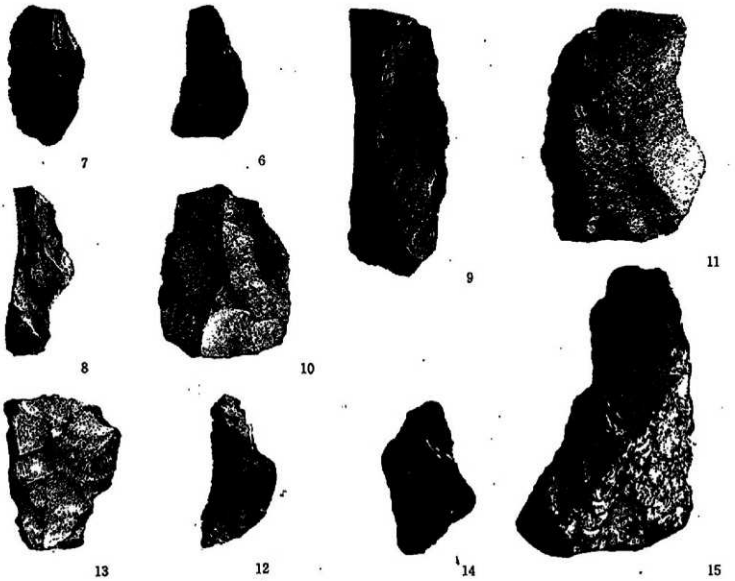
図版三四　遺物、石器（サヌカイト）(1)

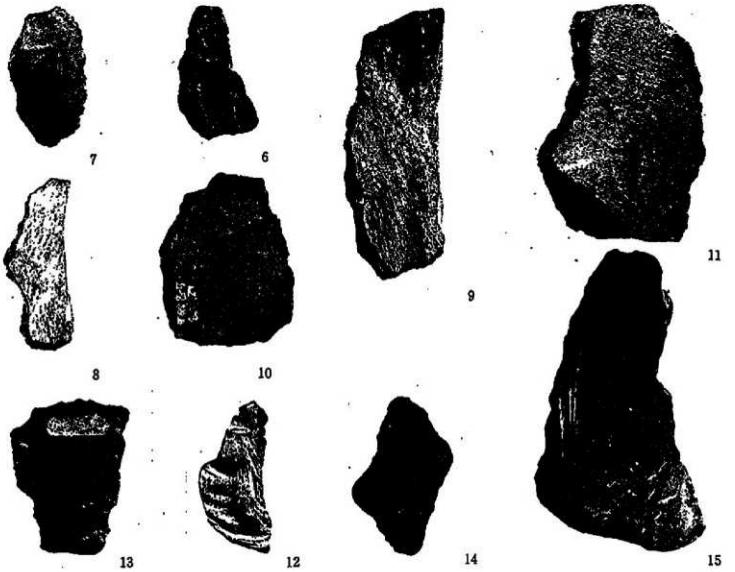




サヌカイト原石（1）、分割礫（2）、石核（3～5）（⅔）（※遺物番号は挿図番号と同じ）

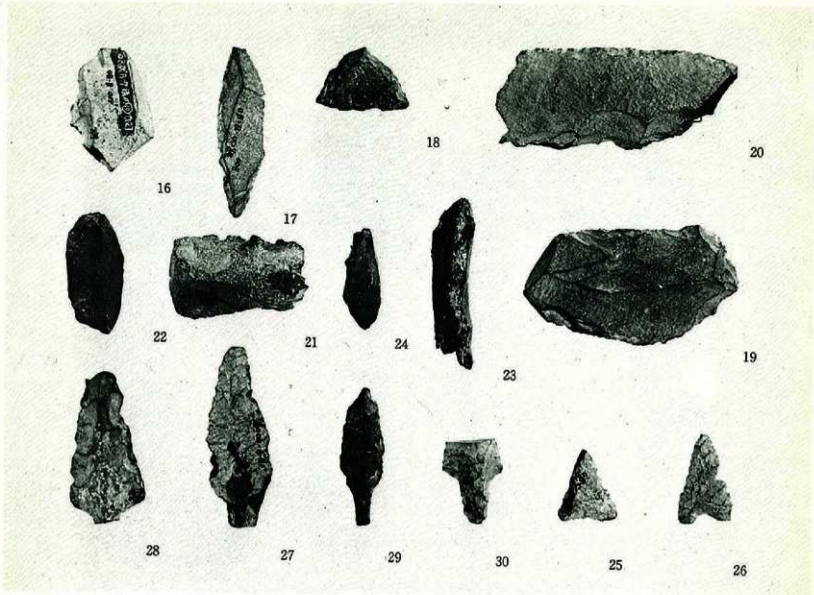
図版三五　遺物、石器（サヌカイト）(2)

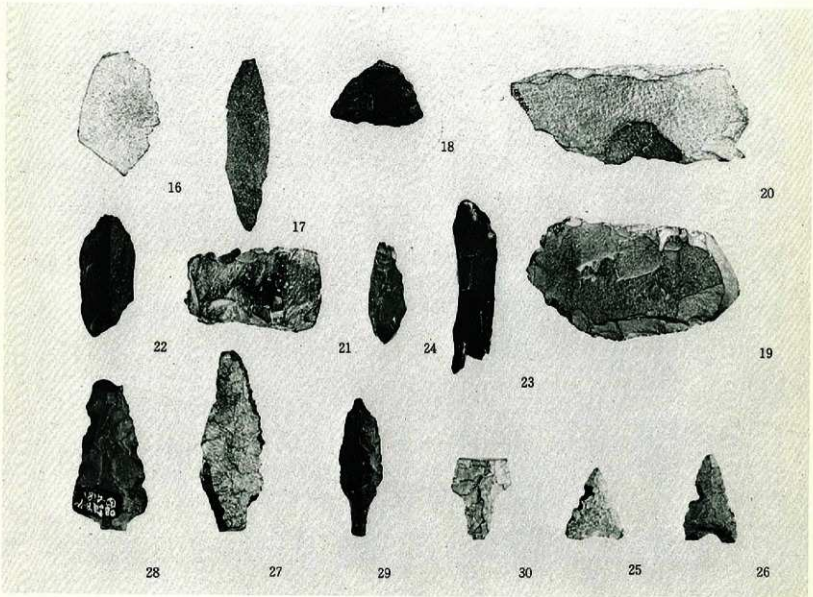




剝片（6～12）、二次加工・使用痕ある剝片（14～15）（⅔）

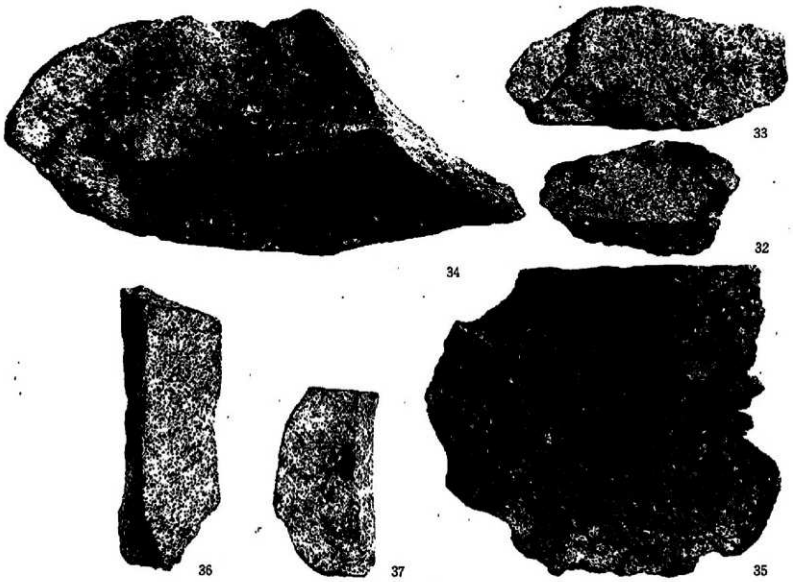
図版三六　遺物、石器（サヌカイト）(3)

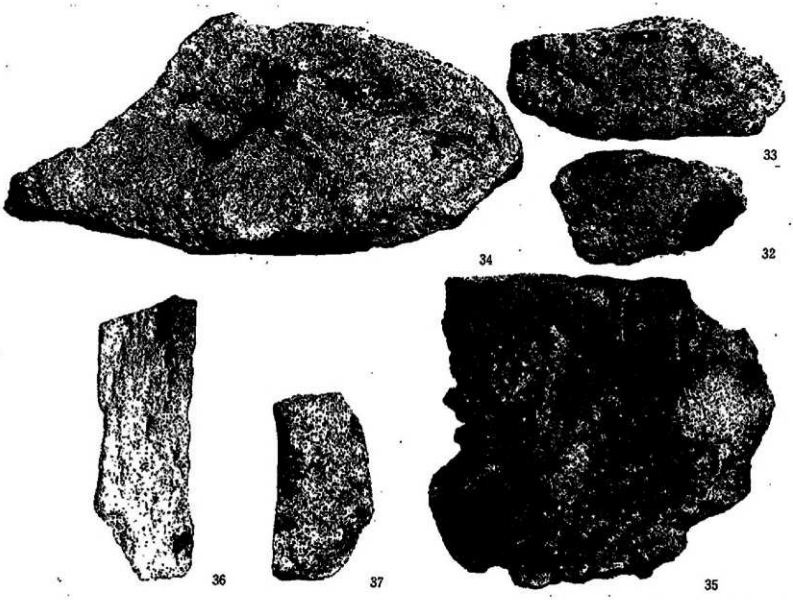




ナイフ型石器（16～17）、尖頭器（18）、削器（19～20）、楔形石器（21～22）、楔形石器の削片（23～24）、石鏃（25～30）（⅔）

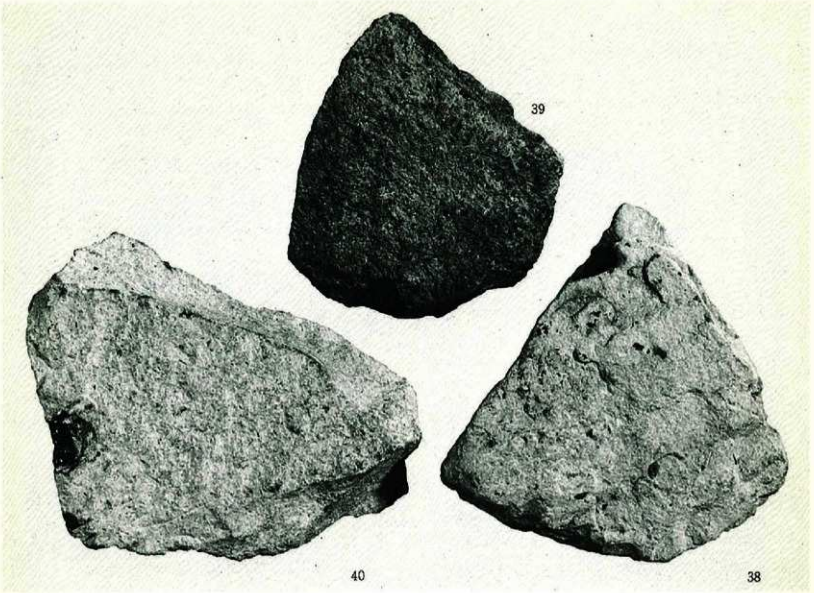
図版三七　遺物、石器（安山岩及び玄武岩）(4)

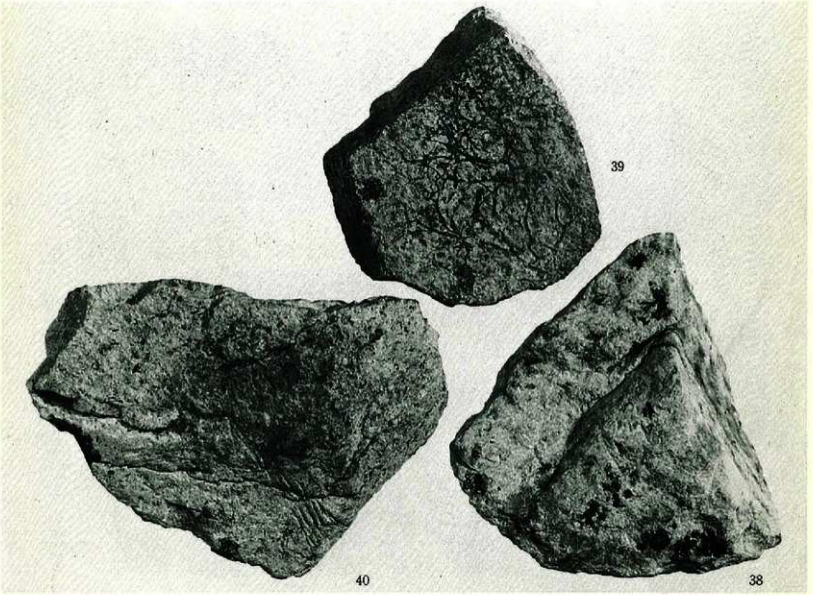




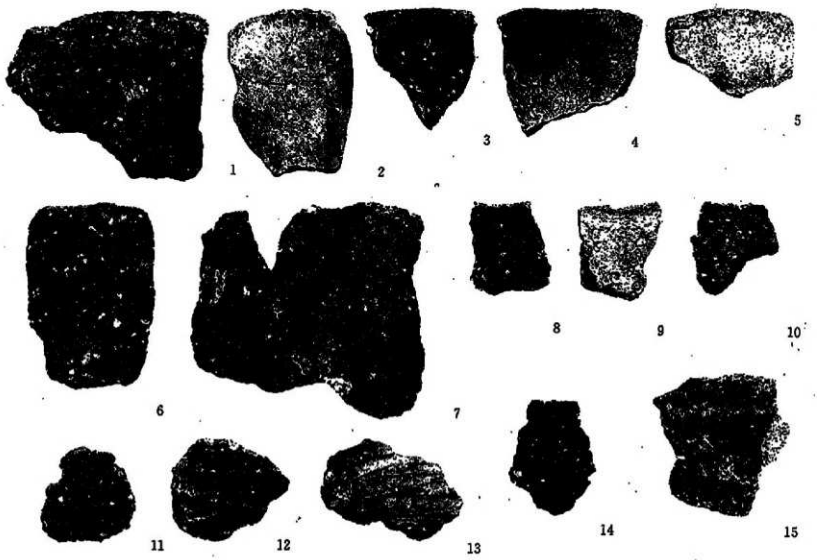
剝片（32～37）（⅔）

図版三八　遺物、石器（安山岩及び玄武岩）(5)

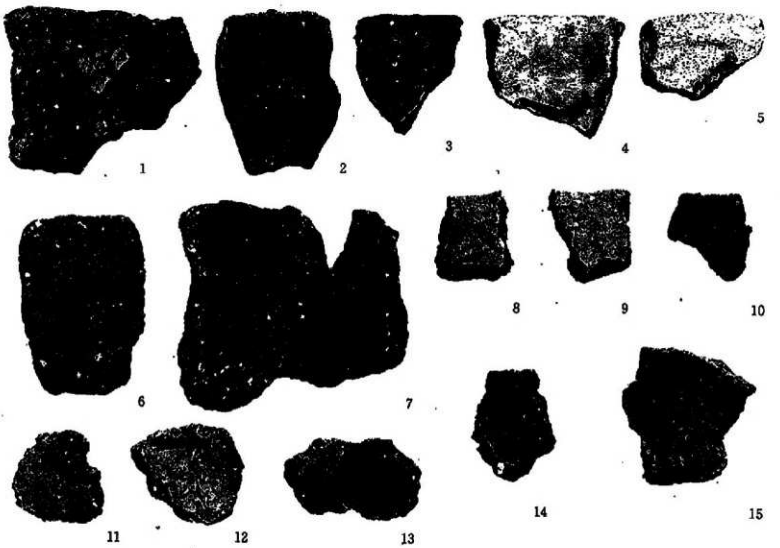




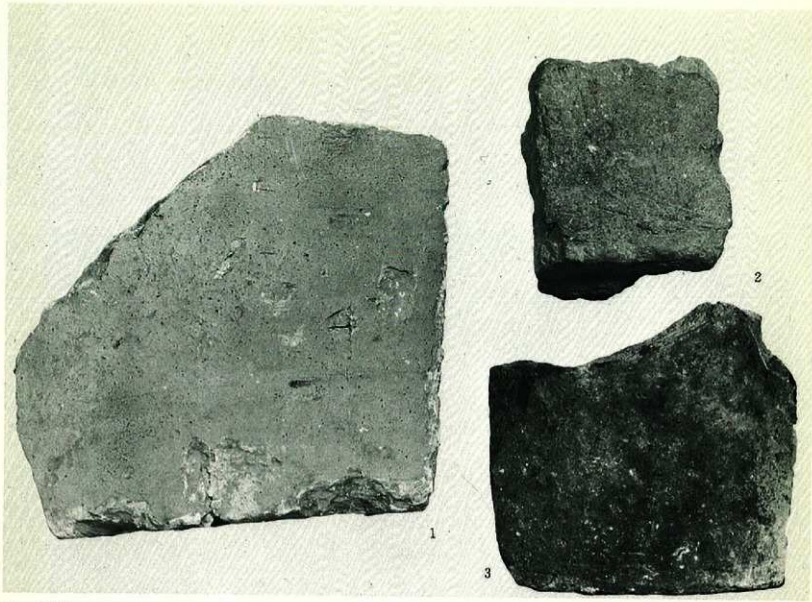
削器（38～40）（2/3）



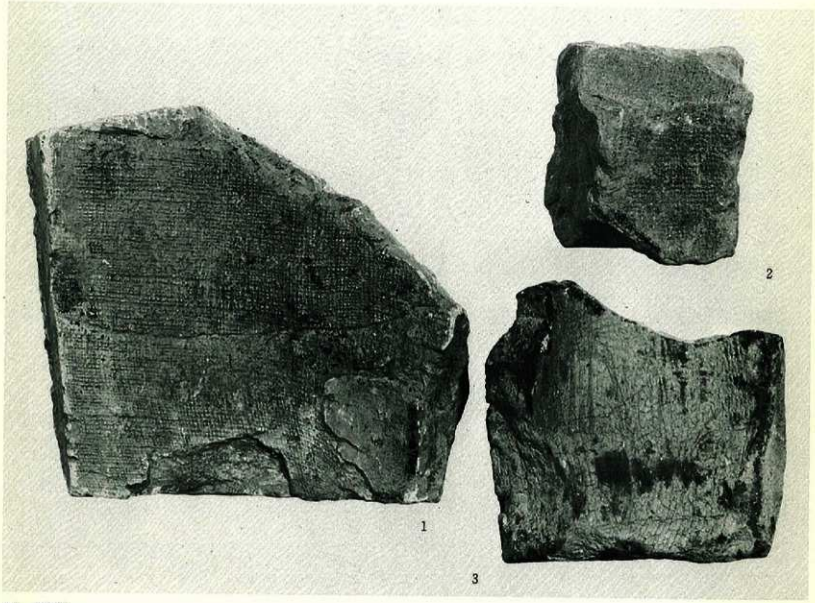
Aタイプ（1～5）、Bタイプ（6・7）、Cタイプ（8～10）、Dタイプ（11～15）　製塩土器（外面）



製塩土器（内面）



瓦、凸面



瓦、凹面

大堀城跡

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和59年3月30日発行

編集著作
発行者　財団法人　大阪文化財センター
大阪市城東区鴫野2丁目10番28号

印刷所　株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号